

第V章 遺構・遺物の検討

第1節 中河内沖積地における縄文時代後・晚期の状況

渡辺昌宏

本節では本遺跡出土資料を含めて、中河内地域の沖積地における縄文時代後・晚期の状況を説明したい。またそこに内在する問題点を整理し、今後の研究課題を明確化することに目的を置いた。なお出土状態の所見については、小野久隆、岡本敏行の両氏より教示を受けた。

1. 美園遺跡出土資料

すでに本書第IV章第2節第1項において述べているが、B、D、Fの各地区より検出されている。

(1) B地区

・後期：弥生時代前期後半の包含層及びその上層に堆積した砂層中から合計2片の土器が出土した（第393図2・3）。いずれも表面が摩滅しており、自然河川等によって上流から運ばれてきた可能性が大きい。⁽¹⁾ 2の土器は北白川上層1式の深鉢形土器口縁部破片に相当する⁽²⁾と考えられ、3は北白川上層1式ないし2式の深鉢あるいは鉢形の体部破片である⁽³⁾。

・晚期：弥生時代前期後半の包含層中から、混在した状態で深鉢形土器等の破片が5点出土している（本書第430図）⁽⁴⁾。いずれも船橋式の新段階に属するものであった。

(2) D地区

北端部に位置する自然河川（D N R 101）の砂層中より、おそらく深鉢形土器の体部破片と思われる資料が1点出土している。時期については判断が難しいが、後期ないし晚期に属するものであろう。

(3) F地区

F N R 102（南北方向で幅約18.5m、深さ約1m）より、後期前葉と晚期前葉の土器が数点確認されている。

・後期：第393図の1は浅鉢形土器口縁部破片であり、橋状把手が観察される。北白川上層1式に含めて考えたい。表面が摩滅しており、上流から運ばれてきたものであろう。

・晚期：第393図9はF N R 102の上層から置かれたような状態で検出された。表面はほとんど摩滅しておらず、体部下半には煤が付着していた。滋賀里式の深鉢形土器で、底部を欠損した約半分ほどの大形破片である。また生駒西麓産の胎土であった。10と11も滋賀里式の深鉢形土器体部破片であり、表面の摩滅が見られない。

本遺跡の場合は、後世の包含層及び自然河川中から資料が検出された。後期前葉の土器は摩滅

しており、自然河川によって運搬された資料である。晩期前葉の土器は、主に F N R 102 から検出された。自然河川の上部から出土したにもかかわらず、原位置を止めるような状態で見つかっている。このことは F N R 102 が形成した微高地に生活面が存在した可能性を暗示しており、周辺にこの時期の集落が営まれていたと思われる。最近の調査で、中河内地域の沖積地から縄文時代後・晩期を中心とする資料が確認されており、これらは自然河川に伴って検出される例が多い。自然河川が埋没後に形成した微高地を利用して、集落が営まれる例がかなりあるのではないかろうか。本遺跡 F 地区の状況も、それを物語る証であろう。

2. 縄文時代後・晩期の遺跡立地（第392図）

この地域の古地形復原については、早くから研究が行なわれてきた。その結果、河内湾から河内湖への変遷及び各時代の汀線が想定されている。近年この地域を南北方向に縦断する大調査が実施され、本遺跡を含む各遺跡の縄文時代後・晩期の地形環境が解明されつつある。

山賀遺跡の調査によって検出された 3 層の黒色粘土層が、鍵層としての役割をある程度果たすのではないかと考えられた。しかし本遺跡の状況とは必ずしも一致せず、今後より広い地域で事実の蓄積とその検討作業を必要としている。また本遺跡の調査結果から当時の自然河川の状況には 2 種類あることが明らかとなった。つまり川幅が比較的狭いにもかかわらず深く抉る川と、川幅が広くて浅い流れをもつ川である。このことは時期によって、流量及び流速に変化があったことを証明している。原因としては種々考えられるが、下流の河内湾（潟）の汀線位置と降水量の関係が注目される。単に海進・海退作用だけではなく、上流からの沖積作用が微妙に働いているようである。地形的にも広範囲な変化ではなく、小規模な変化が累積されていた可能性の方が大きい。

以上の観点に立てば、中河内地域の沖積地でも縄文時代後・晩期の段階に集落立地を可能にする土地がかなり存在したと想像される。その場所は、自然河川が埋没後に形成した微高地ではなかっただろうか。

3. 各遺跡の状況

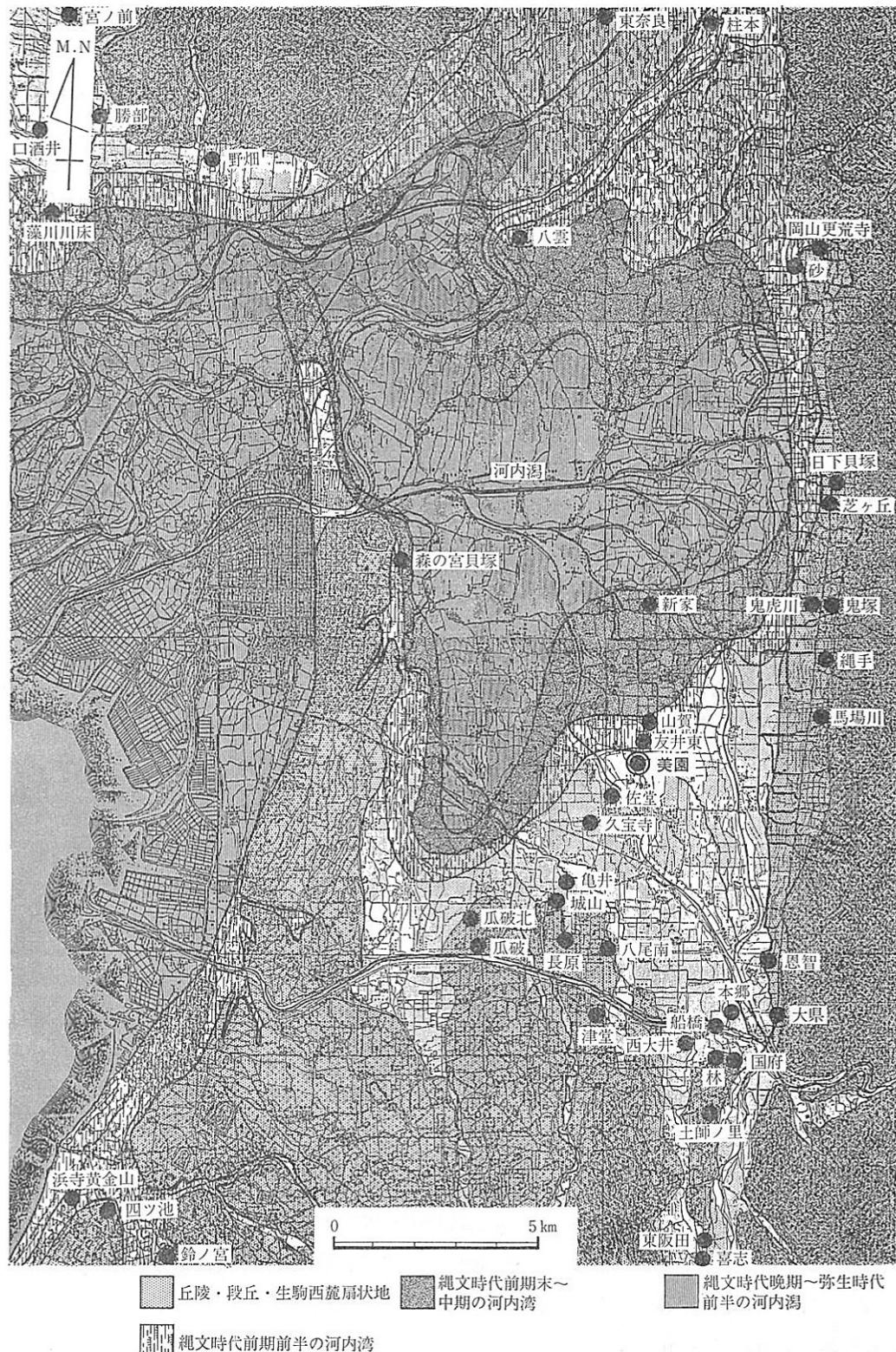
近畿自動車道関係の調査を中心に、中河内沖積地では 8ヶ所（美園遺跡も含む）の遺跡が明らかとなった（第392図）。以下各遺跡の状況を概略的に述べてみたい。

新家遺跡（第393図17・18）

第Ⅱ層（暗灰色粘土混粗砂）上面から、滋賀里Ⅲ式の深鉢形土器が出土している。第Ⅱ層は自然河川の堆積層である可能性が強く、その微高地上に生活面が存在したのではないかろうか。晩期中葉には、かなり河内潟に接近していたと考えられる新家遺跡にも人々が生活を始めている。

若江北遺跡（第393図15・16・21）

弥生時代前期の溝、弥生時代前期から中期の水田耕土内等の後世遺構に伴って出土した。土器は摩滅しており、流入した資料と言える。後期前葉と晩期の滋賀里式、船橋式の新段階の時期に属する土器がそれ認められた。原位置に近い出土を示す資料がないため判断できないが、少



第392図 縄文時代後期～晩期の主要遺跡の分布図 (8)

なくとも晩期前葉には近接して集落等の存在する可能性が大きい。

(20)
山賀遺跡（第393図4・6～8・12～14・19）

遺跡の南半部を中心に北白川上層2式(4)、北白川上層3式(6)、宮滝式(7)、滋賀里式(12～14)、船橋式新段階(19)の各時期に属する土器が検出された。その他木製容器、杭なども一緒に見つかっている。これらはほとんどが数本の自然河川中から認められており、出土状況の点では美園遺跡F N R 102の状況と類似していた。後期に属する資料には摩滅が見られたが、晩期のものは摩滅しておらず、その点も美園遺跡と共通する。また滋賀里式に属する資料が最も多く確認された。その他川床面より人と鹿の足跡も多数見つかっている。以上の事実から山賀遺跡においては、自然河川の形成した微高地上に立地する集落が晩期初頭の段階で出現する可能性が大きい。多くの点で美園遺跡と類似していた。

(23)
友井東遺跡

山賀遺跡と美園遺跡の間に位置しており、弥生時代中期の自然河川及び包含層中より船橋式土器の深鉢形土器破片が出土している。これらはほとんど摩滅しており、二次的な堆積を示すと考えられる。

(24)
佐堂遺跡

D地区の切り広げ部分より、溝覆土及び包含層中で船橋式新段階の深鉢形土器と畿内第I様式中段階小形壺形土器（生駒西麓産）が共伴した状態で検出された。佐堂遺跡の南西に隣接する久宝寺遺跡においても同様な出土状態を示しており、堅穴住居跡等の明確な遺構は認められないが両者一体となって集落を形成している可能性が強い。先述の溝がこの時期に伴うとすれば、貴重な遺構である。

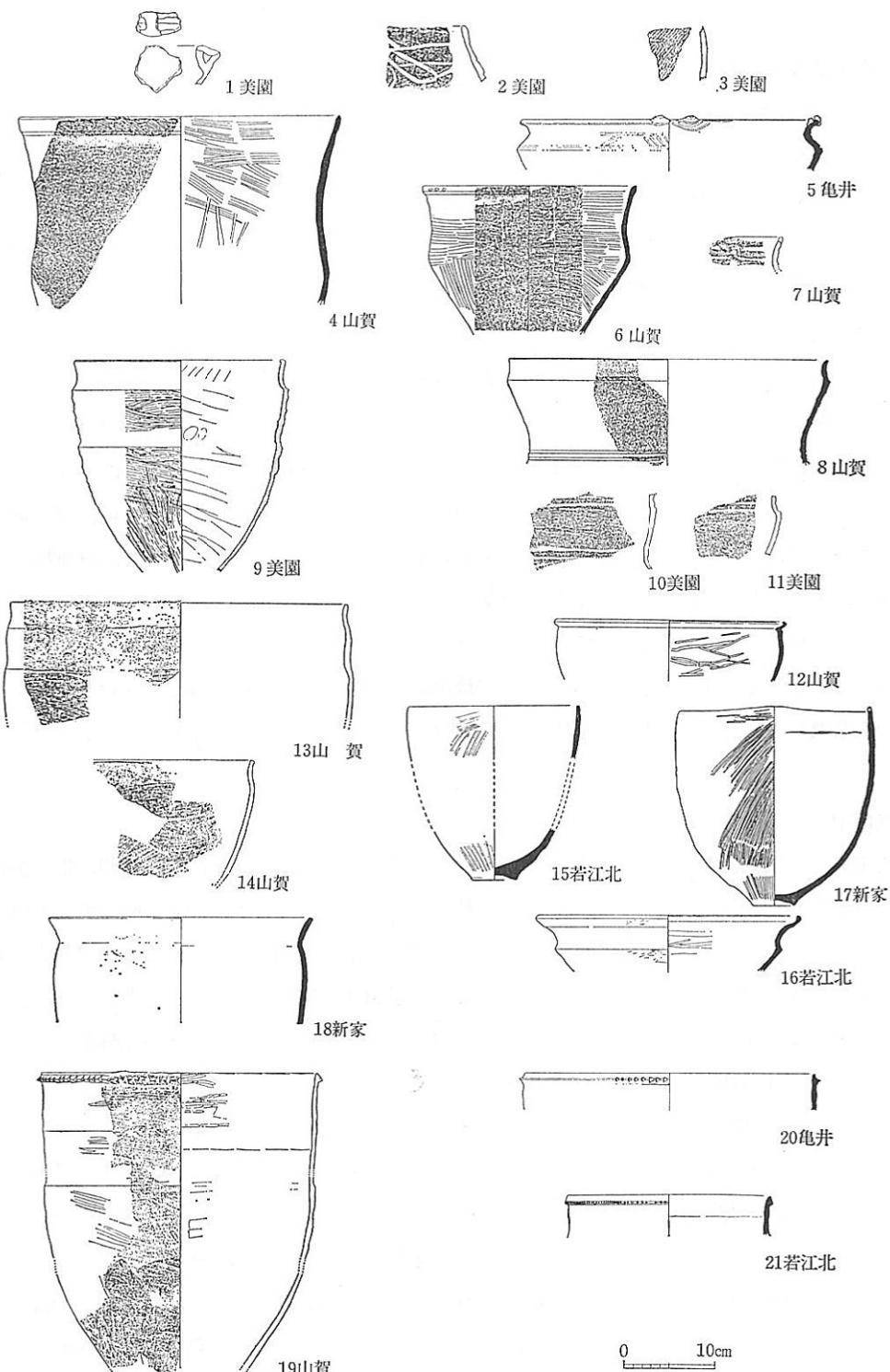
久宝寺遺跡

・北地区Aトレンチ——自然河川及びその上層に堆積するシルト層中から船橋式の古・新段階の土器が多数確認された。またこれに伴って畿内第I様式中段階の壺形土器（非生駒西麓産）も出土している。その他サヌカイトの剝片、石核状の大形剝片、石器等が検出されている。船橋式新段階の深鉢形土器に紋痕が付いたものも認められた。遺構は認められなかったが、かなり広範囲に多量の破片が見つかっている点から考えて、自然河川の形成した微高地上に立地する集落になるのではなかろうか。近年船橋式新段階と畿内第I様式中段階の共伴する例が、中河内地域を中心に増加している。いずれも共伴する畿内第I様式中段階の土器は壺形土器が多かった。

・南地区A・B・Cトレンチ——数本の自然河川が検出されており、その中からは後期から晩期にかけての土器が多量に見つかっている。主に晩期中葉以降の資料が多いが、後期中葉の土器も認められた。自然河川が形成した微高地上に後期中葉頃から生活が営まれるようであり、周辺に集落の存在する可能性が極めて大きい。

(29)
龜井遺跡（第393図5・20）

北白川上層2式ないし3式に属すると考えられる浅鉢形土器と船橋式新段階の深鉢形土器が検



第393図 中河内沖積地出土縄文時代後・晩期の土器

出された。小破片であり、なおかつ出土量が少ないと明瞭な点は多いが、後期前葉から中葉にかけての集落が近くにあるのではなかろうか。

4. 今後の研究課題

以下に述べる4つの課題が残されている。

(1)集落の確認作業

遺跡立地の点から見れば、自然河川の形成した微高地で集落の営みは十分可能であったと思われ、遺物の出土状態も間接的ながらそれを暗示していた。しかしながら竪穴住居跡等の遺構を伴った明確な集落の確認が不十分であり、その究明が残されている。

(2)生業形態と領域の解明

この地域に生活していた集団の生業形態の特色を明らかにする必要がある。残念ながら今のところそれを解明できる資料は見つかっていない。領域の問題としては、生駒西麓の扇状地に立地する遺跡との関係があげられる。土器の胎土においては、かなり生駒西麓産のものが入っているが全てではない。晩期にはそのほとんどが生駒西麓産で占められる。しかしながら後期中葉以降は、沖積地側に領域をもつ集団が現われる可能性が考えられよう。当時の沖積地は湿地帯が多く生活に適さないと思われてきたが、自然堤防及び微高地がかなり広がっていたと推定される。同時にそこは植物質食糧、獸、魚類の宝庫であり、ここを領域として占有する集団が出現しても不思議ではない。また生駒西麓側の集団とも密接な関係にあったと想定される。各時期における領域の範囲及びその交流を通して、沖積地部分の地域性が発生する過程を探求することが重要である。

(3)後期中葉から末葉にかけての画期

久宝寺、美園、山賀の各遺跡における所見から、早ければ後期中葉には沖積地側に集落が営まれる可能性が大きい。このことは地形的な条件に左右されるだけではなく、集団内部にも原因があるのでなかろうか。土器から見れば、この時期を境として近畿地方の独自性が強まりを示す。⁽³⁰⁾ 発見される遺跡の数が少ないと仮説の域を出ないが、この時期以降近畿全体で人口が増加するのではなかろうか。大形竪穴住居跡もこの時期に見つかっている例が多い。その結果として、沖積地へ集落が進出するとも考えられる。⁽³¹⁾

(4)縄文時代終末期の状況

近年縄文時代晩期末の問題が再検討されつつある。それは船橋式の細分を含めた、縄文時代の終末と弥生時代の開始に関する地域的なあり方に対してである。先述したように中河内地域を中心に数ヶ所の遺跡で船橋式新段階の土器と畿内第Ⅰ様式中段階の土器が共伴して認められた。これに対して山賀遺跡においては、それらの共伴が確認されていない。しかしながら、近接した地点で船橋式新段階の土器がまとまって出土している。⁽³²⁾ このことは弥生文化を最初に受容した集落が、縄文時代晩期末の段階においてもそれぞれの地域にあって中心的位置を占めていた可能性が大きい。土器の型式学的な研究も大切であるが、各地域ごとの遺跡の特徴を明確に把握すること

の方がより重要である。同時に個々の遺跡におけるあり方の違いを抽出し、それを比較する作業を続けていく必要があろう。縄文時代の最終末期は決して一様な終り方を示すものではなく、各地域、各遺跡ごとの差異を有していると考えられる。その解明を通して、中河内沖積地に立地する遺跡の地域的特質を具体化することが今後の課題である。

- 註(1) 生駒西麓扇状地及び羽曳野丘陵先端部を除く、河内平野低地部を指す。
- (2) 渡辺昌宏『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会 1981年。
- 〃 「縄文時代の淡輪」『攝河泉文化資料』第32号 1983年。
- (3) 註(2)文献参照。
- (4) 従来船橋式には新旧の存在することが指摘されていた。近年長原式と呼ばれているものとほぼ同様であるが、筆者としては長原式の概念が確定するまではこのように呼称したい。
- (5) 坪井清足「縄文文化論」『日本歴史1』岩波書店 1962年。
- (6) 自然河川の堆積作用によって川床面が上昇し、天井川化する。その後で流路が変わると旧河道部分が盛り上った微高地を形成し所謂自然堤防となる。美園遺跡の場合は、B地区弥生時代前期後半の集落とC・D地区の弥生時代中期後半の集落がそれぞれこの上に立地していた。
- (7) 山賀遺跡（中西靖人他『山賀（その3）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター1984年、生田維道編『山賀（その4）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター1983年）や久宝寺遺跡（寺川史郎氏、今村道雄氏、松岡良憲氏の御教示による。）があげられる。
- (8) 梶山彦太郎、市原実「大阪平野の発達史」「地質学論集第7号」1972年。
- (9) 大阪府教育委員会と（財）大阪文化財センターが実施している「近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う調査」を指す。
- (10) 寺川史郎・尾谷雅彦編『亀井・城山』（財）大阪文化財センター 1980年。
- (11) 中西靖人他『山賀（その3）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1984年。
- 生田維道編『山賀（その4）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1983年。
- (12) 山賀遺跡の場合、下層から順に第1～第3までの黒色粘土層が検出されている。本遺跡の場合、山賀の第2黒色粘土層と第3黒色粘土層に相当する層が検出された。山賀の第2黒色粘土は晚期前半に比定しているが、本遺跡ではF N R 102の所見より晚期初頭以前に相当する。また第1黒色粘土は、山賀遺跡で晚期後半に比定しているが、本遺跡C地区では弥生時代前期前半の遺物包含層を形成していた。
- (13) 前者は晚期前葉のF N R 102であり、後者はB地区弥生時代前期遺構面を形成する晩期末の自然河川。
- (14) 美園遺跡と山賀遺跡の違いを見ても海進、海退現象を含めて河内平野一帯が一様に水没する状況が、縄文時代後・晩期に繰り返したとは考えられない。
- (15) 自然河川の堆積作用及び流路の移動に伴う後背湿地の変化等が、比較的大きな河川の流域単位で発生していたと思われる。
- (16) ①石神幸子「河内平野の縄文時代」『河内平野を掘る』（財）大阪文化財センター 1981年。

- ②村上年生編『新家(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (17) 註⑯②文献参照。
- (18) 田辺昭三・加藤修編『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡発掘調査団 1973年。
- (19) 中井貞夫他『若江北』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年。
- (20) 註⑩文献参照。
- (21) 註②文献参照。
- (22) 末永雅雄『宮滝の遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 1944年。
- (23) 龜島重則氏の御教示による。
- (24) 枝本哲氏、森屋直樹氏の御教示による。
- (25) 寺川史郎氏の御教示による。
- (26) 佐堂遺跡、久宝寺遺跡以外にも 東大阪市鬼虎川遺跡西端部貝塚（阿部嗣治氏の御教示による。）でも確認された。鬼虎川遺跡の場合は、セタシジミを主とする貝塚に伴って両者の土器が見つかっている。
- (27) 今村道雄氏、松岡良憲氏の御教示による。
- (28) Aトレンチの川は幅約40m、Bトレンチ幅約100m、Dトレンチでは幅が10~15mの自然河川がそれぞれ見つかった。
- (29) 註⑩文献参照。
- (30) 一乗寺K I式以降、土器の文様に見られる類似性が近畿地方一帯で強く認められ、瀬戸内地方東部へ影響を与えるようである。
- (31) 大阪府岬町淡輪遺跡（註②文献参照）や京都府城陽市森山遺跡（「1森山遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第6集』城陽市教育委員会 1977年）等で北白川上層3式から宮滝式にかけての大形竪穴住居跡が確認されている。
- (32) 註⑩文献参照。
- (33) 生田維道編『山賀(その4)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年。

第2節 美園遺跡の弥生時代前期集落

岡本敏行

1はじめに

美園遺跡では、今回の調査で弥生時代前期の集落の存在が明らかになった。しかも、集落の中心部を南北に調査した形となり、その実体をある程度把握することができた。この集落の時期は、厳密には弥生時代前期から中期初頭までの時期である。しかし、出土遺物には縄文時代晩期のものから弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式）までのものがあり、その大半は前期新段階に属するものであることから、集落の中心時期もこの時期であったと思われる。また、遺構の重複関係より3もしくは4時期に分けることができるが、遺物の出土状況からは、それを明確にすることはできなかった。おそらく連続的に営まれたものと思われる。

以下、美園集落のあり方を検討してみよう。

2立地

美園遺跡はいうまでもなく、河内平野の沖積地に位置している。一般に沖積地における集落の立地は自然堤防の微高地上に営まれていると想定されてきた。事実、美園遺跡では、長瀬川によって形成された自然堤防地点に位置している。しかし、これはあくまでも現在の自然堤防であり、美園遺跡の前期弥生集落が営まれていた時期が、同じように自然堤防であったとはかぎらない。むしろそうでなかつた可能性のほうが強いであろう。なぜならば、現自然堤防の形成は、長瀬川が、現地点を流れるようになったのちで、10世紀以後本格的に形成されたものと思われるからである。⁽¹⁾ 当時の長瀬川がどこを流れていたかは、現在までの調査では、小流路はいくつか検出されているが、明確にはされていない。

美園の弥生前期集落、特に居住区と考えられる地域（B地区）は縄文時代晩期の自然河川の上に位置している。この河川は、上流より砂の堆積をもたらし、まわりの地形よりわずかに高く砂洲状の微高地を形成している。集落はまさにこの上に位置しているのである。

河内平野のような沖積地での集落の立地条件は、まず洪水等から集落を守ることも大事であるが、第1に水はけのよいところが最良の条件であったと思われる。そして、次に集落の位置が決定した後に、洪水等から集落を防ぐために、環濠のような溝をめぐらす土木工事が行なわれたと想定される。このような観点から美園の弥生前期集落は、水はけの良い、旧河川上の砂の上に位置し、しかも周辺よりも若干高いことからある程度の乾燥状態をつくりだしていたものと思われる。なぜならば、下層の旧河川及びそこに堆積している砂は、そのまま暗渠的役割を果たしているからである。

このような立地条件は、その後の古墳時代前期集落においても同様で、下層に弥生時代中期の河川が流れていたところに立地し（B地区ではBNR202の上層、C地区ではCNR201の上層

で、それぞれ、古墳時代前期の集落が検出されている。）、また、南接する佐堂遺跡の古墳時代前期集落でも同様のことが指摘されている。⁽²⁾今後、沖積地における集落の立地を再検討してみる必要がある。

ところで、美園の弥生前期集落の立地する砂洲状の微高地は、南側が高く、北側へゆるやかに傾斜している。これは、地形によるもので、旧河川の流れの方向のためである。周辺には、大和川水系の長瀬川やその支流が幾条にも流れ、美園周辺は、これらの河川の氾濫原であり、水田耕作を生業とする当時の人々にとって絶好の生活舞台を提供していたことはいうまでもないことであろう。なお、ボーリングデーターによると美園遺跡の下層、T.P.-10m前後のところで低位段丘相当層時期の古長瀬川が検出されており、さらにその上層で砂礫層がレンズ状に厚く堆積⁽³⁾していることから、元来から、この地点が周辺の地域よりレベルが高く、しかも水はけがよかつたのかもしれない。

3 集落の構造

（1）集落の範囲

A地区のANR201の南側からB地区南端のBSD253の間で遺構がほぼ全面で検出されていることから、この範囲が集落の中心部分であったと思われる。すなわち、集落の北限はANR201によって画され、南限はBSD253によって画されている。この河川及び溝の外側では、集落に関係する遺構はほとんど検出されていない。よって南北約200mの範囲が集落であったことがわかる。

東西の範囲については、トレンチ幅が狭かったことから明確にしがたいが、集落の立地する砂洲状の地形から70m前後であったと想定される。したがって、美園の弥生前期集落は南北約200m、東西約70mの南北に長い集落であったことがわかる。

（2）居住区

住居 住居は14棟検出したが、すべて竪穴住居で、同じ沖積平野に立地する山賀遺跡とは異なる⁽⁴⁾。住居址群がA・B・Cの3群に分かれることはすでに第Ⅳ章第2節第2項1のB地区のところで述べた。すなわち、北側のA群(BSI201~203)、中央部南よりのB群(BSI204・205)、そして南側のC群(BSI206~214)である。この内、B群の住居跡は他の群と異なり最も古く方形でしかも小さいことから、実際に住居であったかどうかは不明である。もしかすると工房的な建物であったかもしれない。A群とC群は円形もしくは梢円形の住居で、床面積は14.5~27.0m²と異なる。これらA・Cの各群が、近藤義郎のいう「単位集団」で、都出比呂志のいうところの「世帯共同体」であろう。そして、A群とC群の結合体、すなわち美園集落全体が、1つの農業共同体を形成していたと考えられる。

倉庫 4棟検出された掘立柱建物が、高床式の倉庫であったと思われる。しかし、柱穴や柱根の残るピットが多数あることから、従来はもっと多くの建物があったと考えられる。これら4棟の高床式倉庫は、住居址群同様のA・B・Cの3群に別けることができる。すなわち、各群ごと

に倉庫をもち、各群ごとに倉庫を管理していたものと思われる。倉庫の面積は2.6~4.8m²でそれぞれ異なり、しかも、A群とB群の倉庫が、1間四方のほぼ正方形であるのに対して、C群では、間数が1間以上あり、長方形を呈し、若干大きいようである。これは、各群の収穫高によるものであろうか。

井戸 不思議なことに井戸は1基も検出されなかった。美園の弥生前期集落は前述のように、旧河川の砂の上に位置していることから、掘っても水がすぐ抜けるのではないかろうか。井戸がなくとも集落が営まれているということは、水が比較的入手しやすいということであろう。ということは、近くに長瀬川等の水を豊富にたたえた河川が流れていたということと、おそらくそこからひっぱってきた溝がいくつかあったのであろう。

溝 集落内からは多数の溝が検出された。これらの大半は、集落内の排水が主要な機能であったとともに、井戸のかわりをするような常時水をたたえていたような溝もあったと思われる。現に埋土が粘土や粘質土である溝が多いことから、あまり水流のない澆水した状態で徐々に埋没していった溝が多かったことがわかる。しかし、B S D 253のように砂のみが堆積するような、一時にかなりの量の水が流れたことを物語るような溝もある。また、B S D 242のように排水機能を有するとともに、C住居址群の北を画する溝もある。さらに集落を画する溝として前述のB S D 253がある。この溝は南側だけを画するもので環濠とはならないが、集落自体は、北側にA N R 201、東・西側が低湿地帯であり、南側を画することによって自然の環濠状集落となるのである。

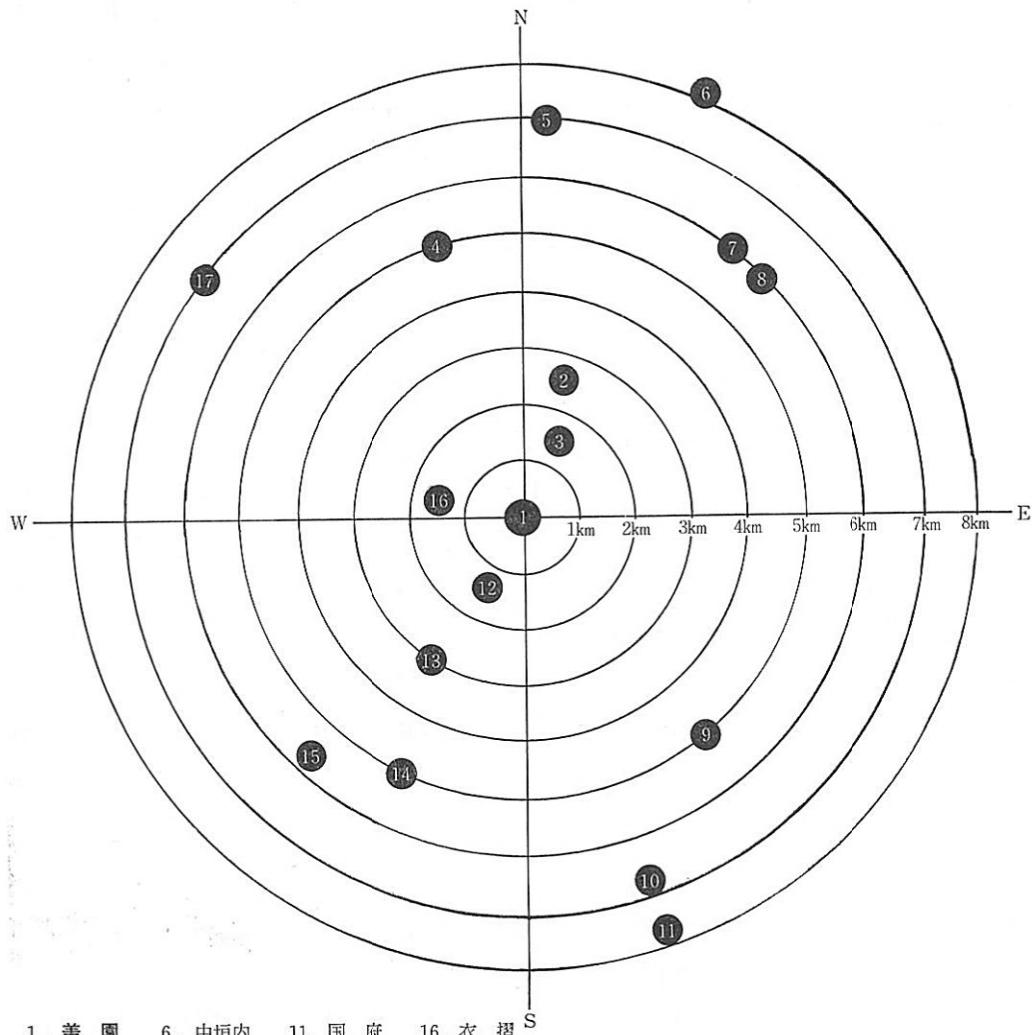
その他 工房跡の可能性としてB S I 204・205及びB S K 269、B S X 207がある。また、B S K 258とB S K 260は、住居跡に近接していること、遺物の出土状況や出土遺物から廃棄物処理用の土坑であったと思われる。

(3)生業

水田 水田は、集落の北側 A S D 201より北側で検出された。この水田は近接する友井東遺跡に続いており、間に100mほどの沼状の湿地帯があるものの、山賀集落の水田とほぼ接していることになる。⁽⁷⁾ もしかすると共同で耕していた可能性があり、用水路などは、共同で掘削し、利用していたことは十分に考えられる。このように集落と集落が結合することによって政治的結合体が生まれたのかもしれない。また、集落の南限であるB S D 253の南からC地区にかけて、湿地帯が広がっていることからやはり水田があった可能性がある。もし水田があったならばC S D 201は用水路的機能を有した溝であったと想定される。このように考えるならば、集落の東側も西側も、長瀬川水系の氾濫原であり、湿地帯であることから水田であった可能性が強い。すなわち、集落の周辺はすべて水田であったと考えられる。⁽⁸⁾

狩猟・漁撈 狩猟の場としては東側の生駒山麓が考えられ、動物性蛋白としてはイノシシやシカを主として食していたようで、これらの骨が多数出土している。漁撈は河内湖や周辺の河川を利用していたと考えられるが、山賀遺跡のようにヤスや筌、たも、土錘が全く出土していないことから漁撈はあまりさかんでなかつたようである。ただ、浮きに使用していたと考えられる孔あ

きの軽石が出土していることを指摘しておきたい。またBSK258やBSK260からセタシジミの貝殻が多数出土していることから、近くの川から取ってきて食べたものと思われる。



第394図 美園集落と周辺の縄文時代晩期から弥生時代前期主要集落の位置関係図

(4) 墓域

集落の中央部で木棺墓1基(BSX202)と土壙墓3基(BSX203・204・206)を検出した。この地域が、墓域であるとは、かならずしも断定できない。ただA住居址群とC住居址群の中間であることと、集落のまわりが、水田もしくは湿地帯であることを考え合せれば、集落の中央部分が墓域であってもおかしくはない。また、方形周溝墓は、現在のところ、その可能性があるものが1基(BSD201)あるものの、確実なものは現在検出されていない。今のところ河内平野

では、弥生時代前期の方形周溝墓が検出されていないことから、稻作の始まった弥生時代前期では中期以後のように、階層分化が明確になされていなかったのかもしれない。

4 周辺集落との関係

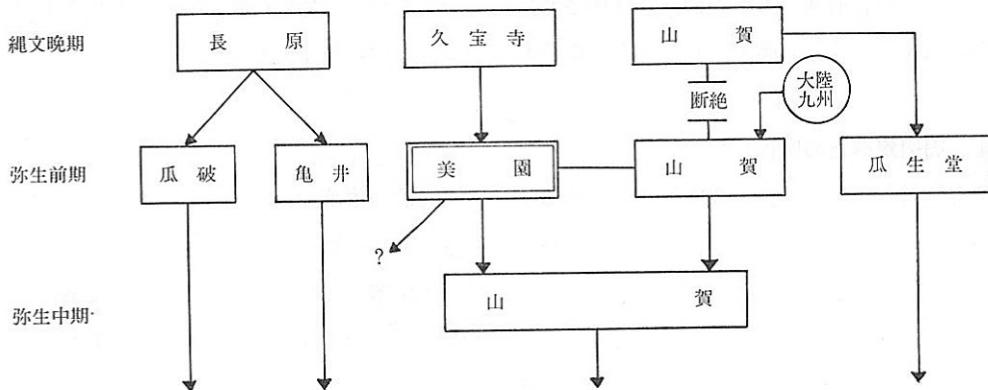
美園集落の周辺には、第394図でもわかるように同時期の集落が多数近接して存在していることがわかる。これらの集落は、おそらく環境の持つ包容力の限界を越えないかぎり、隣接集団との争いは生じることはなかったと思われる。⁽⁹⁾むしろ美園集落などは山賀集落と耕作面が接しており、導水施設の関係から共同で耕していた可能性もある。このような集落と集落が結びつくことによって政治的結合体が生まれてきたものであろう。

また、これら周辺の集落とは当然交流が盛んに行なわれたものと考えられる。事実、生駒西麓産の土器や、二上山周辺でしか産出しないサヌカイト製の石器が多数出土していることからもわかる。さらに土器の中には、遠く近江系の土器や、山口県響灘沿岸地域の土器が出土していることや石庖丁などは、紀ノ川水系産の緑色結晶片岩製や、淀川水系産の粘板岩製のものもあることからすでにこれらの地域とも交流がもたれていたことが想定される。しかし、サヌカイト製の石器については、原石や剝片が大量に出土していることと、剝片の中には接合が可能なものもあることから、美園集落の人々はおそらく直接二上山周辺までサヌカイト原石を採集いでかけたものと推定する。そして、その原石を持ち帰り美園集落内で石器製作を行なっていたのではないか。すなわち、この時期は石材産出地に個別的に向いて採集するという縄文時代以来と同じ形であり、弥生時代中期以降のような自分たちで集落の周辺を開拓した土地の専有権あるいは所有権がいまだ明確に確立されていなかったのではないか。

5 集落の推移—結語にかえて—

美園地域における集落の出現は、縄文時代晩期の土器片が少量ではあるが出土していることから、縄文時代晩期までさかのぼる可能性がある。しかし、本格的な集落の出現は、やはり弥生時代前期になってからであろう。この前期に出現した集落は中期初頭（畿内第Ⅱ様式の時期）にはすでに廃絶してしまうが、遺構面上には40cmの厚さで、遺物包含層が形成されていることから、洪水などによって一時に消滅したのでないことがわかる。では、美園集落はなぜ消滅したのであろうか。ここに1つの仮説をたててみることにしたい。

生駒西麓地域は別として、この地域の縄文時代晩期の集落には長原遺跡、久宝寺遺跡、山賀遺跡が想定される。山賀遺跡は、その後弥生時代前期の集落が営まれているが、そこには縄文時代晩期からの連続性はなく、明らかに断絶があるとされる。⁽¹⁰⁾すなわち、長原遺跡や久宝寺北遺跡では、少量ではあるが、弥生時代前期土器（古段階～中段階のもの）が混在して出土していることから、ある程度の連続性が考えられるが、山賀遺跡の前期集落からは縄文晩期の土器が全く出土していない。縄文晩期の山賀集落の人々は、河内湖の汀線が後退することによって、より河内湖



第395図 美園弥生前期集落と周辺集落の推移関係

に近い瓜生堂や、さらには高井田や新家周辺に移動していったのではなかろうか。これらの人々が、後の瓜生堂遺跡や高井田遺跡、新家遺跡の弥生集落を形成した人々と理解したい。

一方、弥生時代前期の山賀集落は、新たに稲作をもたらした大陸もしくは一度九州に上陸してから再びこの地に移住してきた渡来人たちがつくった集落と考えたい。彼らは、稲作のみならず従来の竪穴住居とは異なる掘立柱建物や縄文式土器とは異なる弥生式土器をもたらした。この新技术をもった、前期の山賀集落の出現によって、長原や久宝寺北の縄文人たちは大きな影響を受けたことは想像できる。そして彼らもしだいに狩猟生活から稲作へと変化していたものと思われる。長原遺跡や久宝寺北遺跡では、縄文土器出土の割合に比べて弥生前期の土器が極めて少ない。そこで考えられるのが、彼らは、より水田農耕の営みやすい地域へ移動したのではないかということである。

大胆な仮説であるが、長原の人々は瓜破と亀井に別れ、そして、久宝寺北の人々は、約1km北の当美園地域に移動したものではなかろうか。瓜破と亀井に移住した人々は、その後瓜生堂などと共に大規模な弥生集落を形成したものと思われる。同様に美園地域における人々も既述のような弥生前期集落を形成していったのである。特に美園地域は山賀集落に近く影響も大であったことから、水田経営も共同で行なうようになり、しだいに山賀集落に吸収されていったのではなかろうか。

しかし、美園集落では弥生中期初頭（畿内第Ⅱ様式）の時期になって、北側の水田地帯が、友井東遺跡で検出された弥生時代中期の大規模な自然河川⁽¹¹⁾及びその氾濫によって崩壊してしまったため美園地域では生活ができなくなり、集落はしだいに消滅し、集落の人々は二手に分れていったと推測する。一方は山賀集落に吸収され、もう一方は山賀ムラの分村として美園地域の東もしくは南東地域に新たに集落を形成したものと思われる。この分村した集落が後の美園遺跡の南側で検出した弥生時代中期集落を形成した集団であったと考えたい。また、美園旧集落地域は、その後の人口増加にともなって水田化されていったようである。BSA201等の畦畔は、この時期のものである。

その後、弥生時代中～後期にかけて美園周辺は、大規模な河川の氾濫により、沖積化がいっそしきになり、この時期に 1.5m もの堆積層を形成させ、再びこの地域に本格的な集落が営まれるようになるのは古墳時代前期になってからである。

以上、美園遺跡の調査成果から集落のあり方を検討してみたが、整理が終っていない現段階では、それを十分に検討することができなかった。整理が進むにつれて、新知見も得られると思うので、後日改めて検討することを約束したい。

- 註(1) 長瀬川が現地点を流れるようになったのは 10 世紀以後とされる。〔阪田育功「河内平野の形成と河川の変遷—長瀬川流域を中心に—」『佐堂』(その 2-1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。〕
- (2) 阪田育功「河内平野における古墳時代前期集落の成立変遷」前掲註(1)所収。
- (3) (財)大阪文化財センター編『龟井・城山』1981年の第10図による。
- (4) 美園遺跡より約 1.5Km 北側に位置する山賀遺跡では、すべて掘立柱建物である。〔大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター『山賀』(その 3) 1984年〕なお、住居が異なるのは、美園地域が山賀地域より、より乾燥していたためか、または、山賀集落の人々が、美園集落の人々とはまったく異なる人々であったのか（例えば、大陸から直接稻作をもたらした人々の集落）はわからない。しかし、後者については、魅力ある意見である。
- (5) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』6 卷 1 号 1959年。
- (6) 都出比呂志「農業共同体と首長権—階級形成の日本の特質—」『講座日本史』1.古代国家 1970年。
- (7) 龟島重則編『友井東』(その 1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (8) 生田維道編『山賀』(その 4) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (9) 酒井龍一「弥生中期社会の形成—畿内社会の形成とその構造—」『歴史公論』3 1983年。
- (10) 西口陽一編『山賀』(その 3) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (11) 註(7)と同じ。

第3節 美園遺跡出土の弥生時代前期後半～中期初頭の土器について

井 藤 晓 子

はじめに

美園遺跡出土の弥生土器はコンテナ（55×35×15cm）に約1000杯あり、うち900杯がB地区弥生時代前期後半～中期初頭遺構面から検出された土器である。このうちトレンチ部に属する800杯分の大略整理を行なったので、その概要を報告し、美園遺跡出土土器の特徴を述べたい。

また、本遺跡の土器には生駒西麓で製作されたもの（「生駒西麓産」と以下、呼称）と本遺跡周辺で製作されたもの（謂ゆる平野部の土器）、河内地方以外の他地域で製作され搬入されたものの三者がある。他地域からの搬入品は製作技法と胎土の違いから認定したが、紀伊産土器を除けばほとんど不明である。平野部の土器は美園産とともに平野部内の他集落の土器が含まれるかもしれないが、現状では区別困難であり、ここでは一つのものとして考えた。したがってほぼ全体を占める生駒西麓産と平野部の土器々々にかかわる製作集団が、単に土器材料の採集地の違いということだけで両者ともに本遺跡に所在するものであるのか、あるいは別個に存在するのか、という問題点を念頭におき、両者を比較したい。これは、河内地方の土器胎土に違いがあることが認識されて以来、河内地方の集団関係をつかむための一つの糸口としての命題である。

なお、この遺構面で検出された土器の口縁部を含む破片および完形品を1点として数えた全体量に対する第Ⅱ様式土器の割合は2.0%である。他に縄文時代後期、晩期土器がこれらに混在して数点検出された。縄文晩期土器については弥生時代前期土器との共伴関係が問題となるので本稿でも若干ながらとり扱う。

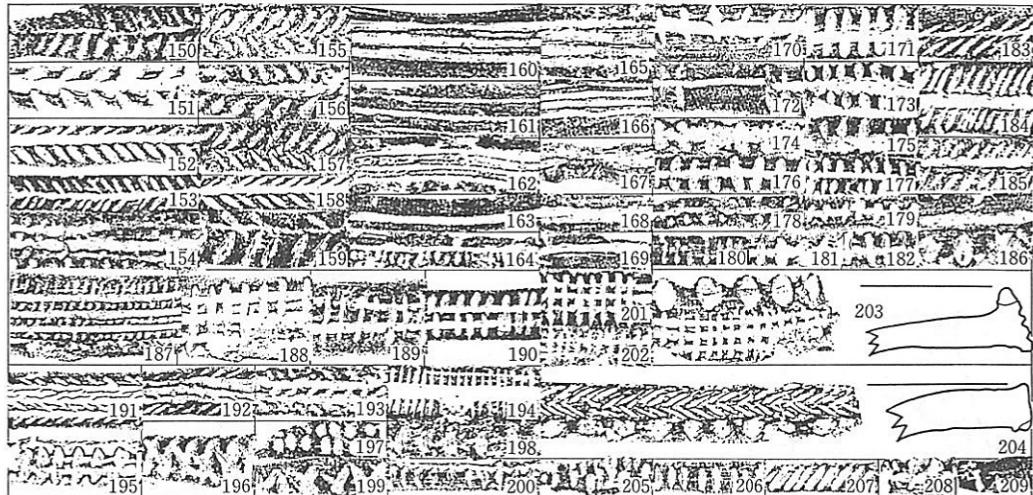
1) 弥生時代前期の土器様相

B地区トレンチ部出土の土器は、弥生時代前期を前半、後半に大別した場合の後半に所属するものが中心となる。しかし中には前半に属すと思われるものも含まれる。また、第Ⅱ様式前半の土器が混在することから、正確にいえば弥生時代前期前半の新しい段階から後半の新しいところを含めた資料であるといえよう。かつて井藤が述べた前期I-C段階～Ⅱ段階にあたるものである。

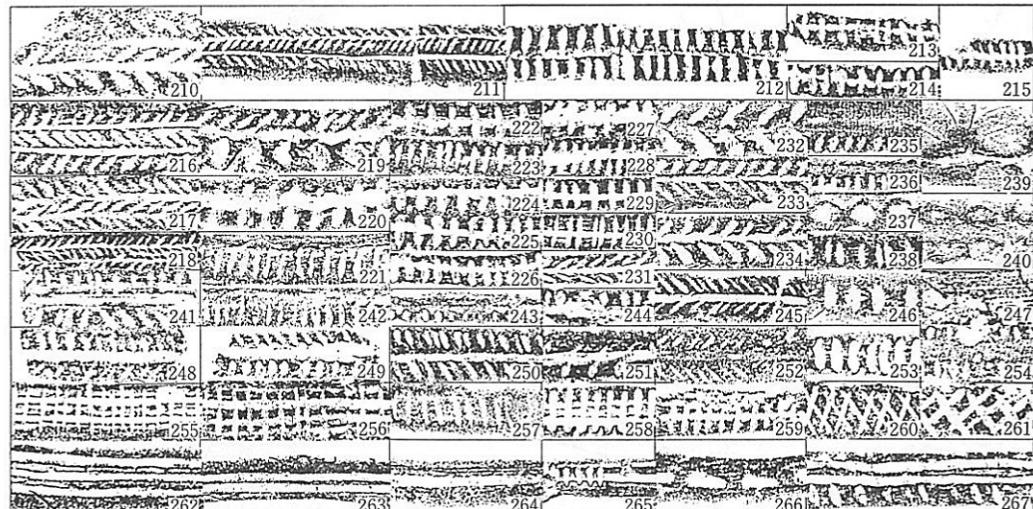
なお、前半に属する東大阪市山賀遺跡の土器は、黒色物質を器面全体に塗布した上に赤彩文で色どられたものが多いこと、暗茶褐色の色調をもつ生駒西麓産の土器が多いこと、などから全体的に黒褐色系の色調が強調されるが、美園の土器は明茶褐色系の明るい色調をもつた土器が多い。また、相対的に山賀の土器は小型で、美園の土器は大型品が多い。遠賀川式土器の影響関係によって前期を前半、後半に二分する一要因ではある。

<壺>

(形態) 『弥生式土器集成 本編2』(1968) 近畿地方の項で、前期後半の壺には「大きく広



第396図 第I様式土器（壺口縁端部文様一生駒西麓産土器以外のもの）

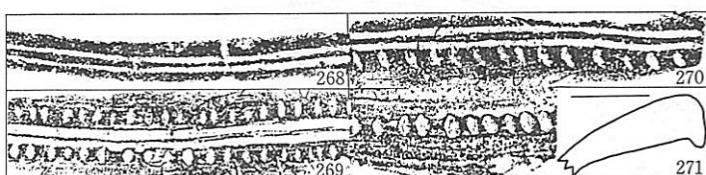


第397図 第I様式土器（壺口縁端部文様一生駒西麓産土器）

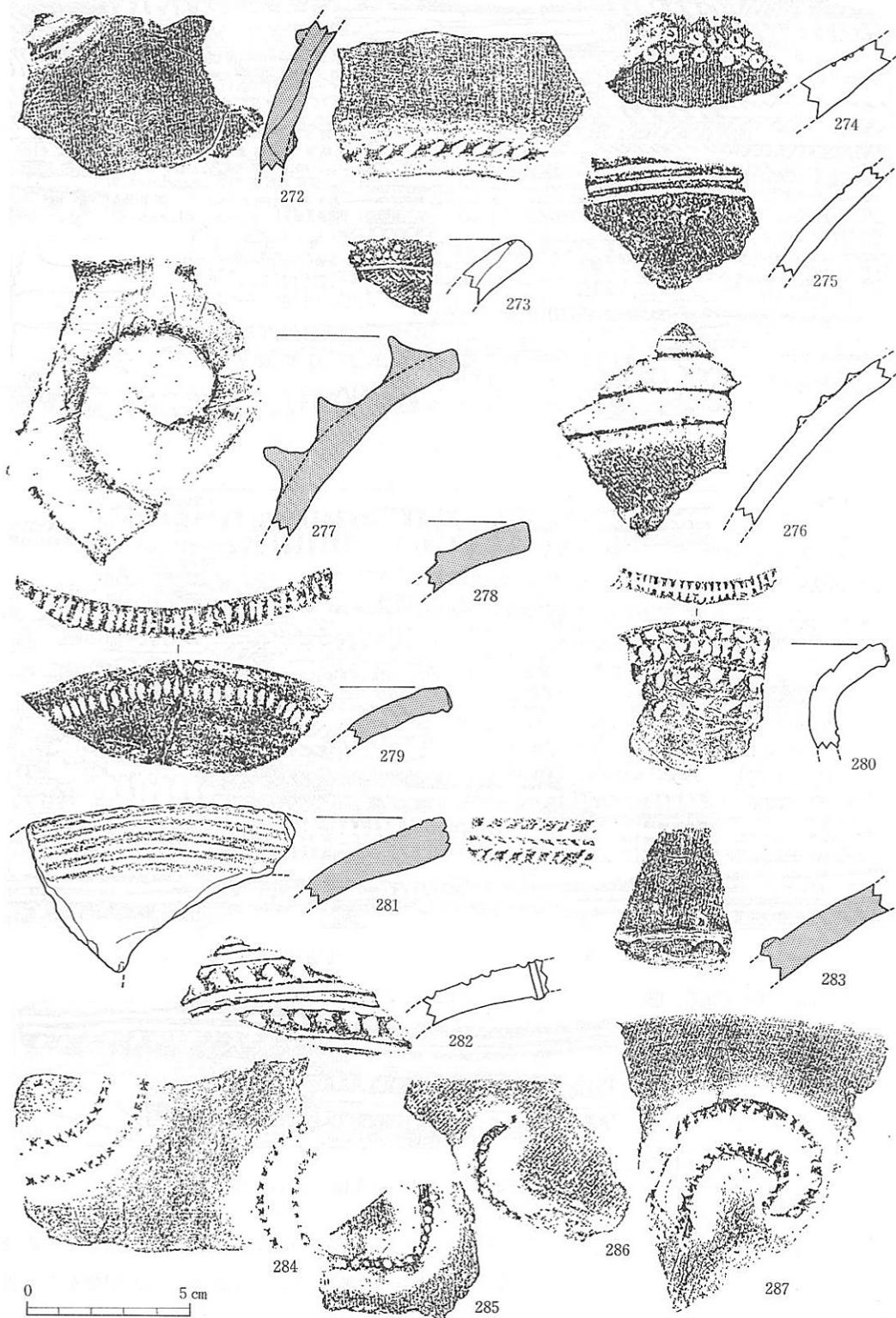
がる口縁部と長い頸部、膨らむ体部」をもったa形態と、「体部の膨らみが小さく丈高の器体」をもつb形態の二種があり、a→bの形態変化が指摘された。本

遺跡出土土器でみれば、a、b、いずれの形態も存在し、したがって、形態変化に通じるものであるかの確認はできていない。むしろ土器の地域性を示す形態として文様などとの関係からの再整理が必要であろう。

（文様） 口縁部端面に文様をもつ例も多い。特殊なものとして布目压痕文と組み合せた例があ



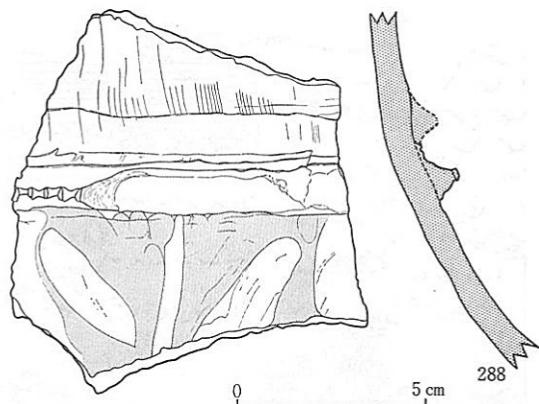
第398図 第I・第II様式土器（壺口縁端部文様）



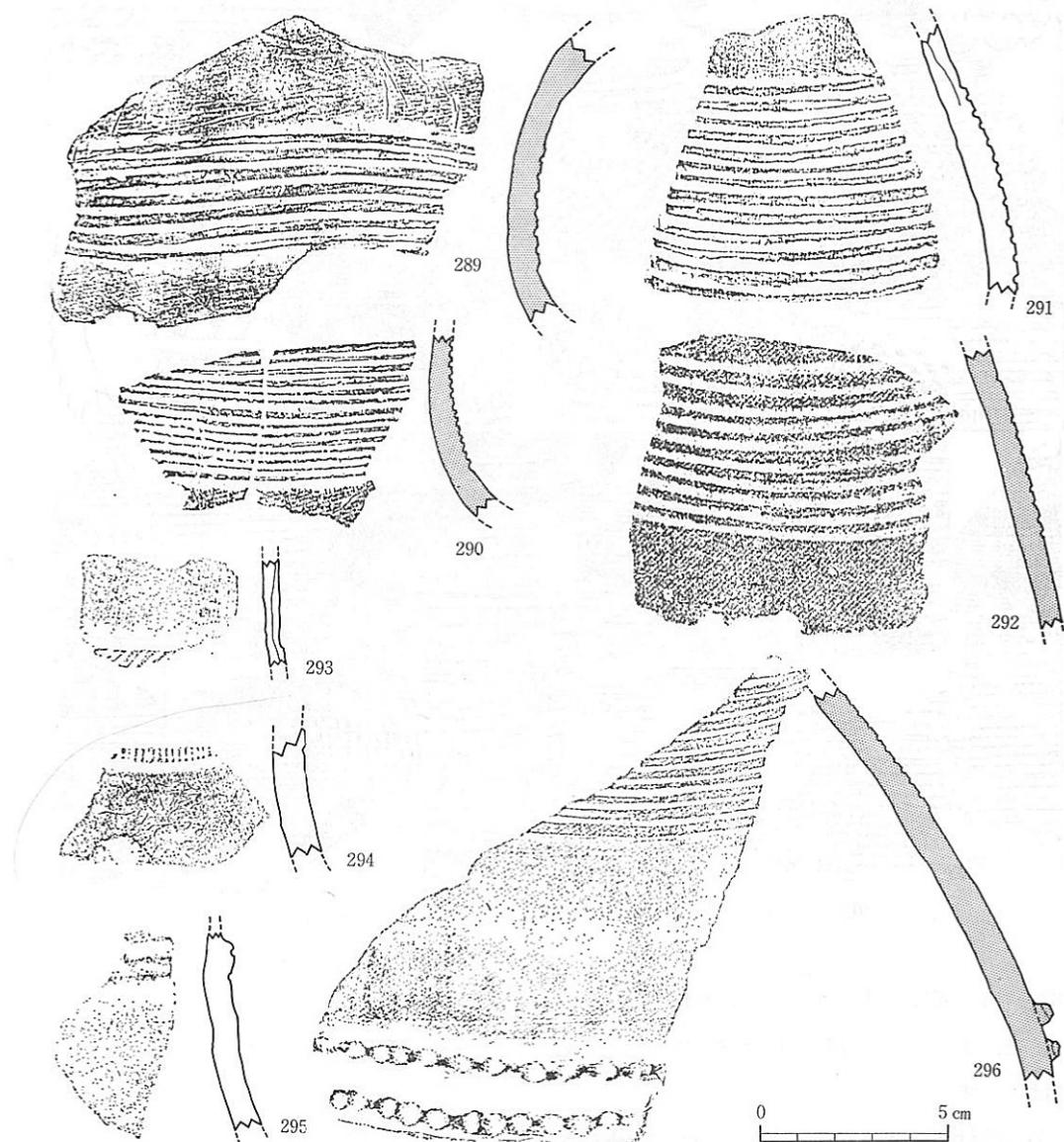
第399図 第I様式土器（口縁部内面に装飾をもつ壺）

る（B 203・204）。半截竹管の平行2条線文を組み合せるものについては、第Ⅰ様式に属すのか、第Ⅱ様式のものか不明である（B 268～270）。

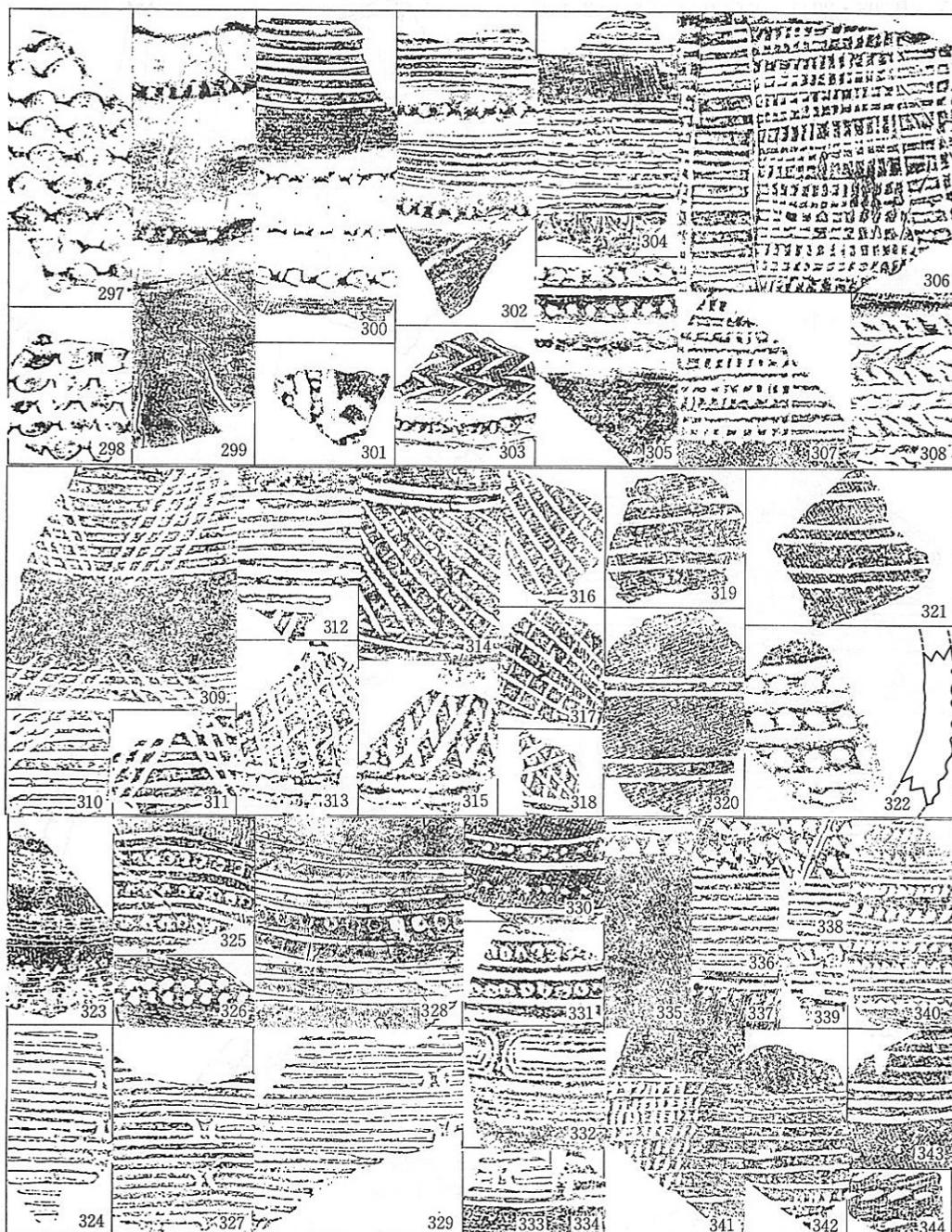
口縁部内面文様については (i) 沈線文系統のもの、(ii) 圧痕文系統のもの、(iii) 貼付突帯文系統のもの、の三者がある。内面の突帯に布目圧痕文がつくものは珍しい（B



第400図 第Ⅰ様式土器（赤彩文をもつ壺）



第401図 第Ⅰ様式土器（削出突帯をもつ壺）

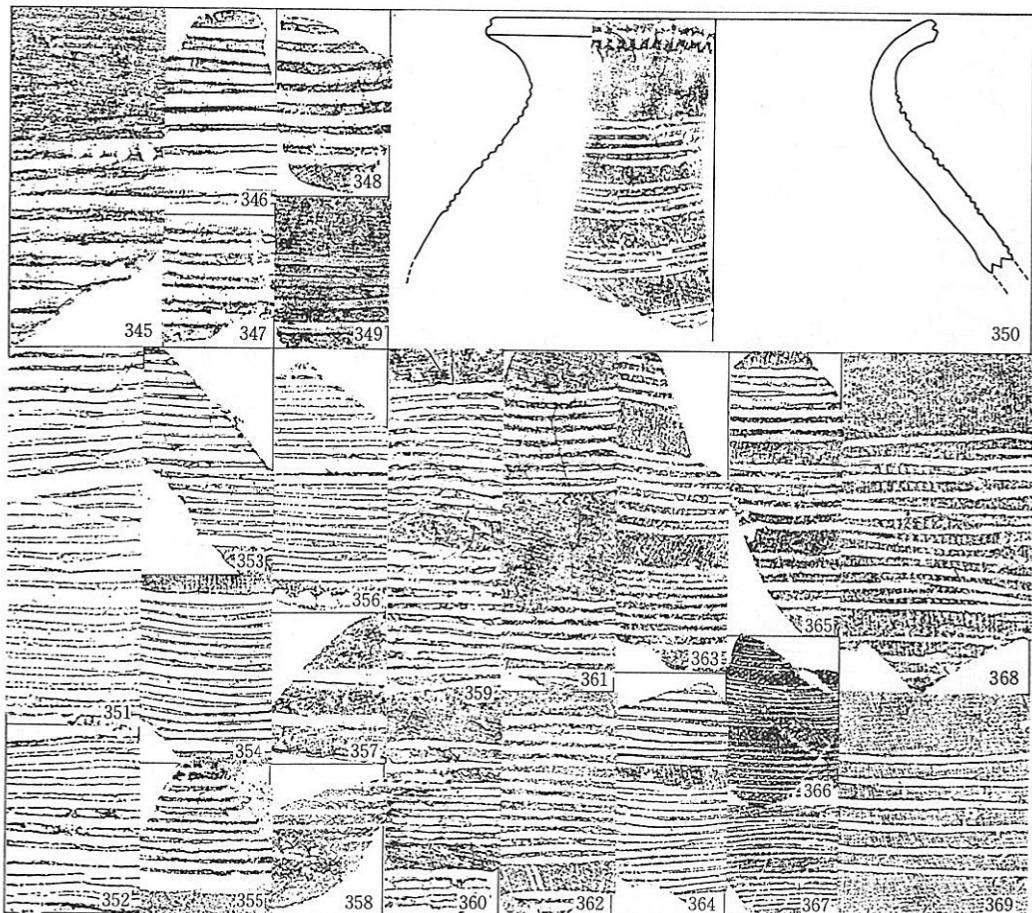


第402図 第I様式土器（各種の籠描文様一生駒西麓産土器以外のもの）

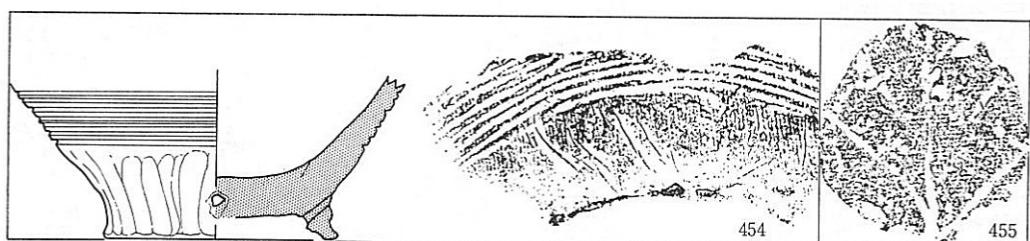
283)。口縁部に透孔をもつ例（B281）については他例を求める。

従来、前期前半に分類された古い要素をもつのは以下の通りである。その他の体部文様については後述する。

- ① 貼付突帯2条と赤彩文をもつもの（B288）



第403図 第I様式土器（各種の範描沈線文一生駒西麓産土器以外のもの）

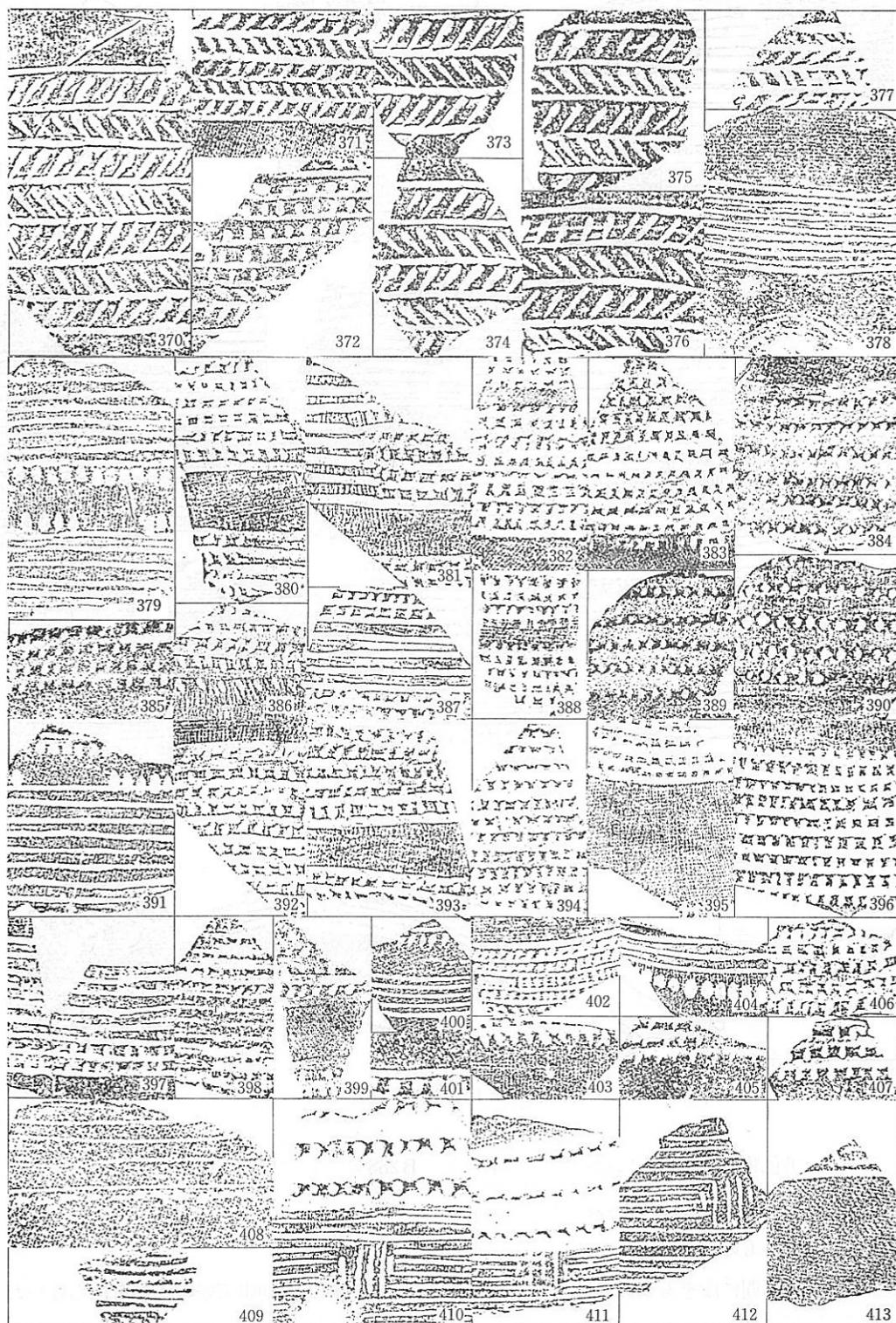


第404図 第I様式土器（底部）

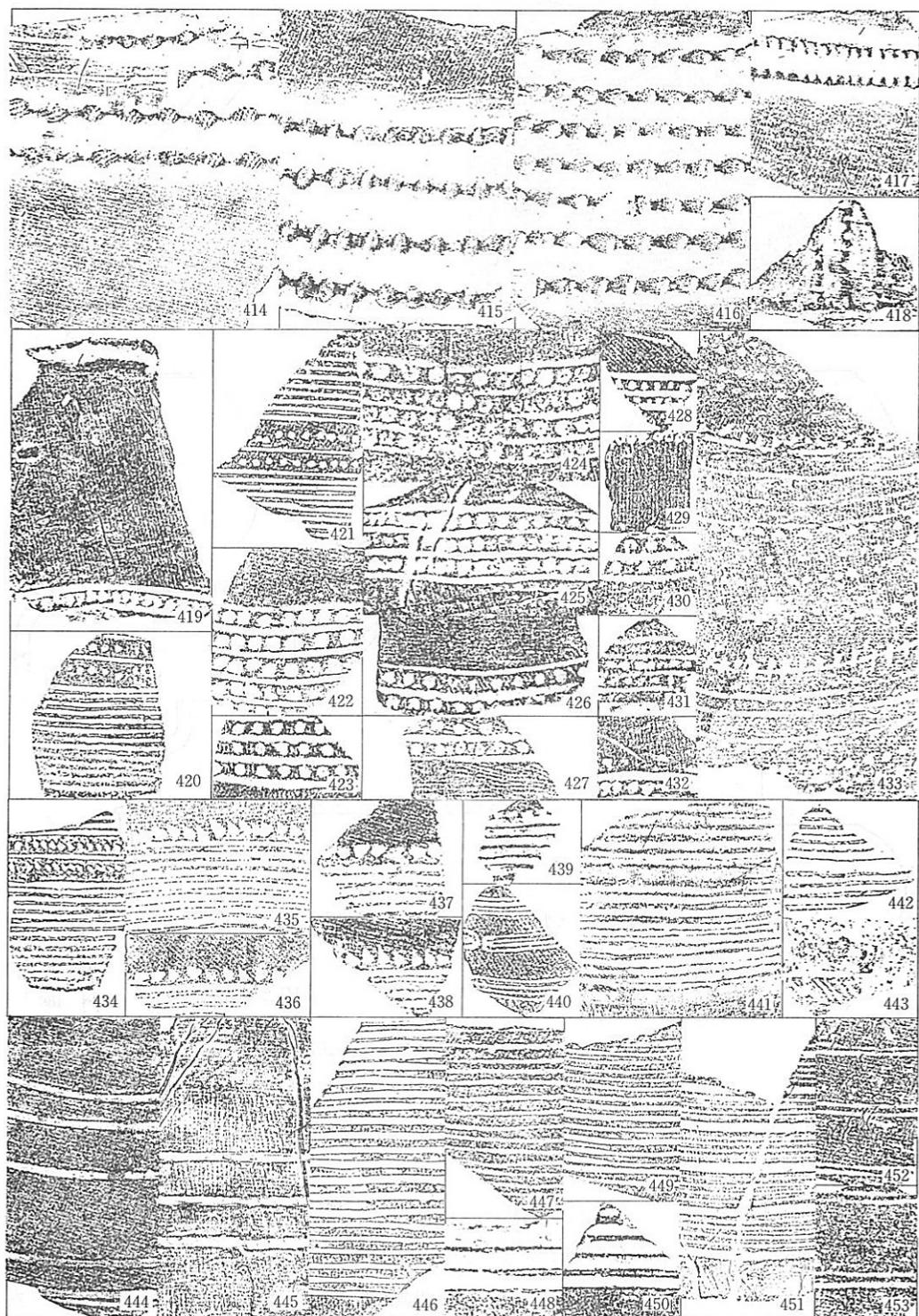
黒色物質塗布の上に赤彩文がみられる。B288については前期前半段階のものが混在しているととらえている。

② 段をもつもの

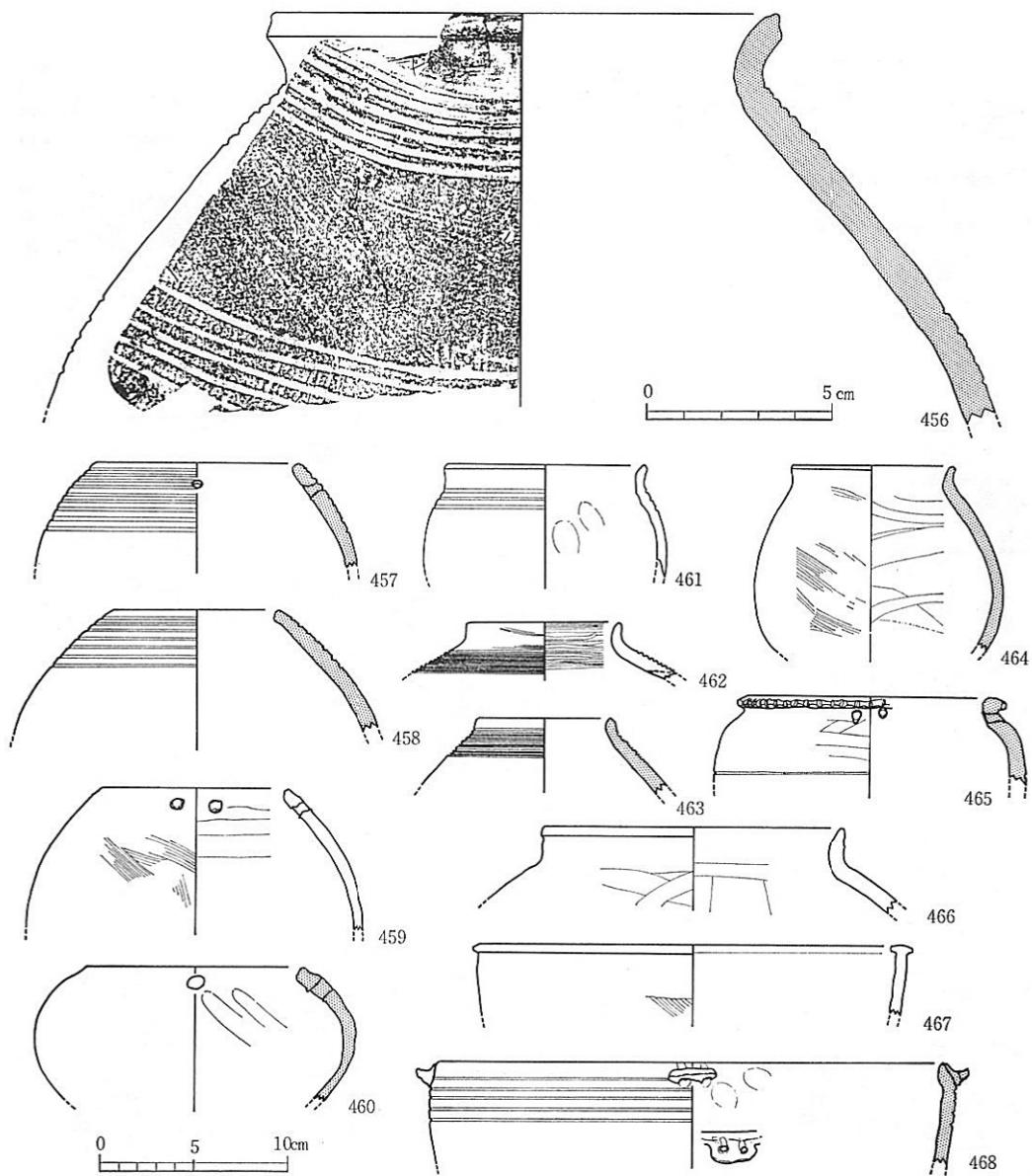
口頸間に段をもつものはない。頸胴間については幅広の削出突帯の下端を削らないために上端の削り部分が外見上は段となったものがみられる（B292）。これは沈線文帯の最上部を範磨き調整によって多少窪めたことから生じたものであり、段上には多条の沈



第405図 第I様式土器（各種文様一生駒西麓産土器）



第406図 第I様式土器（各種文様一生駒西麓産土器）



第407図 第I様式土器（無頸壺・鉢）

線文が施され、新しい要素を示している。前期後半に属すととらえている。

③ 削出突帯をもつもの

前期前半に属するような比較的幅狭で文様をもたない突帯や、幅広で突带上に多条沈線文をもつものなど若干数の削出突帯がある（B289他）。

削出突帯であっても、ごく一部を除き前期前半に属するものではなく、和泉地方でもみられるように、⁽³⁾ 前期後半まで継続するものととらえたい。

<無頸壺>



第408図 第I様式土器（鉢・壺蓋文様一生駒西麓産土器）

口縁部の形状を中心として分類する。量的にはa、bが多い。

- a. 口縁部が短く外反するもの(B456・B461~466)

- b. 口縁部は直口で、かつ内向するもの(B457~459)

- c. 口縁部はb.と変わらないが、小型・球形の体部をもつもの(B460)

- d. 口縁部は直口で、倒鐘形の丈高の体部をもつもの(B468)

山賀遺跡ではa.の出土がほとんど見られない。やはり前期における段階差を示すものであろうか。

<鉢>

口縁部が短く外反するものと直口のものがある。直口の口縁部直下に突帯を貼り付け、口唇部とともに刻目を付したものは珍しい(B526)。布目圧痕文突帯をもつものもある(B529)。

<高杯>

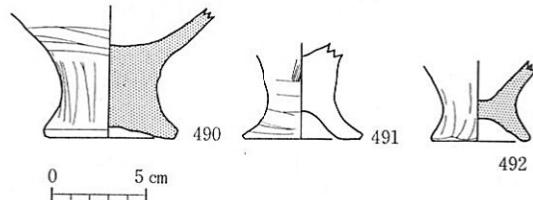
高杯と分類されたものは第62図—B 056の他には少ない。第I様式では稀にしかみられない器種である。

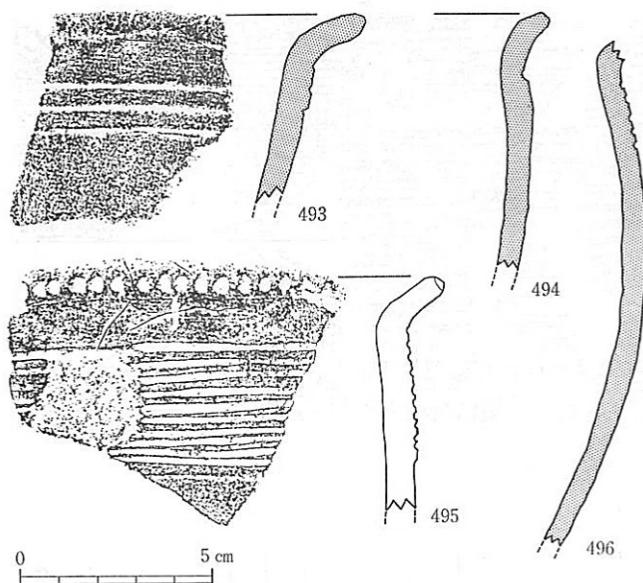
<甕>

(形態) 本遺跡出土甕を形態別に分類すれば、遠賀川式土器の系譜を引く「如意形口縁をもち、体部は倒鐘形のもの」(甕A)が大半を占める。「口縁部が直口で体部は倒鐘形のもの」(甕B)は少数である。また、「突帯文を貼り付けた逆L字状を呈する口縁部と倒鐘形の体部をもつもの」(甕C—いわゆる播磨型甕)も、ごく稀ではあるが見ることができる。

(文様) 口縁部と頸部文様の相関関係については後述する。

前期後半の中で古い様相を示す文様に、段ないしは削出突帯を施すものがある(第410図)。段

第409図 第I・第II様式土器
(高杯または台付鉢脚部)

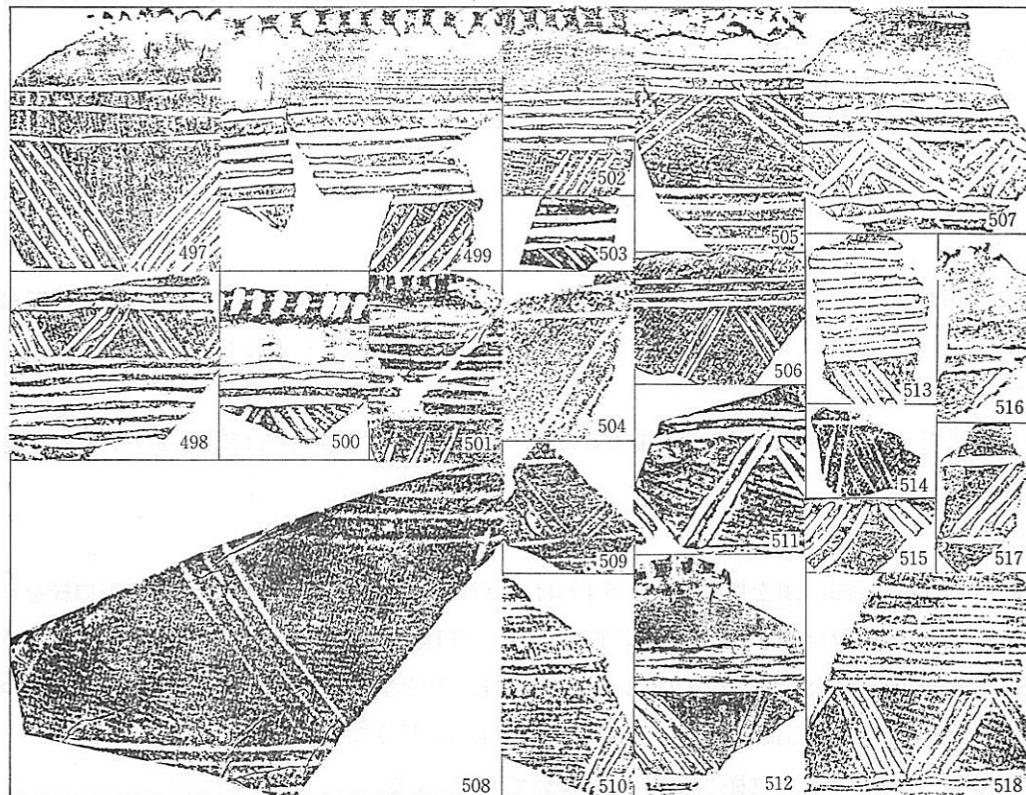


第410図 第I様式土器（削出突帯あるいは段状の装飾をもつ甕）

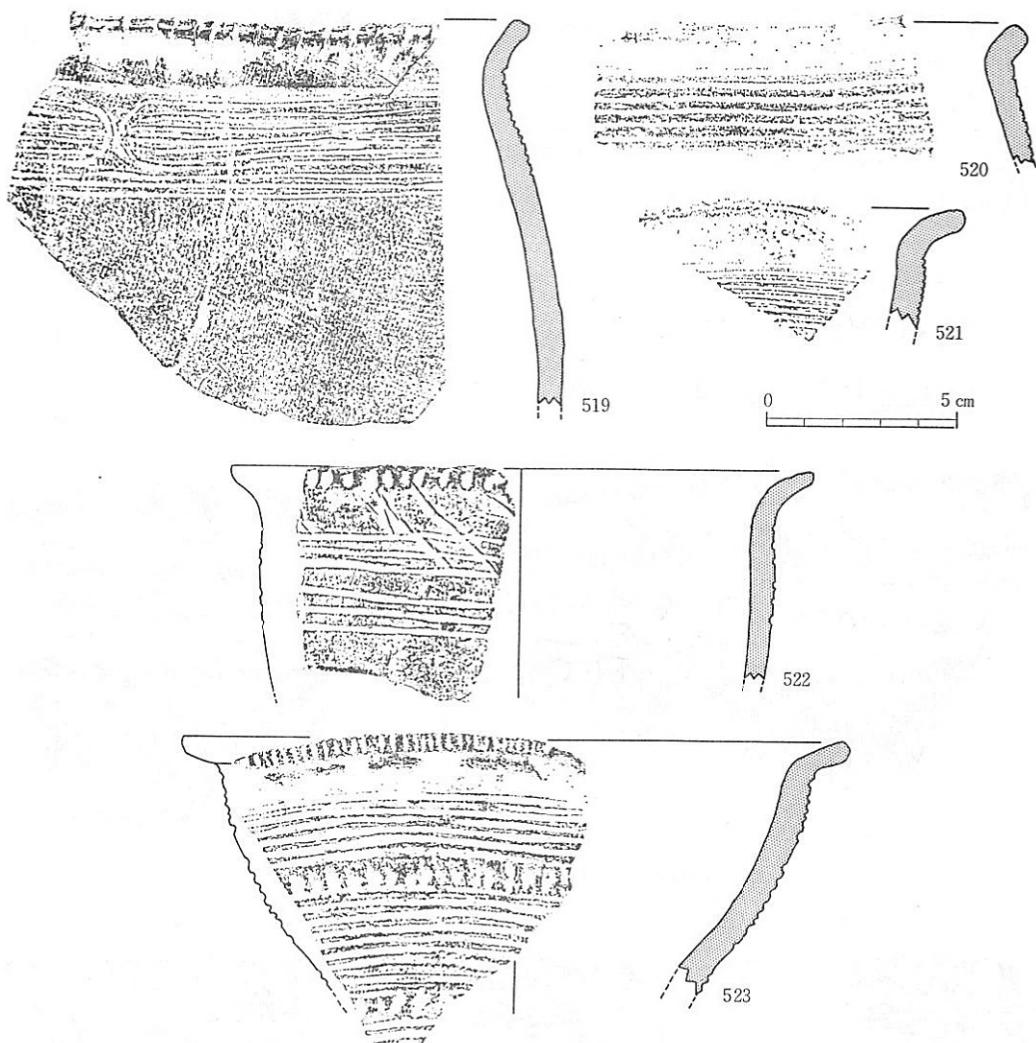
の比率は高く（第27表）、これらの口縁部の形状は直口に近いものから、強く屈曲したもの、調整の施し方具合であたかも口縁端部を折り曲げたかのように見えるもの（B531）もある。甕

といつても甕の削出突帯の項で述べたように、沈線文帯の上端は窪めずに下端にのみ範磨き調整等によって窪ませ、段状にみせたものである（B495・496）。他に体部よりも頸部の方が低いものがある（B494）。いずれも甕Aにみられる文様である。やはり前期前半というよりも後後に属するものととらえている。

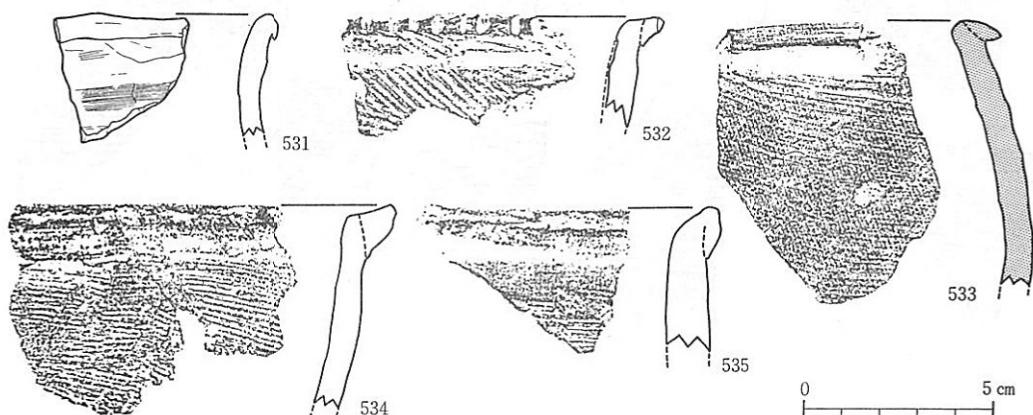
甕Aとしては範描流水文をもつもの（B519）、布目压痕文突帯をもつもの（B530）が珍しい。また、この甕Aで文様をもたないも



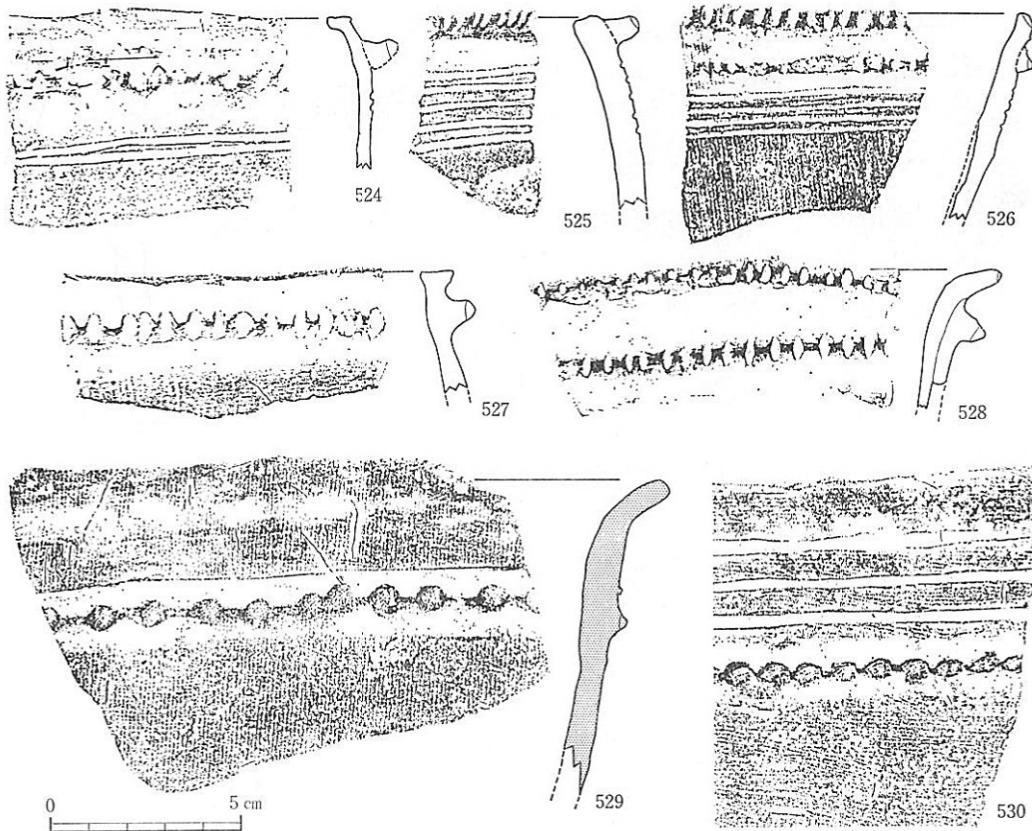
第411図 第I様式土器（甕・鉢文様）



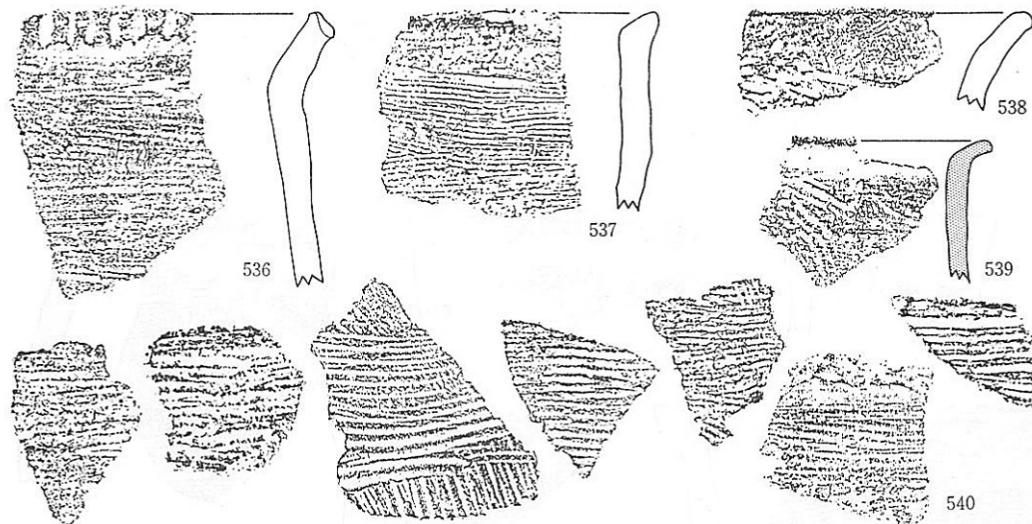
第412図 第I様式土器（各種の甕・鉢）



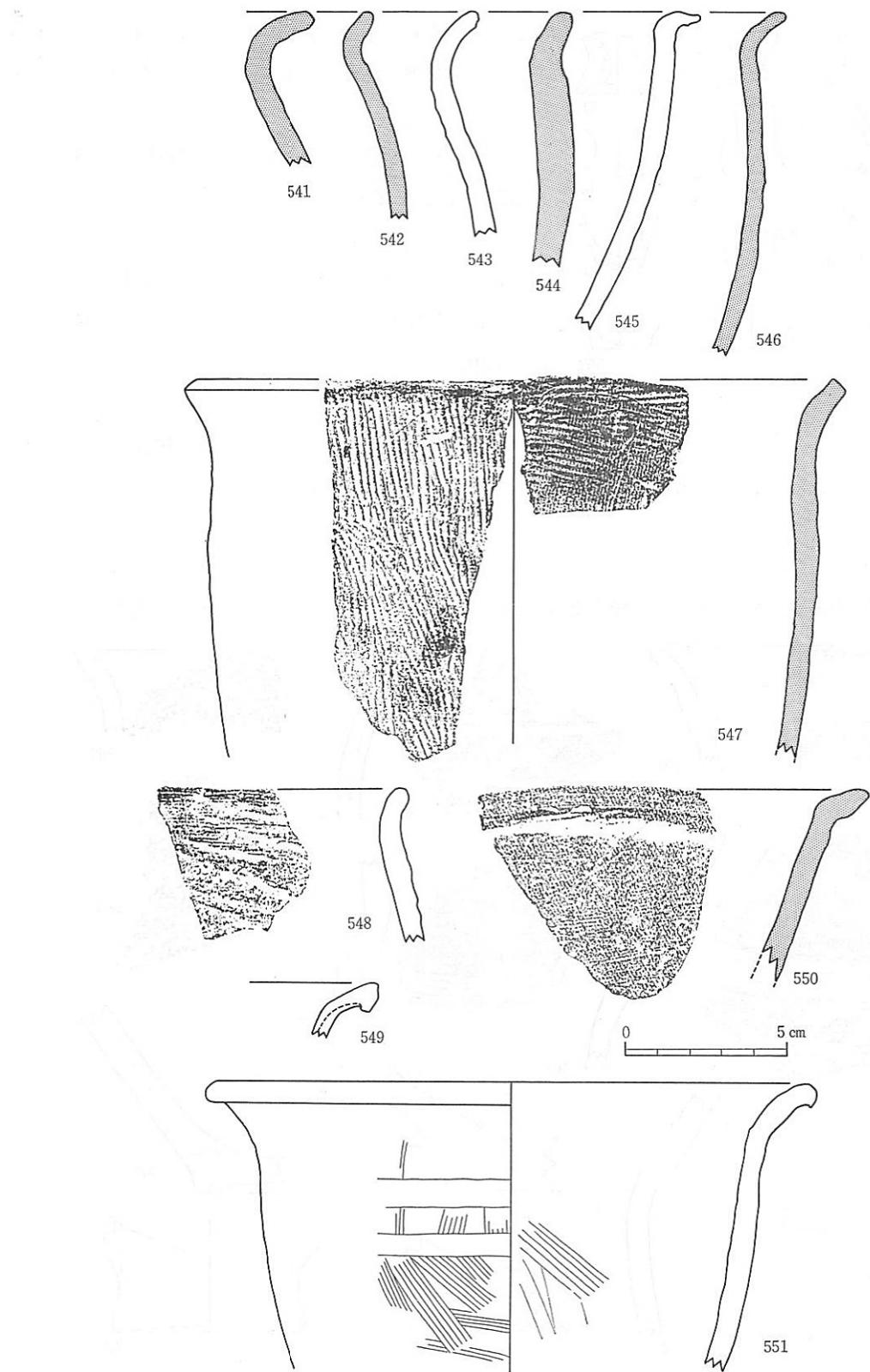
第413図 第I様式土器（各種の甕）



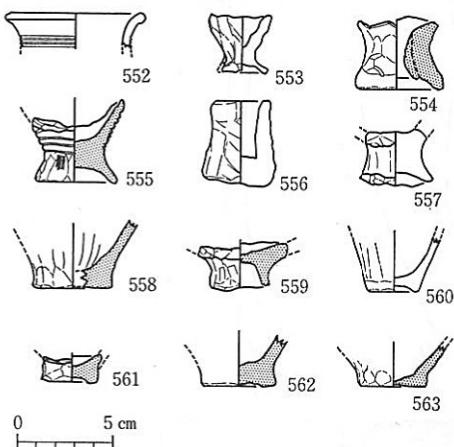
第414図 第I様式土器（各種の甕・鉢）



第415図 第I様式土器（条痕状の調整をもつ土器）



第416図 第I様式土器（文様をもたない甕）



第417図 第I様式土器（ミニチュア土器）

B、さらに甕Cの中にも装飾をもたないものがあり、いわば粗製の甕を形態別にとらえ直す必要がある。

なほ、甕Cで顕著なものは図示した2点位である（B 525・532）。量的には少ないといえる。

<蓋類>

壺蓋に比して甕蓋の方が多い。文様の特殊例として周縁部に押圧刻目突帯文が巡るものがある（第18図—B 012）。

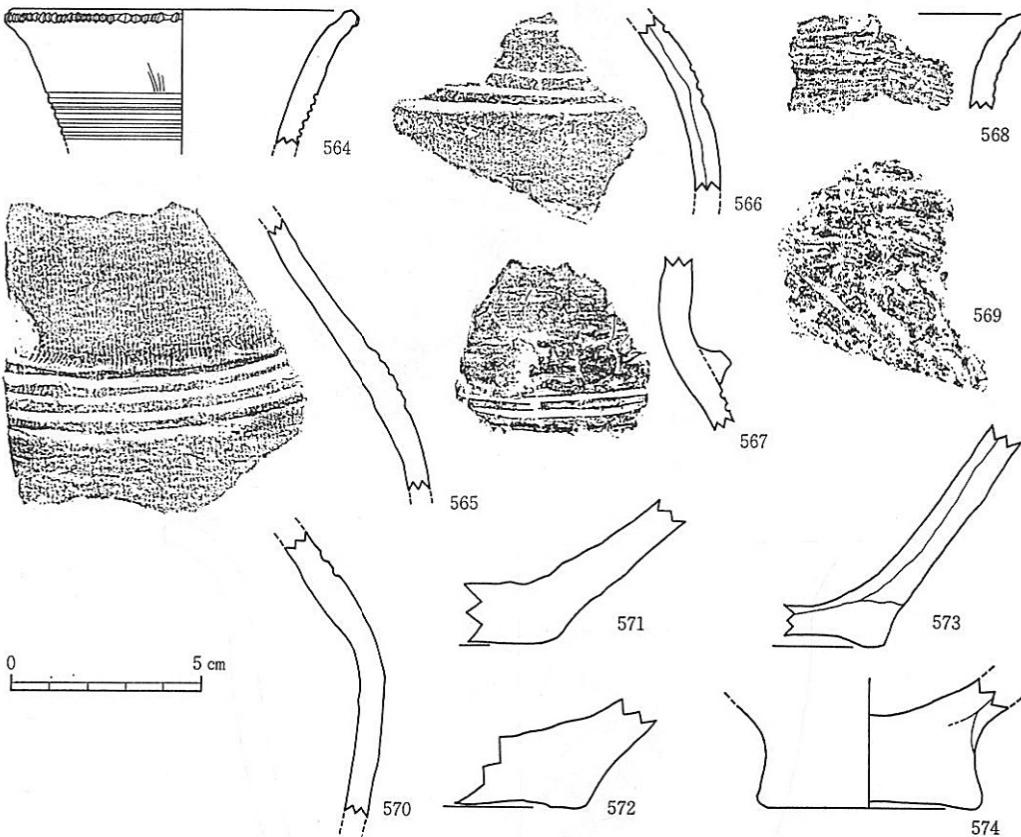
<ミニチュア土器>

第417図に集めたが、土坑、溝の他に包含層からの出土品が多く、遺構の性格と関連づけられるものは残念ながらみられなかった。

<搬入土器>

a. 紀伊産土器

胎土中に結晶片岩を含み、搬入土器として明らかに区別できるのは紀伊産の土器であ



第418図 第I様式土器（結晶片岩を含む壺・甕）

る。量的には小コンテナ（普通のコンテナの $\frac{1}{3}$ 量）に満杯あり、山賀遺跡やその他の河内平野の遺跡の出土量と比較しても多いようである。

和泉地方の池上遺跡の中期初頭第Ⅱ様式期に搬入された紀伊産土器は甕ばかりであり、壺が全くといってよい程見られないことがかつて指摘された。ただし、和泉地方の前期第Ⅰ様式期の状況については資料が少なく不明であった。⁽⁶⁾ところがそれを本遺跡でみると、前期第Ⅰ様式期に搬入された紀伊産土器の器種は壺が多い。削出突起（B565）、瘤状突起（B567）、帯状沈線文（B566）をもつものがある。なお、第Ⅱ様式については残念ながら特定できるものがなかった。今後の資料増加に待ちたい。

b. 和泉産土器

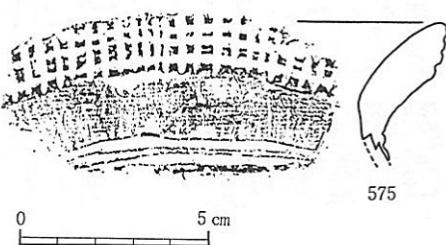
かつての和泉地方の池上遺跡で「太細併用沈線文」と呼称し、和泉地方の地域的特色を示す文様としてとらえられたものが当遺跡でもみられる。搬入品と思われるもの他に生駒西麓産土器もあり、交流関係の緊密さを示している。⁽⁷⁾

c. その他地域産の土器

すでに述べた播磨型甕の他に瀬戸内海沿岸地域の土器と共に通する形態・文様をもつものは多いと思われる。西方地域からの影響を明らかにあらわすものとして第399図—B278の1点がある。これは壺の口縁部の一部でごく小破片である。しかし、口縁部内面上端部が肥厚する形態は響灘沿岸地域（福岡県、山口県）の弥生時代前期後半の土器にみられるものであり、したがってこの1点はおそらくこれら地域の土器に端緒をもつものであると思われる。ただし、本遺跡出土品は生駒西麓産に近い胎土をもっている。

同地域に系譜をもつ土器の多くは、日本海を通じて丹波、丹後地方にみられ、瀬戸内海沿岸地域でも広島県大宮遺跡、兵庫県田能遺跡の他に出土例が増えつつある。河内地方の例として大阪府柏原市船橋遺跡出土の前期前半に属する壺（『弥生式土器集成本編2』PL.39-1）がある。

なお、本遺跡出土土器には近江地方に通じる特色をもつ土器もある。短く外反する口縁部をもち、幅広の口縁部端面には篦描沈線文と縦線文を組み合せた格子文、頸部に数条の篦描沈線文を施したものである（B575）。文様の下に施された縦方向の刷毛目調整が著しい。器種としては甕であろう。近江地方の弥生前期第Ⅰ様式土器の中には現状ではこれと同形態の資料は見あたらない。しかし、第Ⅱ様式土器中にみられる近江地方の甕として一般的なものはこの土器の篦描文様を櫛描文様に変えただけのものが多い。したがって同一資料はないものの近江地方の第Ⅰ様式土器に繋がりをもつ土器としてとらえたい。



第419図 第Ⅰ様式土器（近江地方の甕）

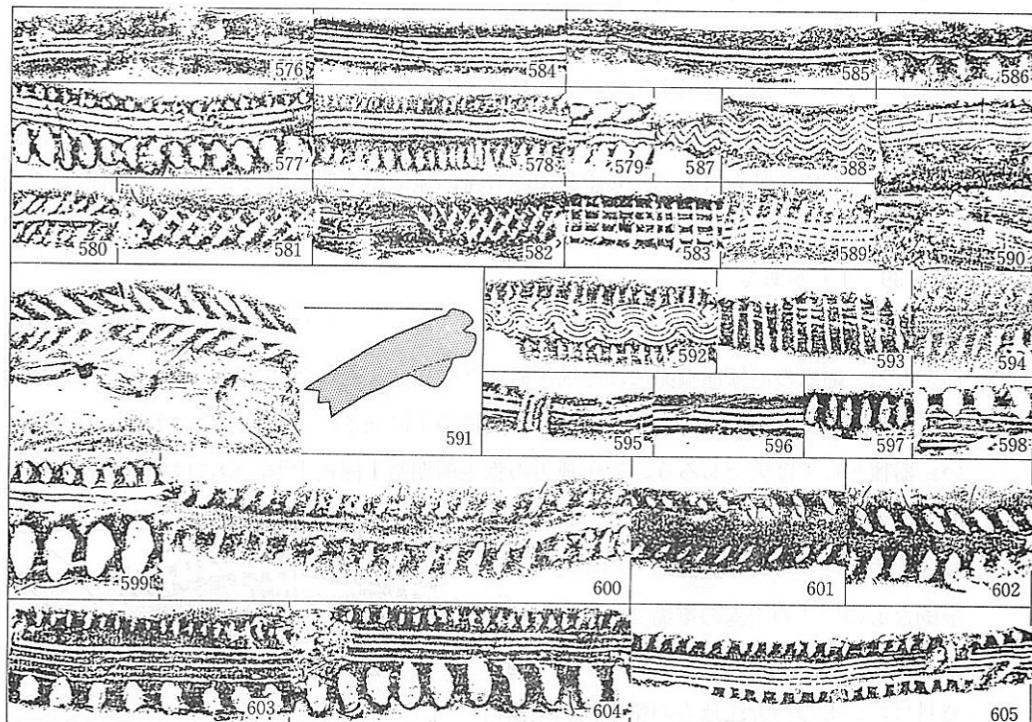
<底部にみる範削り調整>

河内地方の第Ⅰ様式土器の成形に範削り調整が見受けられることを一部の土器で確認した。範削り調整は器内外面に見られ、とくに鉢や小型壺の底部側面および体部にかけての彎曲部分に見られることが多い。粘土紐を積み上げた後の微妙な曲線を形作る部分においては、やはり範削り調整が有用であり、この上に範磨きなどの調整を加えて消すかどうかの違いがあると思われる。

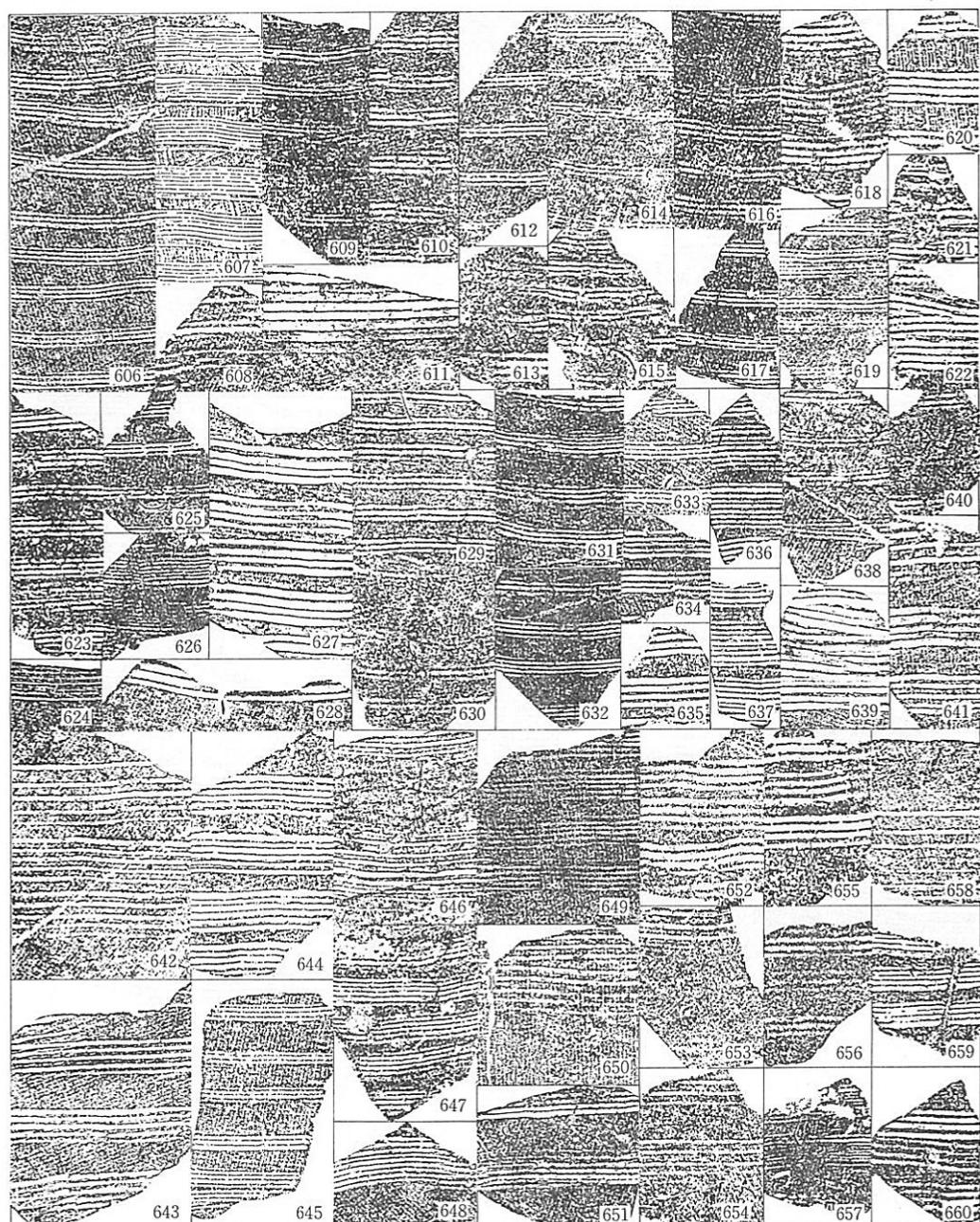
2) 弥生時代中期初頭の土器様相

第Ⅱ様式土器は資料も少なく整理も進んでいないので、全体の様相を述べるまでには至っていない。したがって特徴的な部分のみを紹介し、本遺跡出土第Ⅱ様式土器は第Ⅰ様式と併出した前半の良好な資料であることを付記するに留める。

- ① 第Ⅰ様式から第Ⅱ様式への変遷については、壺、鉢、甕ともに形態変化もほとんどなく、文様も意匠は変わらないが施文具の変化（範描き→櫛描き）のみが認められる場合が多い。第Ⅰ様式に併出するので、本遺跡出土品にみる櫛描文様の出現の経緯については不明である。
- ② 櫛描直線文には各種の描き方がある。

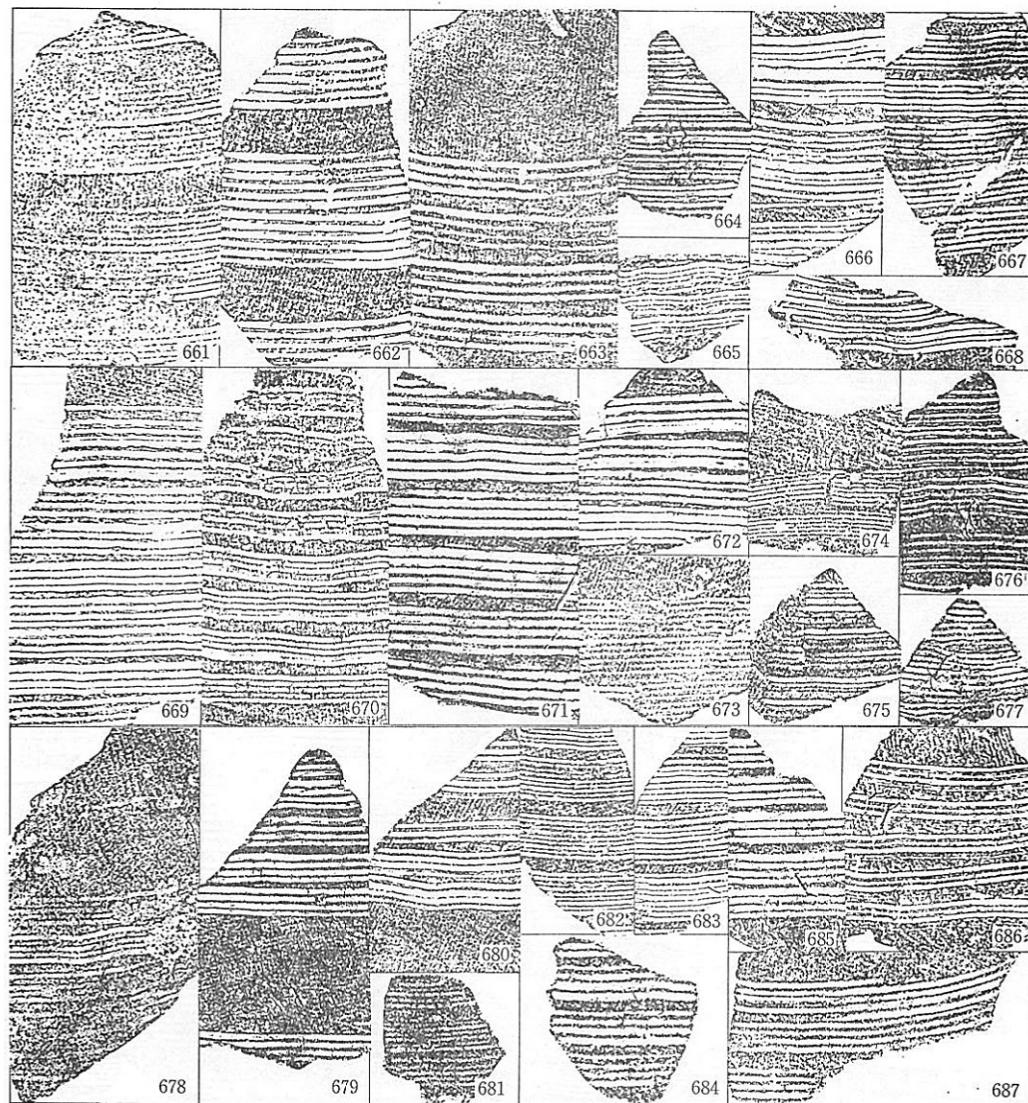


第420図 第Ⅱ様式土器（壺口縁端部文様—576～593・590生駒西麓産以外のもの
他は生駒西麓産土器）



第421図 第Ⅱ様式土器（櫛描直線文）

- 1条ずつ適當な間隔をあけて描くもの。
- 単帶構成 {
- 特別な櫛原体を使うもの（「板状」の櫛と呼んでいるが、幅広で浅い櫛歯をもち、櫛というよりも板を押しあて描いた感のあるもの）。
- 複帶構成 {
- 2～数条を重ねて帶状に描くもの。
- 篦櫛併用文様を構成するもの。

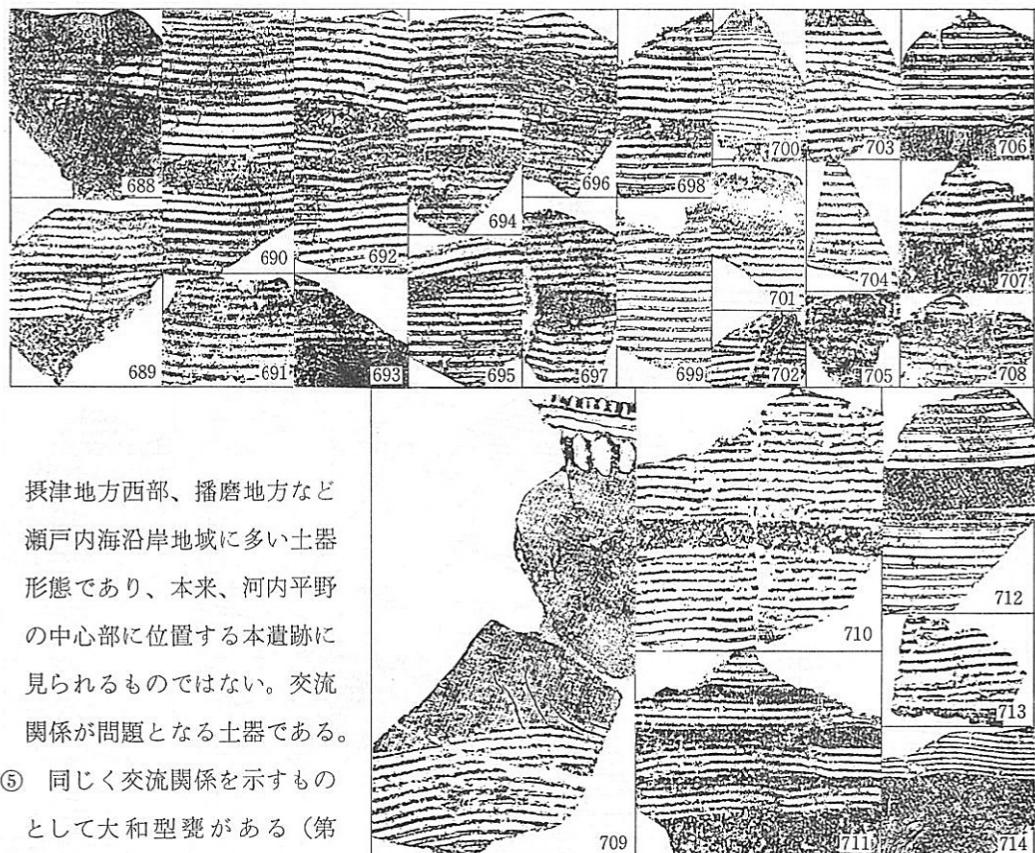


第422図 第Ⅱ様式土器（櫛描直線文）

半截竹管2条線文も第Ⅱ様式の中に含めてよいものがある。笠櫛併用文様は第Ⅰ様式の太細併用沈線文と同様に和泉地方の地域的特色を示すものであり、搬入品と共に生駒西麓産の胎土をもつ土器があるのも第Ⅰ様式と共通する。

櫛描直線文にも以上のように構成や原体の違いによる各種の描法があることは、和泉市池上遺跡で始めて確認されたものであり、第Ⅱ様式前半期の特徴といえよう。

- ③ 櫛描文様は直線文の他に波状文、流水文などがごく少量伴っている。
- ④ 頸部に櫛描直線文をもつ甕が少なからずある（第424図）。口唇部に刻目をもつものがあり（B800・804）、この場合、第Ⅰ様式と同じ笠による刻目である。頸部の櫛描きについても、単帶のもの、複帶のもの、板状のものなど各種が見られる。生駒西麓産土器もある。

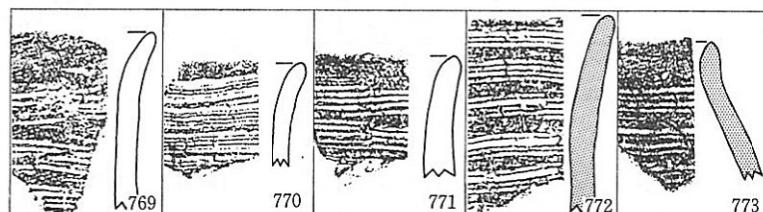


第423図 第Ⅱ様式土器（櫛描直線文）

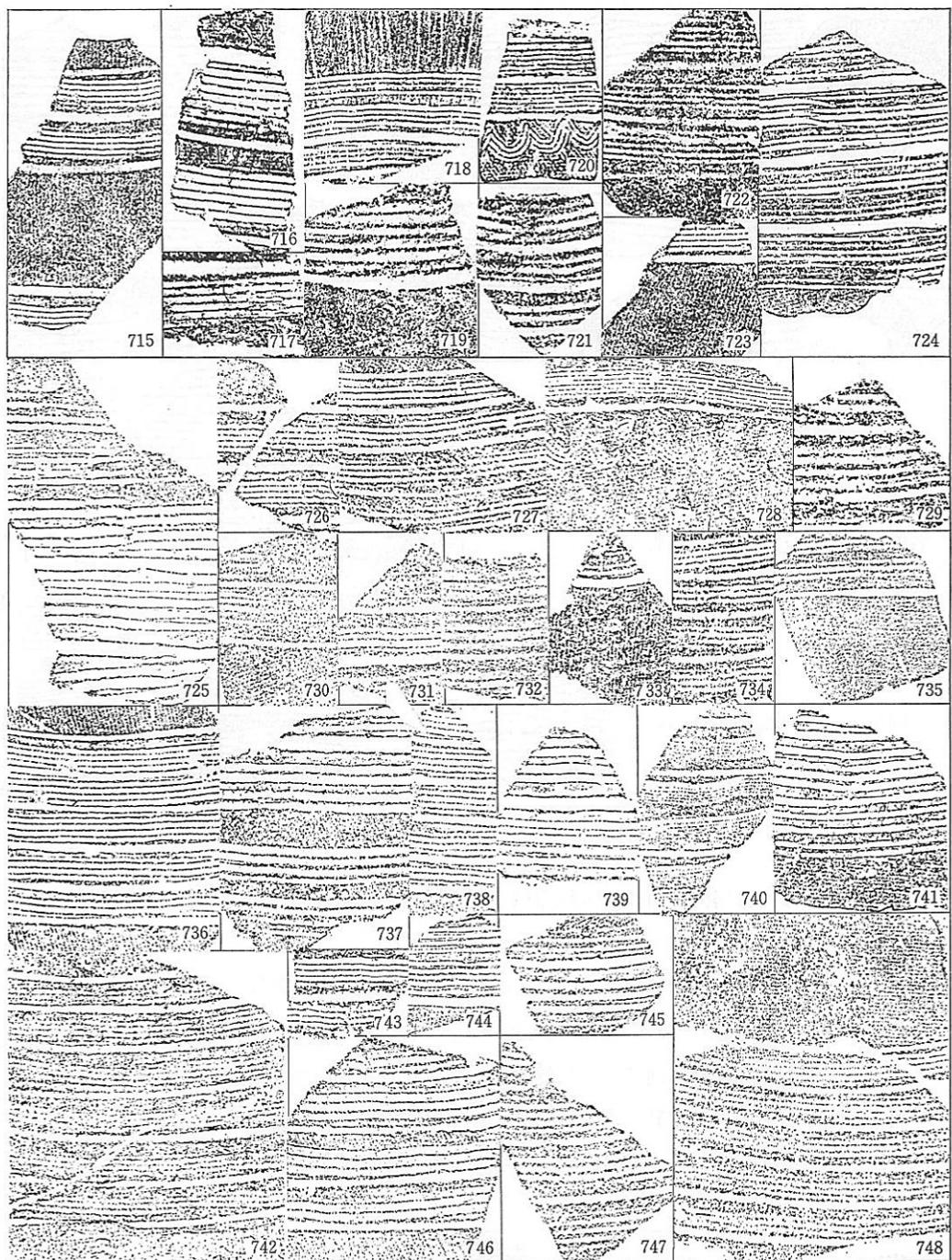
摂津地方西部、播磨地方など瀬戸内海沿岸地域に多い土器形態であり、本来、河内平野の中心部に位置する本遺跡に見られるものではない。交流関係が問題となる土器である。

⑤ 同じく交流関係を示すものとして大和型甕がある（第429図）。B832に見られるような口縁部、頸部、体部にかけての形状、また、器内外面に見られる粗い刷毛目調整、口唇部の刻目など特徴的な形態をもっている。胎土に関しては生駒西麓産のものは見られない。大半が他地域産として明らかな特徴をもつ搬入品である。大和型甕には第Ⅰ様式に共伴するものが指摘されている。⁽⁸⁾しかし、本遺跡の検出状況からすればその関係は残念ながら不明である。

なお、一見、大和型甕と同じような特徴を示し、しかし、口縁部内面の刷毛目調整に波状文を加えるものがある（B835）。この特徴は、近江地方の甕に多い。第Ⅰ様式にも近江地方の特色と思える甕があったように（B575）、やはり交流の産物と考えられる。

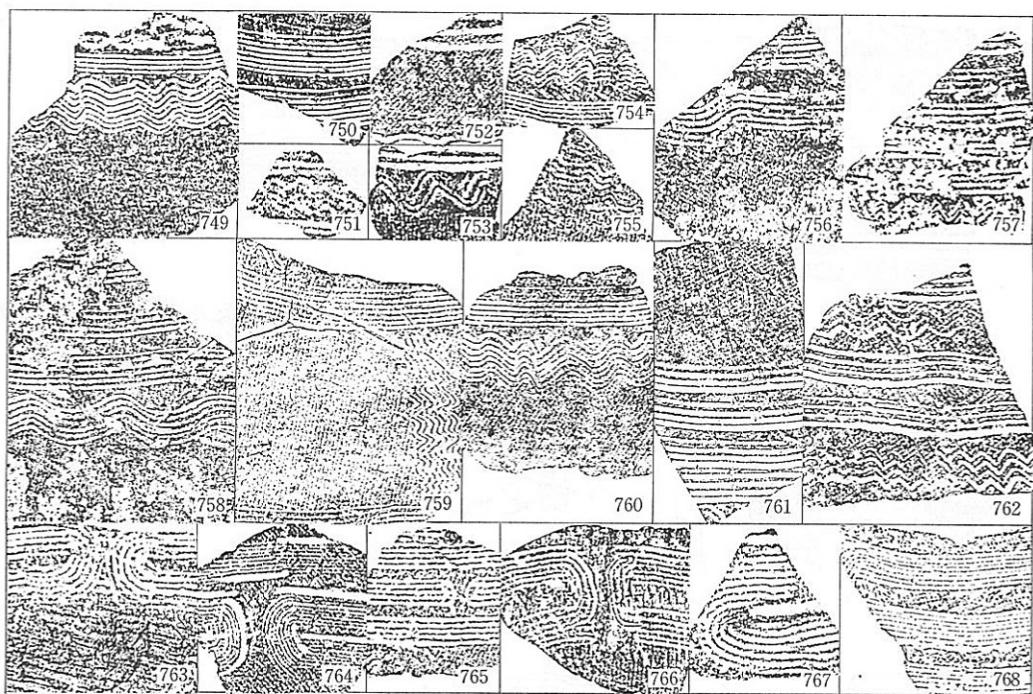


第424図 第Ⅱ様式土器（細頸壺・鉢）



第425図 第Ⅱ様式土器（篦櫛併用文様）

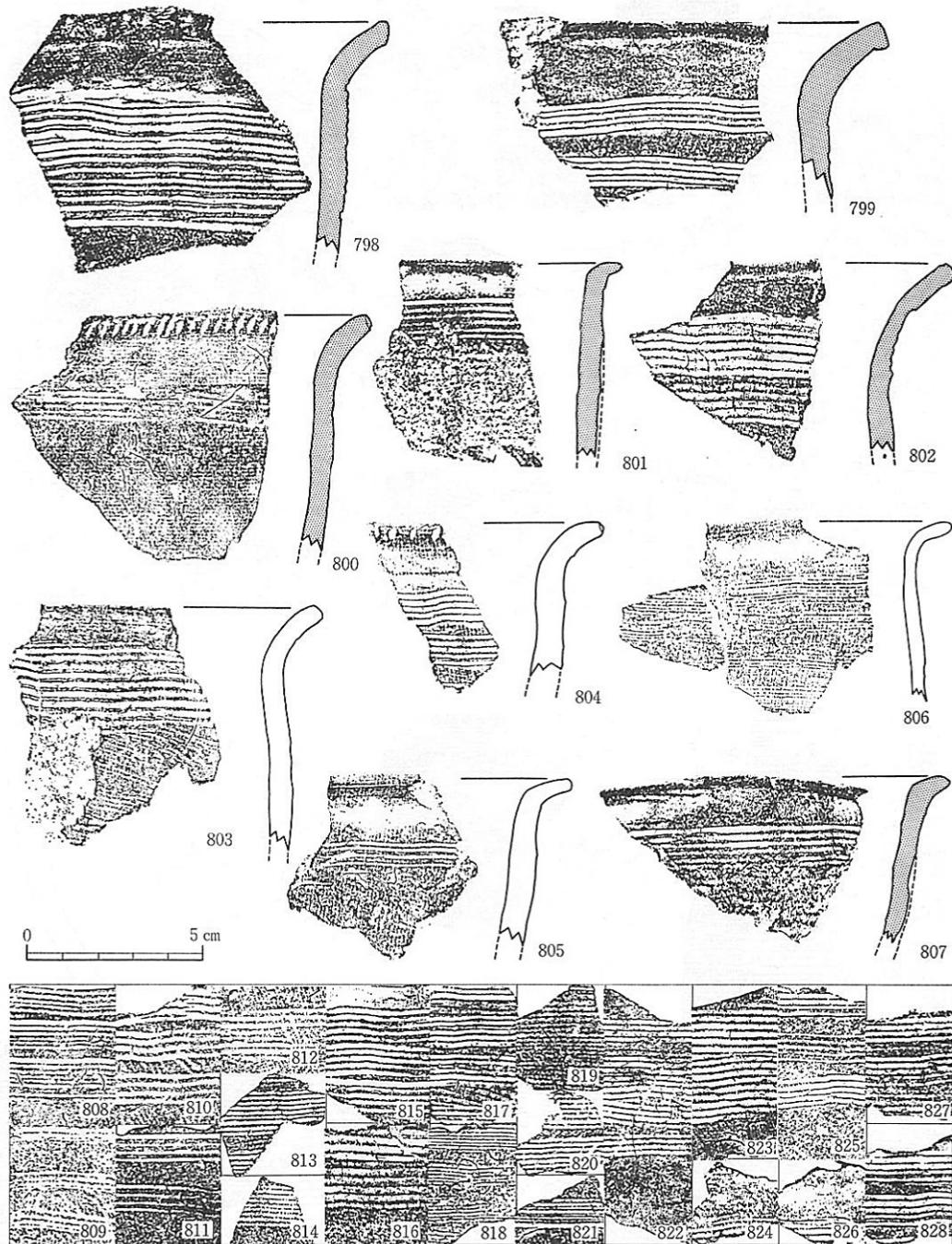
⑥ それでは地元産の甕は、ということになるが、前期前半に大半を占める甕Aの文様をもたないものの系譜上に位置するものである。河内地方の第Ⅱ様式甕は和泉地方の甕と同様に器内外面に篦磨き調整を加えるものがある。とくに生駒西麓産のものに顕著である。第Ⅱ様式におい



第426図 第Ⅱ様式土器（擃描文様）

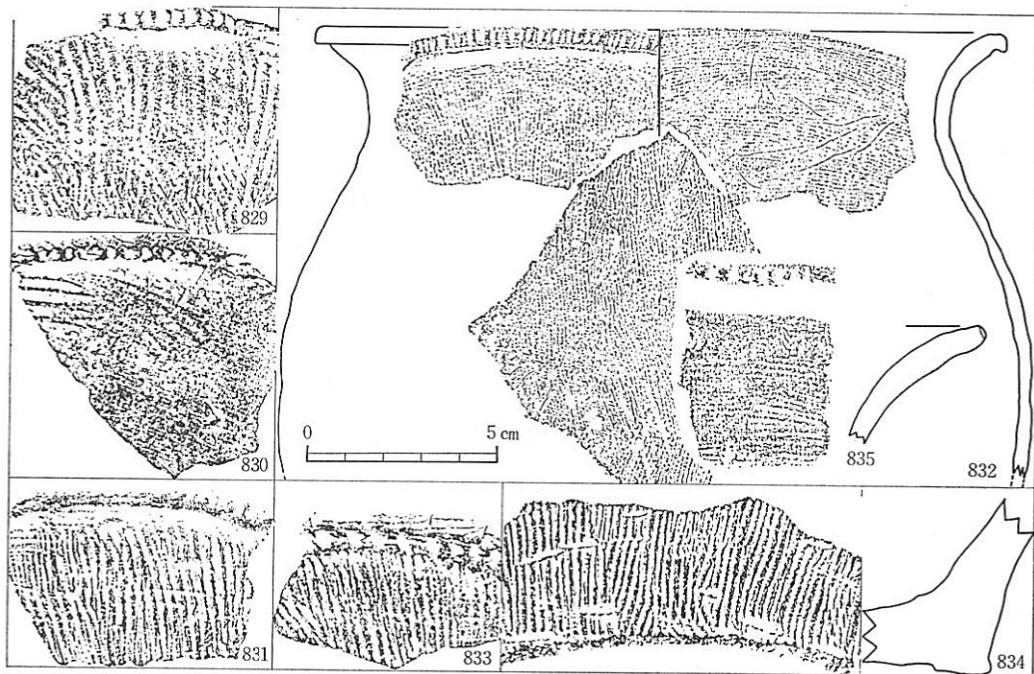


第427図 第Ⅱ様式土器（鉢文様）



第428図 第Ⅱ様式土器（描写直線文をもつ甕）

て文様をもたない甕が中心をなす地域は、摂津（東部）、和泉、河内、紀伊地方にあるが、鏡磨き調整という点からみれば、和泉地方との関連が深く、「和泉・河内型甕」と呼称される由縁である。⁽⁹⁾



第429図 第Ⅱ様式土器（大和型・近江型甕）

3) 生駒西麓産と生駒西麓産以外の土器の比較

A. 土器の胎土

本遺跡出土土器は、河内平野部の特色としてすでに述べたように、生駒西麓産の土器、平野部（美園産）の土器、他地域からの搬入土器がある。

生駒西麓産土器は、特別な色調と胎土をもち、弥生時代中期の簾状文で代表される非常に精緻な土器製作をするものである。したがって、他地域に搬入されてもよく目立ち、弥生時代畿内社会の中心地域と考えられたうちの一つ、河内地方の土器であることも影響してその存在が非常に重要視された土器である。すでに多くの研究者が指摘するように、生駒山および生駒山地の西麓部で採集できる粘土と混和材を使用したものである。暗茶褐色系の色調をもち、混和材には角閃石が肉眼で大量に観察できるということが基本的条件としてあげられている。したがって、古大和川水系が形成する沖積地に立地する美園遺跡ではこれらの条件はほとんど得られないといってよい。すなわち、土器製作材料の採集範囲を考慮にいれず美園遺跡周辺の材料で土器を作成するならば、灰白色～明褐色、場合によっては茶褐色の色調をもち、主として花崗岩の構成礫（長石、石英、雲母）と少量のチャート、肉眼では観察しにくいが一部には角閃石を含んだ胎土をもつ土器が出来上ることになる。これが平野部の土器である。なお、他地域で生産された搬入品とは胎土で区別できない場合が多いので、平野部の土器、他地域からの搬入品を含めて「生駒西麓産以外の土器」（その他産）と呼び、以下、この呼称で生駒西麓産土器と比較する。

以上の認識のもとに美園遺跡B地区トレンチ部出土土器を胎土によって分類し、2種類の集計

を試みた。いずれも接合復原作業を行なっていない段階での集計である。第Ⅱ様式は数量が少ないので今回は分析の対象外とした。

(第1方法) すべての土器片を1点として集計したもの(第24表)

(第2方法) 口縁部を含む破片および完形品を1点として集計したもの(第25表)

生駒西麓産以外の胎土をもつ土器の割合は、第1方法では56.3%、第2方法では48.8%（第I様式土器のみ）となる。半数程度は遺跡周辺で製作された美園産の土器であると理解できよう。美園遺跡前期後半資料を明確にするために前期前半の資料、北北東約300mに位置する当時の隣村である東大阪市山賀遺跡出土土器と比較したい。⁽¹⁰⁾

山賀遺跡の場合は第2方法で算出されている。生駒西麓産以外のもの(山賀産)が占める割合は、前期前半では25.1%（土器群）、前期後半では32.3%（I(新)包含層）となる。ただし山賀遺跡の前期後半資料は美園遺跡資料のように後半（のなかでも新しいもの）を主体としたものではない。先に述べた数値自体は算出方法によって異なるという点は指摘されねばならないが、美園遺跡の方が生駒西麓産以外のものの占める率が高く、必然的に生駒西麓産の%が低いということになる。山賀産土器が少ない点については当時の山賀周辺（低湿泥地帯）では汽水性の粘土があり、したがって4～5km離れた生駒西麓に良質の粘土を求めた旨の指摘がある。山賀の弥生時代前期遺構面T.P.1m、美園でT.P.2.3mという高度差が両遺跡の土器製作に多大の影響を与えていたのであろうか。いずれにしても前期でも段階的に胎土の割合が変化する（生駒西麓産の占める率が低くなっていく）のか、あるいは今、述べたような事情を含めた遺跡の性格によって割合が異なるのか等は今後の課題である。

なお、山賀遺跡の土器製作にかかわる成果として、粘土および混和材の移動ないしは採集範囲を示す資料が指摘されている。生駒西麓産土器以外のものの焼成前のヒビ割れの補修に生駒西麓産粘土が使われていること、生駒西麓産とその他のものの2種の粘土紐を貼り合せた例があることなどから平野部の集落でも生駒西麓産の粘土を使用した状況がうかがえるからである。美園の土器にもヒビ割れ補修のために粘土を加えたものがある（第145図—B967、図版136—B1165）。この場合はとともに生駒西麓産粘土であったが、やはり山賀のような例は将来みいだせるものと思われる。ただし、これら資料からだけではもちろん粘土や混和材の移動その他が確定づけられる

第24表 美園遺跡出土第I・第II様式土器胎土別分類表

胎土 点数・比率	生駒西麓産	その他の土器	紀伊産	計
第I様式	13,284点	17,164	41	30,489点
第II様式	115	129	0	244
小計	13,399	17,293	41	30,733
全体比率	43.6%	56.3%	0.1	(100.0)%
第I様式比率	43.6	56.3	0.1	(100.0)
第II様式比率	47.1	52.9	(0)	(100.0)

(すべての土器片を1点として集計)

第25表 美園遺跡出土第I・第II様式土器胎土別器種構成表

			壺	無頸壺	鉢	壺蓋	甕蓋	甕	計
第I様式	生駒西麓産	点数	462	15	125	28	80	788	1,498
	%	30.8	1.0	8.3	1.9	5.4	52.6	(100.0)	
その他の土器	点数	478	12	106	23	96	713	1,428	
	%	33.5	0.9	7.4	1.6	6.7	49.9	(100.0)	
計	点数	940	27	231	51	176	1,501	2,926	
	%	32.1	0.9	7.9	1.8	6.0	51.3	(100.0)	
第II様式	生駒西麓産	6	1	11	0	0	3	21	
	その他の土器	18	0	4	0	0	18	40	
	計	24	1	15	0	0	21	61	

(口縁部・完形品を1点として集計)

ものではない。しかし、河内地方内でのさらに小地域や時期によって生駒西麓産土器の製作基盤はかなり変動があったことが予測できよう。

B. 器種構成

第I・第II様式土器を胎土、器種によって分類した(第25表)。算出は先に述べた第2方法による。生駒西麓産とその他の土器に分けた両者の器種構成比率は大差ないようである。生駒西麓産土器には壺より甕の方が少し多い傾向はある。なお、同様に山賀遺跡前期資料と比較しても、これも大略として変化のないことを確認した。⁽¹¹⁾

C. 壺の体部文様

前期後半の施文傾向をみるために第I様式土器を胎土別(生駒西麓産、その他産、紀伊産)に文様を分類し表化した(第26表)。第II様式は数量が少ないので省く。

数量の少ない紀伊産のものを除き、沈線文、段、削出突帯、貼付突帯、その他の文様を系統別に分類した比率は、生駒西麓産、その他産ともに大差はない。

その他産の中には羽状文(B303)、綾杉文(B308)、平行斜線文と沈線文を組み合せたもの(B309~312)、格子文(B306他)、斜格文(B313~318)、流水文(B324他)、付加条をもつ流水文(B332)、三角形列点文(B335~340)、布目压痕文(B322他)などが含まれ、やはり瀬戸内海沿岸地域(播磨地方や摂津地方西部を含む)の系統の文様が中心となることをうかがわせ

第26表 美園遺跡出土第I様式壺、頸・胴部文様胎土別比較表

	生駒西麓産	その他産	紀伊産	計
段	8点 0.6%	10点 0.7%	点 %	18点 0.7%
削出突帯系	82 6.2	96 6.8	2	180 6.6
突帯文系	244 18.4	255 18.2		499 18.2
各種文様	32 2.4	35 2.5	1	68 2.5
沈線文系	962 72.4	1,009 71.8		1,971 72.0
計	1,328 (100.0)	1,405 (100.0)	3	2,736 (100.0)

(文様のある口縁部・完形品・土器片を1点として集計)

る。

生駒西麓産のものについても、多条沈線文と連弧文を組み合せたもの（B378）は珍しく、全体的には沈線文と縦線文、竹管文を組み合せたものが多い。また、三角形列点文、布目压痕文突帶、流水文（B440・413）、沈線文に縦線文を加えた擬似流水文（B410～412）など、生駒西麓産以外のものと同じ傾向がみられる。

なお、布目压痕文突帶は、従来から大和・河内地方の特色とされてきた。今回の資料についても、壺の口縁部内面、端面、体部と各所にみられ、また、後述するように鉢・甕にもあり、非常に多様性のある用法が明瞭となった。

D. 甕の文様

第Ⅰ様式甕A・B、また第Ⅱ様式甕の口縁部と頸部の文様の相関関係を胎土別に示す（第27表）。本資料は第Ⅰ様式の中に2%の第Ⅱ様式が混在している。河内地方第Ⅱ様式前半の甕は、大和型甕・近江型甕・櫛描直線文をもつ他地域からの搬入品については確認できるが、文様をもたないものについては第Ⅰ様式との区別がつけにくい。したがって、文様をもたない甕の関係上、第Ⅰ様式と第Ⅱ様式甕を合せて集計し、表化する。このために1様式における全体量の特定ができないので比率については省いた。

生駒西麓産と生駒西麓産以外のものについては、数量的な差は少ない。また、生駒西麓産土器に削出突帶系の文様をもつものが集中すること位の指摘に留める。

4) 美園遺跡の土器様相

以上のように生駒西麓産と生駒西麓産以外のものの土器を胎土、器種構成、壺の体部文様、甕

第27表 美園遺跡出土第Ⅰ・第Ⅱ様式甕、口縁部文様形態別・胎土別比較表

様式	体 部	口 縁 部	甕 A						甕 B		甕 C	
			生 駒 西 麓 產			そ の 他 產			生 駒	そ の 他	そ の 他	
第Ⅰ 様 式	逆 段			1								
	削 出 突 帯 系	1	1	4								
	貼 付 突 帯 文 系	1	1				2	1		3	1	
	沈 線 文 系	137	25	142	147	33	179	1			1	
	各 種 文 様	3		3	6		1					
	把 手 つ き		5	7	2	9	9		3			
第Ⅱ 様 式	文 様 な し	56	418	1	63	312	2	1	4			
	播 磨 ・ 摂 津 型		2	3	1	4	11					
	大 和 型				10							
	近 江 型				1							
	不 明	45	86	9	57	85	26					
計			951			961			2	10		2
			1,912						16			

(口縁部・完形品・文様のある土器片を1点として集計)

の文様の4点に分けて比較した。

現状であらわれた両者の差は

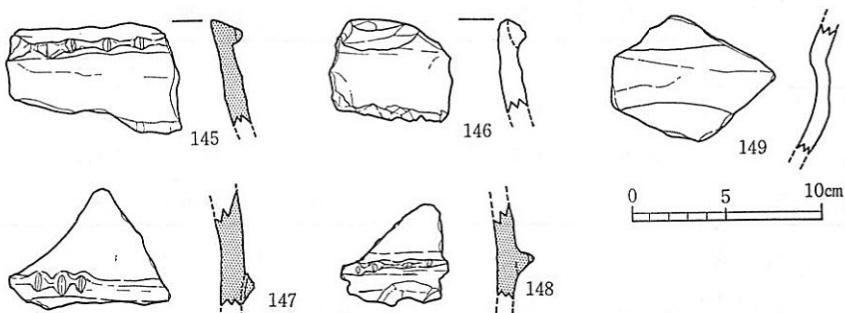
- ① 生駒西麓産以外のものの中には搬入品が含まれていること。
- ② 生駒西麓産の中には搬入品と同じ形態をもつものがあること。
- ③ 生駒西麓産以外のものの中には同様に直接の搬入品ではなくても他地域の影響を受けたものが存在すること。

という他地域からの搬入品や影響にかかるものが大きい。これらを差し引けば河内地方の土器の特色がわかるということになるが、生駒西麓産と生駒西麓産以外の土器の間の差は、今回のよ⁽¹²⁾うな資料操作ではあまり明確にはできないものである。今後は両者の今回みたような器種構成、文様の比較に加えて形態、調整、胎土など全体的な比較が望まれ、土器製作にかかる両者の違い、すなわち他からの影響、独自の特色などの分析を通じて、頭書に述べたような本質に近づきたいものである。

弥生時代前期、中期初頭を通じてみる本遺跡出土土器は、河内地方の特色を示す良好な資料であり、基本的には瀬戸内海、大阪湾沿岸地域の影響を強く受け成立しているものと考えている。搬入品としては、播磨、摂津地方西部、近江、大和、和泉、紀伊地方の土器が見られる。とくに和泉、播磨・摂津地方西部の影響を受けた地元産の土器があり、河内湖を基調とした人間の移動を含む直接的な交流関係を見い出すことができる。大和、紀伊地方については大和川水系による南方向からの搬入路が示されるものである。これらは土器だけでなく、人間を含めた石材その他の移動全体にかかるものであり、美園遺跡はやはり河内平野中心部に位置するという立地上の性格が土器に反映されているものであると思われる。

5) 縄文時代晩期土器との関係

縄文時代晩期土器はB地区中～南半部分の住居跡包含層、溝などから弥生時代前期土器と併出して5点程度であるが出土した。いずれもごく小破片で磨滅したものである。これらには縄文晩期最終末と考えられている生駒西麓産の長原式の深鉢（B145・147・148）と、生駒西麓産以外の深鉢、浅鉢（B146・149）がある。長原式土器と弥生時代前期土器との関係が時間的に接続す



第430図 縄文時代晩期土器

るものか、ある段階で併行するものであるのか、本遺跡出土土器の状況をみてもまだまだ不明であり、今後の検討を要するものである。

なお、BNR202に縄文時代後期前葉の土器片が出土する。またF地区に晩期初頭滋賀里1期の深鉢などが出土した河川が検出されていること、さらに、先にも述べたように弥生時代前期前半の土器も微量ではあるが見受けられる。現状調査範囲ではその生活跡は検出されてはいないが、美園遺跡は縄文時代以来の集落跡であったことが予想される。上記の弥生時代前期後半～中期初頭土器も基本的にはこれら伝統的地域性のもとにあるわけである。

註(1) 生駒西麓産土器の原料（粘土と混和材）の採集地については各種の見方、意見があり、最終的な規定はされていない。この現状で生駒西麓産とそれ以外の土器というように規定し、検討することは邪道かもしれない。しかし現実的には肉眼で観察できる範囲で二者が分けられることは確かであり、これら二者の中間的な判別しづらい土器が存在する現状においても、やはり、今後の資料分析のためにあえて分類せざるを得ないものと考える。

- (2) 井藤暁子「入門講座 弥生土器 近畿」考古学ジャーナルNo.195 1981
(3) (財)大阪文化財センター『池上遺跡 土器編』、1979
(4) 上西美佐子「山賀遺跡（その3）出土の弥生土器について」（『山賀（その3）』） 1984
(5) 第413図は口縁部上端外方に貼付突帯をもつものを集めた。B534、B535などについては朝鮮系無文土器の影響を考えることができるかもしれない。

井藤暁子「八尾市美園遺跡出土弥生時代前期後半～中期初頭の土器」

（『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第9回）資料』 1983）

井藤暁子「八尾市美園遺跡出土弥生時代前期後半～中期初頭土器」

（『埋蔵文化財研究会第15回研究集会資料』 1984）

(6) 註(3)と同じ。

(7) 同上

(8) 寺沢薰「畿内弥生土器様式発展史素描」（『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズI） 1982

(9) 註(3)と同じ。

(10) 註(4)と同じ。

(11) 註(4)と同じ。

山賀遺跡（その3）出土弥生時代前期土器の器種構成

土器群	壺	無頸壺	鉢	高杯	甕	壺蓋	甕蓋
	29.4%	0.3	7.4	—	55.3	4.3	3.3
I(中)包含層	31.0	0.7	6.9	—	48.0	8.7	4.7
I(新)包含層	37.5	—	10.0	0.1	41.0	8.4	2.9

(12) 具体的には都出比呂志氏が試みたような文様の比較（簾直指数など）などがある。

都出比呂志「弥生土器における地域色の性格」（『信濃』第35巻4号） 1983

第4節 「美園遺跡における石槍製作工程の分析」

花園大学 進藤 武

Iはじめに

弥生時代の打製石器に関する研究は、近年漸次的であれ、その研究対象・研究内容を深めつつある。⁽¹⁾しかし、石器自体の有する多様性（例えば、広義の意味で用いられる不定形刃器やいわゆる尖頭器等の厳密に分離しがたい資料の存在）及び土器に比べ型式・形態上の変化による時間幅が長いこと等により、いずれも定型化した石器に片寄った傾向にある。

また、弥生時代の主要な利器として、幅広くその存在が知られている石槍についても例外ではない。その詳細な規定は曖昧で、石鎌・尖頭器・石剣と明確に区分されていないのが現状である。⁽²⁾とりわけ形態・統計処理上から分離されつつある「尖頭器」との区分は不明確であり、一層の剥片剥離技術、製作工程の復原等を基礎とした分離作業が必要とされよう。

以上の点より本章では、弥生時代前期に大旨限定された資料をもとに、石槍製作工程に絞ってその特性を明らかにし、尖頭器をはじめとした若干の問題について触れてみたい。

II 美園遺跡の概要

ここでは石槍・尖頭器についての資料が得られたBトレンチについて概略する。Bトレンチは、美園遺跡における弥生時代前期の中心的位置を占め、住居址14棟をはじめとする各遺構、並びに多量の畿内第Ⅰ様式新段階の土器、石器類が出土している。また当然のことながら、これらは当時の生活様式の一端を強く反映したものである。しかし、Bトレンチ出土の石器類の多くは残念なことに、厚さ30~40cmの包含層（粘質土層）より散在した状況にて検出され、遺構本来の出土は極めてわずかであった。

出土した打製石器類は、コンテナ5箱にのぼり、その内容は石鎌、石槍、尖頭器、石錐、削器、楔形石器、二次加工のある剥片があり、他に石器製作を裏付ける石核、剥片、碎片、未完成品・失敗品（以下、総称する場合は未完成品と記す。）、ハンマーストーン、台石が認められる。⁽³⁾

また、以下取り扱う石槍・尖頭器類は完成品5例、未完成品36例（接合資料1例を含む）の内、⁽⁴⁾先端部、基部等の断片7例を除く計34例を資料対象とする。

III 石槍製作工程（第431図参照）

(1) 原礫及び素材

石材はすべて安山岩（サヌカイト、サヌキトイド）を用いており、原礫はそれ自体を見い出せぬことより明らかでないものの、未完成品より握拳大から幼児人頭大程度の角礫・亜角礫を用いているようである。原礫面は朽木状・海綿状を呈するものが多く、石質は粗くフィッシャーが強く⁽⁵⁾あらわれ、流状構造が目立つものと、緻密で良質なものとの二者が認められる。また素材には礫

芯部・大形剝片を用いた例は稀で、小形の横長あるいは不整形な剝片を多様している。

(2) 大きさ (第28表)

完成品の大きさは長さ 6.8~12.8cm を示し、幅は 2.9~3.3cm 内に納まる。これらは長さの点でややばらつきを見せるものの、幅はほぼ均衡した数値を示している。次に未完成品は折損品を除けば、6.7~13.1cm、幅 3.35~7.9cm 内にあり、完成品と長さの点ではほとんど差が認められず、幅の点で平均 1cm 余り完成品より広い傾向が認められる。これらは製作当初より完成化された石器の長さを強く意識したものか、石材の長さを最大限に利用しようとする結果によるものと解される。いずれにせよ、製作上、幅の削減に関わる加工に重きが置かれていたことを物語る。なお、厚さも長さと同様に、完成品器面上に素材剝片の一端である第1次剝離をとどめることから、さほど削減されていないようである。以下、順を追って製作工程を記したい。

(3) 第1工程 (第432図)

角礫・亜角礫を打撃し、片面に大きく原礫面をとどめた剝片ないしは、輪切状に分割して得られた剝片を素材とし、側面部から片面を中心に粗く薄い剝片を剝離する工程である。またこの剝離痕は次の整形剝離の打面を形成する。

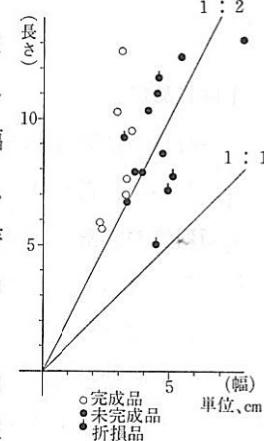
B916 は c 面右側縁と上・下端に原礫面を残余し、角礫を輪切状に分割したやや扁平な剝片を素材とする。c 面左側縁部には 8 枚の粗い剝離痕が見られ、それを打面として a 面右側縁の剝片を剝離している。a 面左半の 4 枚の剝離痕は、d 面の原礫面上を不均衡に打撃し、この部分のみ本工程を削除している。その為か上半の厚さを損し、両側縁も非相称形をなし破棄されたものであろう。素材に用いた剝片サイズを推定すれば、長さ 7.6cm、幅 4cm、厚さ 1.7cm 余りで B トレンチ出土の未完成品を象徴する小形品である。

B917 は c 面の大部分と一側面及び上・下端に礫面をとどめている。形状は短冊形を呈し、本例が角礫素材であることを明確に知り得る。c 面の大部分は主要剝離面と、下半に横位から剝離された面より構成されており、剝離面は平滑で素材として長さ 11cm、幅 4cm、厚さ 2cm 程度の板状剝片が用意されていたことが理解される。a 面は右側縁から薄い数枚の剝片を剝離し、その稜上を打撃することによって、c 面左縁の剝離痕が剝離されている。なお、この剝離痕が著しい蝶番剝離をなすことによりバランスを損じ破棄されたものであろう。

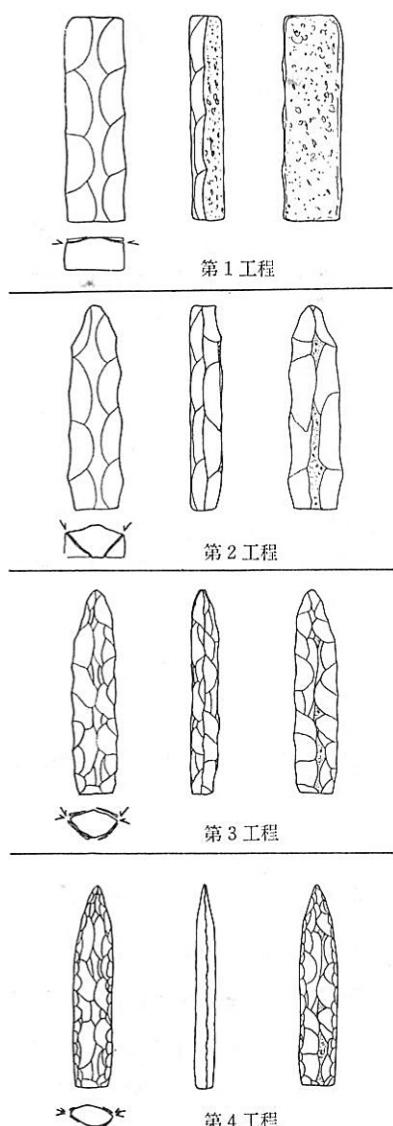
本工程の特徴は素材の大きさを保ちつつ、次の整形過程の打面を形成することにあり、未だ先端部・基部作り出しの意図は認められない。

(4) 第2工程 (第433・434図)

第1工程で薄く剝離された面を打面として、主に幅を削減し形状を整える工程である。その際、打撃は切り合う剝離面の稜上になされることが多く、この剝離作業によって下面両側のコ



第28表 美園遺跡・
石槍長幅比



第431図 美園遺跡石槍製作工程模式図

ナー部分が取り除かれ、断面形は扁平な六角形ないしは菱形に近いものとなる（第431図-2）。また、上端においては側縁部よりもやや内側を打撃する傾向が認められ、先端部形成を多少なりとも意識したものであろう。これら剝離によって側縁部は膨らみぎみの粗いジグザグ状を呈することとなる。

B918は小形幅広な未成品で、c面右辺に本工程を示す剝離痕が顕著である。本例はこの剝離痕が稜上を打撃していないせいか、比較的平坦に剝離している。特に右辺上部の剝離痕は先端部を意識しやや内側を打撃しているものの、意図した以上に上半部へ大きく剝離面が及び、逆に先端部を規制し破棄に至ったと考えられる。

B919は本資料中最大の未成品で、大形剝片を素材とし、a面上半部に主要剝離面が残余する。右側縁に認められる2枚の深い剝離痕は、c面に施された剝離面を打面とし、主要剝離面の打面部を除去するかたちで剝離されており、本工程の一端が窺える。下端は原礫面のままであるものの、この礫面を打面として上方に大きな剝離痕が観察される。また上端も不規則ながら先端部を意識した整形の痕跡が認められる。

(5) 第3工程（第435図・B922～924、第436図）

第2工程にも増して形状が整えられる工程で、整形加工はほぼ器面全体に及ぶ。つまり本工程で中央部に残余していた第一次剝離面の多くが取り除かれ、器幅がほぼ規定され、側縁部も平行化、断面形もより菱形ないしレンズ状に近いものとなる。また本工程の特徴として縁辺から施され

た階段状・蝶番状剝離の末端を打面とし、背上の凸状箇所を除去する剝離を稀に施すことがある。

B923は上・下端を欠き片面のみ整形加工の進行した失敗品である。側縁部には数度にわたる打撃による潰痕をとどめ、階段状・蝶番状の剝離痕が顕著である。⁽⁶⁾ c面の大部分は原礫面のままで、わずかに第2工程のa面を打面とした剝離痕が見られる。

B924は上半を折損し、B923同様片面のみ整形加工の進行した例である。c面は未だ原礫面を大きく残余するものの、右辺には第2工程の大きな剝離痕が見られコーナー部分を削除している。a面はほぼ全面にわたり整形剝離がおよび側縁部には微細な調整痕すら認められる。また、⁽⁷⁾ b面には本工程のなされる以前に、器面と直交するような平坦面を設けており、側縁部の平行化

を目的とする石器の大きさを規定する一作業と考えられる。

また本工程に属する資料が最も多く、更に折損品が多く認められる。これらは器面調整上平坦ぎみな剥離によるものと思われ、折損面には側面からの水平的な打撃痕、フィッシャー等が観察されるものがある。

(6) 第4工程

最終的な仕上げの工程で、微細な調整加工により鋭利な先端と主として直線状を呈する基部を作出する。先端部の形成には、先端や下方を両側縁より剥離することによってなし得ているよう、B898、B836等はこの部分に若干窪んだ形跡が認められる。一方、基部の作出はほとんど手が加えられることなく、第2工程で下端の厚さを削減する試みと思われる原礫面を打面とした上方への剥離痕（B921、B924）のほかは、本工程での微細な調整剥離で仕上げている。よって基部末端は原礫面をそのまま残置するものが多い。またB927に見られる如く、基部を直線状に仕上げない例も存在し、剥離作業面からは基部が先端・側縁部程意識されなかったようである。着柄を考えれば、B898等に見られるよう中間部から基部・側縁部に少なからず認められる研磨痕が、基部を整える上では剥離作業以上に多様されたと推察されなくもない。⁽⁸⁾

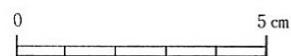
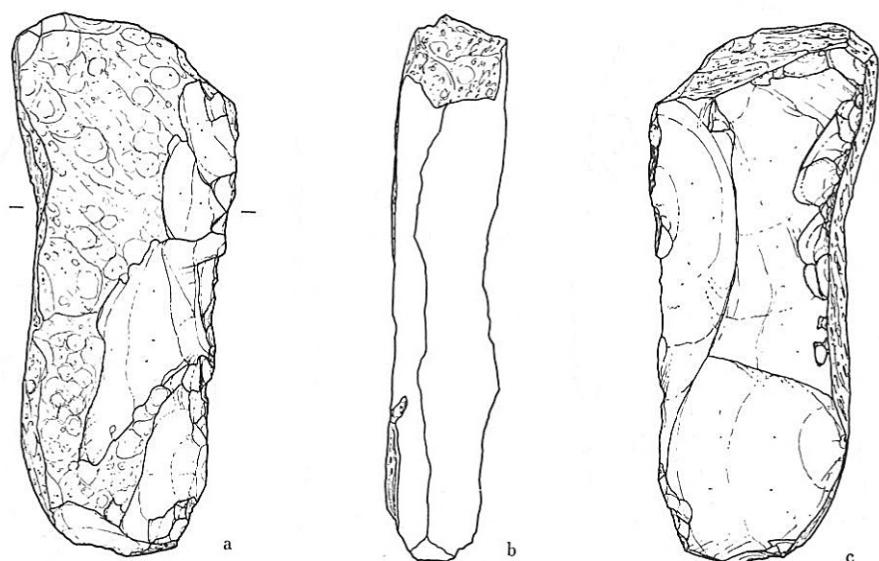
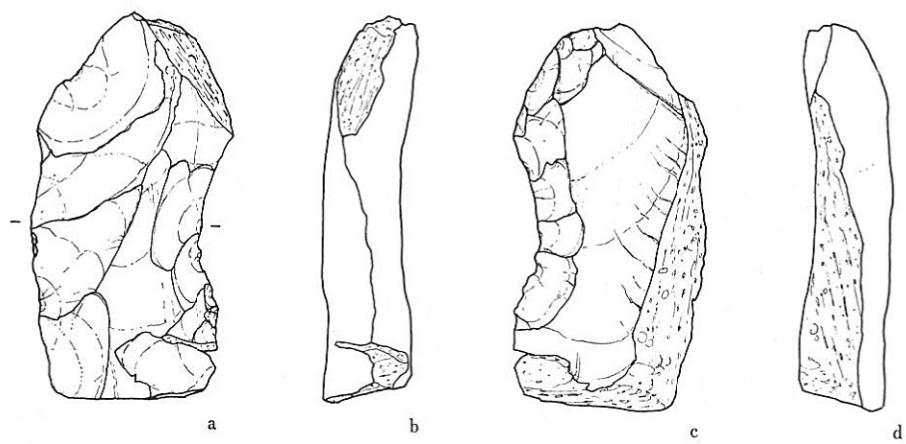
Ⅳ 石槍に関する問題について

以上、弥生時代前期の美園遺跡における一般的石槍製作工程を示したが、更に従来より指摘されている若干の問題について触れてみたい。

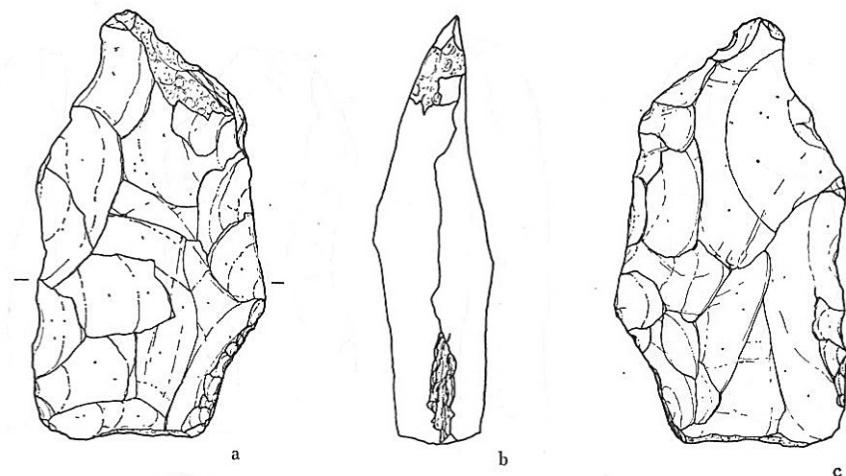
(1) 石材供給について

二上山北麓中谷遺跡では従来より多量の槍先形石器未成品が報告されている。⁽⁹⁾しかし完成化された石器を量的に認めることができず、土器を伴わないことより生産された石器、製作時期を確定するまでには至っていない。亀井遺跡ではこれら二上山との関係について、中谷遺跡では礫芯部・大形剥片を素材とし、基部が尖がるものと一般的であり、「サヌカイト産出地所在の中谷遺跡=石槍形石器の製作→平野部所在の亀井遺跡=搬入、消費という両者の直接の関係を認めるることは不可能」とされている。⁽¹⁰⁾本遺跡の石槍も亀井遺跡と同様に中谷遺跡とは直接結びつけることはできず、更に本遺跡では初期工程より製作され、かつ非常に小形品である。大きさの項でも記した通り、本資料からは完成品、未完成品との長さに大差がなく素材当初から小形品を目的としていると考えられる。また、中谷遺跡においても、その立地条件、石質が他の原産地遺跡に比べ劣るという諸点に対し、松藤氏は原礫サイズの重視をその理解の要因としてとらえている。⁽¹¹⁾

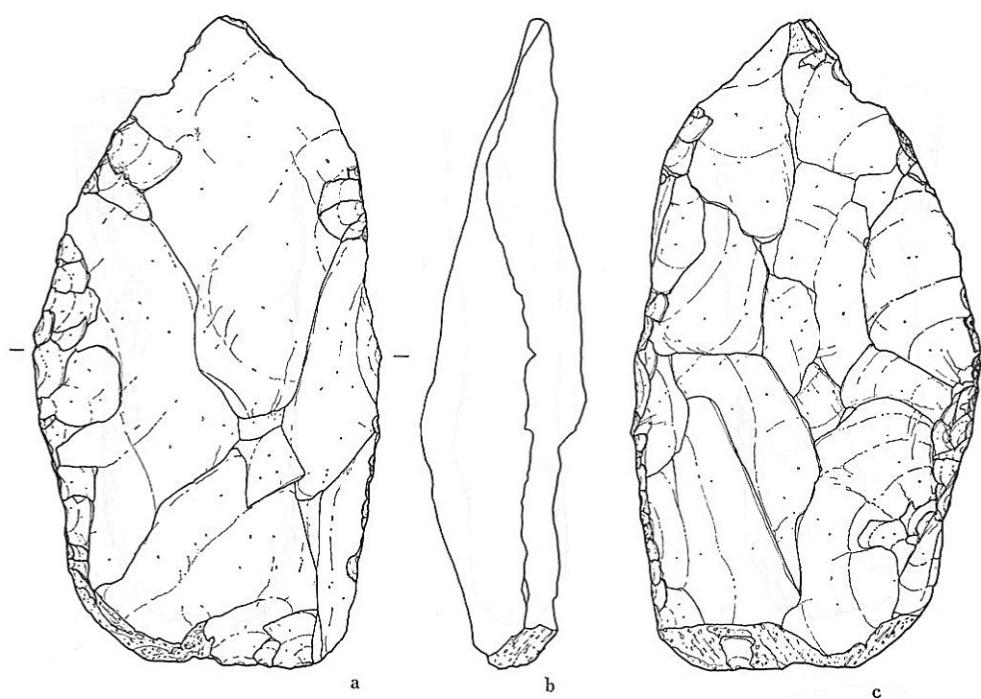
しかしながら、その製作工程、剥片剥離技術上大差は見られず中谷遺跡においても「成形加工→整形加工→先端・基部加工」のプロセスをたどり、B924に認められるような側面部に器面と直交する平坦面をみせるものが少なからず存在すると言う。従って、中谷遺跡を初めとした二上山北麓遺跡と直接的に結びつかないまでも、両者は似通った技術的基盤を保有し、依然原石供給



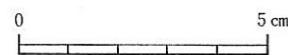
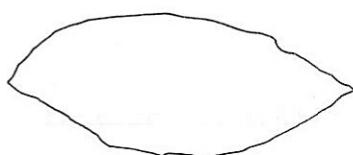
第432図 石槍未成品実測図(1)



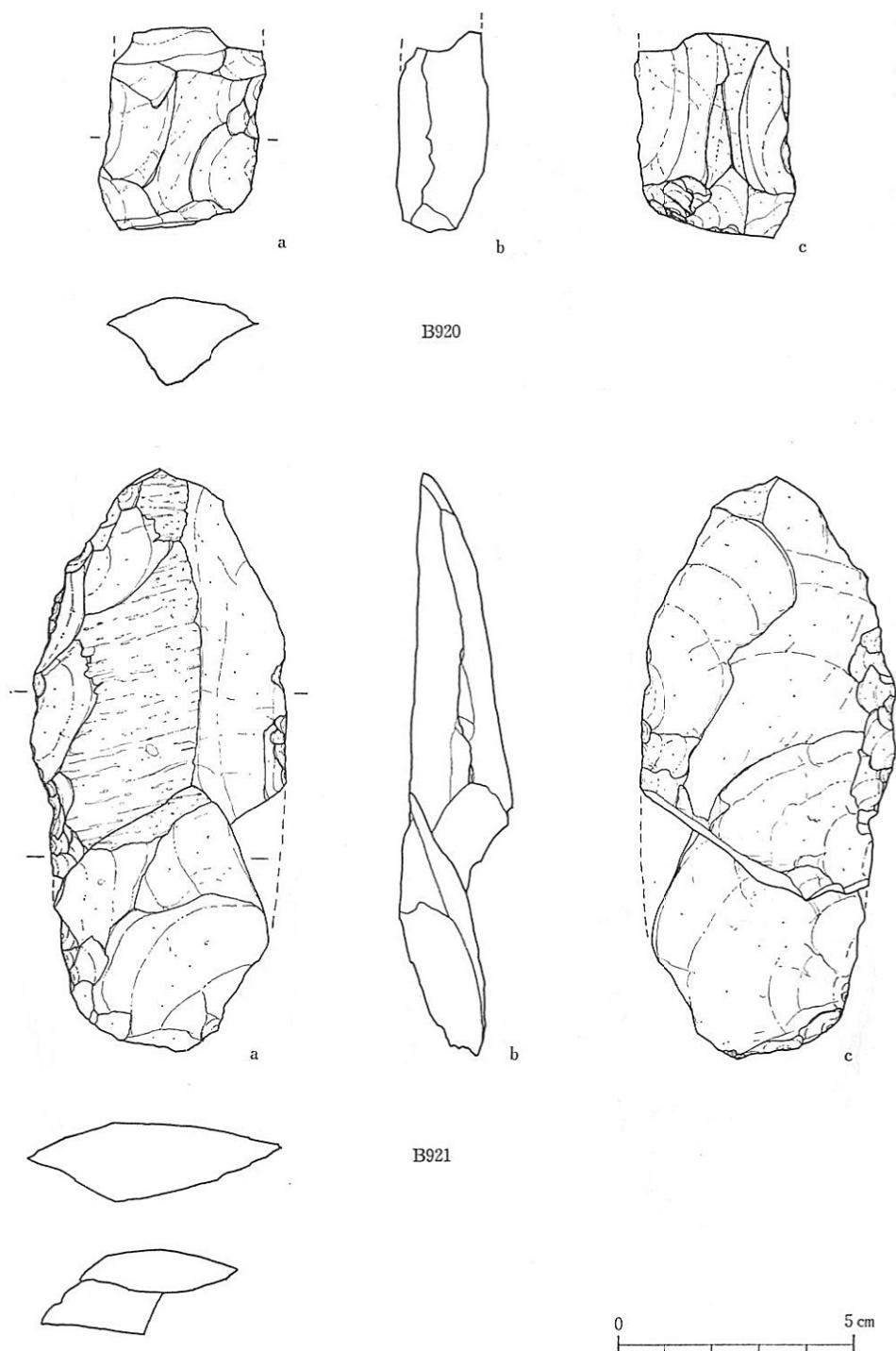
B918



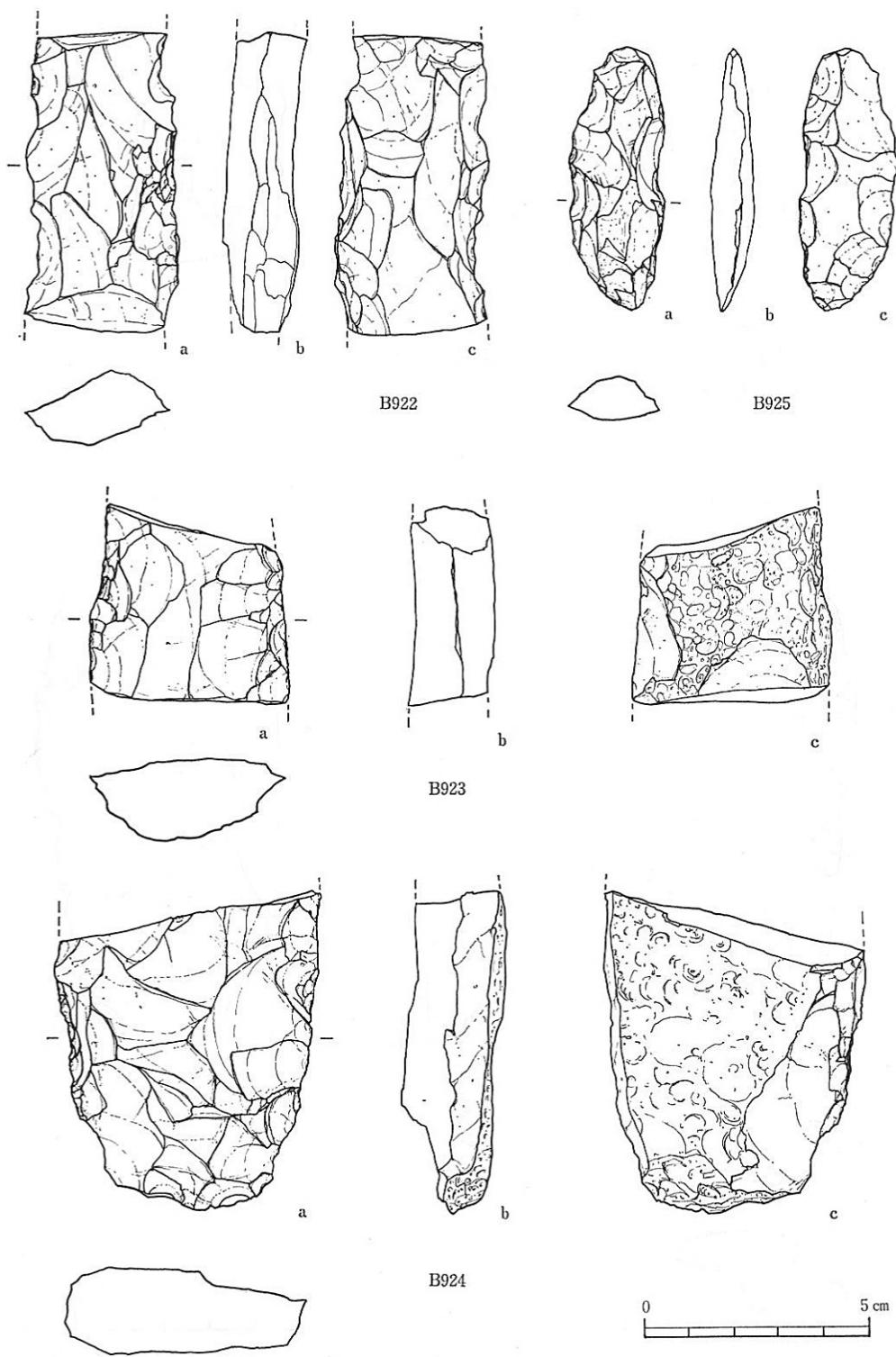
B919



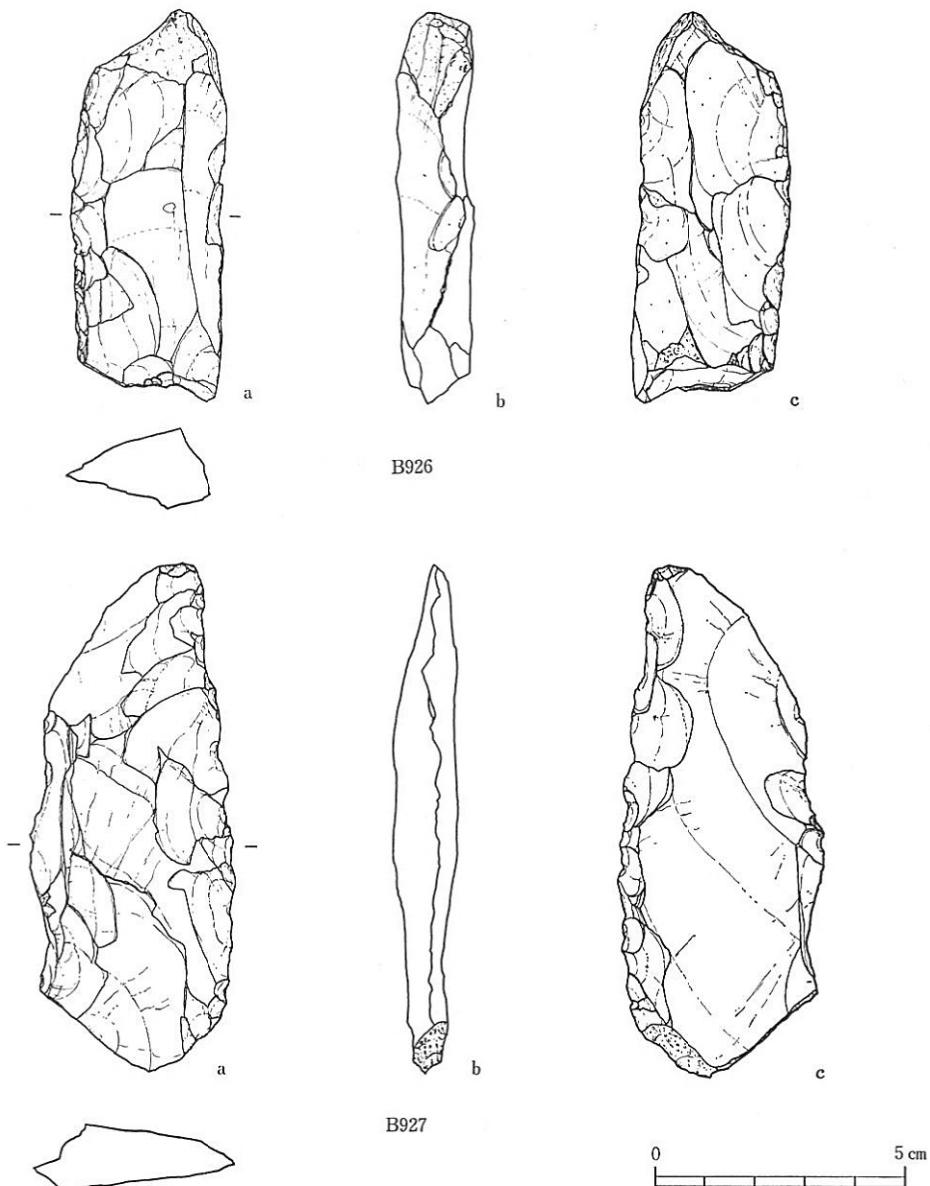
第433図 石槍未成品実測図(2)



第434図 石槍未成品実測図(3)



第435図 石槍未成品・尖頭器実測図(4)



第436図 石槍未成品実測図(5)

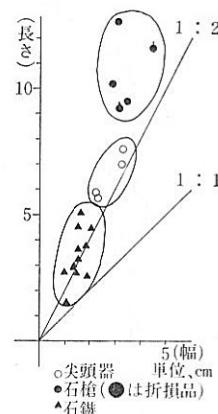
地として深いつながりをもっていたものと思われる。

また尖頭器（B925）は、風化の進行による白色化とは異なった淡灰色を呈したサヌカイト（古銅輝石安山岩）であり、二上山以外に石材供給地を求める必要がある。

(2)いわゆる尖頭器について（第29表）

本資料中においても形態・統計処理上、石槍・石鎌のいずれにも含めがたい石器が4例確認された。これらは長さ6cm弱、幅2.5cm余りで先端を強く意図したもの（B850、B925）と、長さ7.8cm、幅3.5cm程度で幅広く、先端が鈍く丸味を持ち、削器のような側縁部を呈するもの（B

853・854)との2者に分類される。これらは本資料中の石槍と比べ、両者共小形品であり、先端を多少なりとも意識する点で一致するかと思われる。しかし、分類した後者の尖頭器は先端部の刺突的要素に欠け、側縁部に重きが置かれていたと考えられるほか、製作工程上石槍はすでに前述した工程を踏まえるのに対し、尖頭器は規則的な製作工程が理解されず、素材に用いた剝片もより薄身なものであったと推測される。更に従来から指摘されるように、弥生時代前期の石槍は一般的に小形品であることを考慮すれば、少なくとも分類した後者の尖頭器と石槍は分離し得るものと考えられる。⁽¹³⁾



第29表 美国遺跡尖頭器・石槍・石鎌長幅比

『おわりに』

本稿では時間的・資料的な制約から、美國遺跡弥生時代前期の石槍に絞って若干の問題を記すにとどまった。しかし、従来よりこの種の石器が、フリーフレイキング、ステップフレイキングのみによる単純な剝片剝離作業により生み出されているものではなく、第1工程で示した打面調整、第2工程での下面コーナー部分の削除等、技術的に優れ、効率的な一連の作業として製作されたことがほぼ理解されたものと思われる。また時期的に弥生時代前期に比定され、縄文時代から最も薄く長身な石槍の盛行する弥生時代中期にかけての様相を埋めるものとして有効な資料となろう。尖頭器に関しては資料的制約もあって、一連の工程を示し得ることができなかったものの、石槍とは区別されそうである。

打製石器は磨製石器等に比べ、縄文からの伝統を強く受け継ぐものとされる。しかし西日本の縄文時代晩期における石器製作に関する認証は乏しく、数量的・特徴的石器による対比から弥生時代の様相に鑑みている状況である。今後の課題として各遺跡における検証を基礎とし、定形化した石器のみにとらわれることなく、縄文時代から系統たてた研究をもって、打製石器より見た弥生社会を捉えて行きたい。

本稿を草するにあたり、全体にわたり渡辺昌宏、小野久隆、岡本敏行の諸氏に、また石材鑑定に際しては秋山隆保氏に御教示と御協力を賜わった。文末ながら深く感謝します。

註(1) 福井英治『田能遺跡発掘調査報告Ⅰ』尼崎市教育委員会 1972年。

西村尋一「亀井遺跡における剝片生産技術」「亀井」 大阪文化財センター 1982年。

佐藤良二「第2節石器」「第3節奈カリ与遺跡の剝片生産技術」「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」 兵庫県教育委員会 1983年。他

(2) 増田一裕「Ⅲ遺構と遺物、5.大福遺跡の石器」「大福遺跡」 奈良県立橿原考古学研究所 1978年。

尾上・蜂屋『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 大阪府教育委員会 1980年。

尖頭器に関しての特長を記せば、小形幅広で、扁平断面、鈍い先端、削器を思わせる側縁部等があげられている。また、幅と厚さ或いは全長と重量に対する統計的比率より分離作業が試みられて

る。

- (3) 本遺跡中より 9 点の小形棒状品が出土している。長さは 10cm、幅 3cm 程度で、これらすべてをハンマーストーンと認めるることはできぬとも、側縁部にわずかながら敲打痕跡をとどめるものが存在する。また、先端部に敲打痕跡は認められず、これらは強大な加撃を主目的とするものでなく、主として最終工程の整形・調整加工に用いたものと思われる。
- (4) 資料対象は主として製作工程の窺い知れるもので、表 1、2 で示した点数は大きさの知り得ることに主眼を置くことから必ずしも合致しない。また、1 つの石器が 1 工程を示すものでなく、2 ないし 3 つの工程を含んでおり、その識別も困難なことからあえて各工程の窺える資料点数を明示せず、何点かに代表させている。
- (5) 前者は主として折損品に、後者は未完成品に多く認められる。
- (6) 松藤和人「再び“瀬戸内技法”について」『二上山・桜ヶ丘遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所 1979 年。氏はこの中で、潰痕・凹痕と打撃具の種類、形状、打撃力の違いを反映するものと考えられている。本資料中凹痕と呼べる打撃痕は僅少であり、先に註(3)にて示した棒状の小形ハンマーストーンが、この潰痕を成し得る要因となったものであろうか。
- (7) 松藤和人「中谷遺跡の槍先形石器」『旧石器考古学 25』 旧石器文化談話会 1982 年。中谷遺跡においても同様の平坦面が認められており、器面調整の際場合によっては鈍角剥離を生じ器面調整に困難を来たす不可解な剥離技術であるとしている。
- (8) 松沢亜生「弥生時代の石槍と呼ばれる石器」『考古学ジャーナル』No. 122~123 1976 年。氏が槍以外の用途を提起したように、石槍かはたして槍かは未だもって不正確である。藤田三郎『唐古・鍵遺跡第 13・14・15 次発掘調査概報』 田原本町教育委員会 1983 年。から出土した鞘入り石剣も、いわゆる打製石槍の範疇に入るものであろう。しかし本章では弥生時代前期の小形品であり、槍としての機能が最も考慮されることより、石槍としている。
- (9) 高田勉「5. 中谷遺跡」『ふにがみ』 同志社大学旧石器文化談話会 1974 年。
有本雅己「中谷遺跡採集の槍先形石器」『旧石器考古学 25』 旧石器文化談話会 1982 年。
松藤和人 言(7)に同じ。
大野薰・山中一郎他『中谷南遺跡発掘調査概要 I』 大阪府教育委員会 1982 年。
- (10) 酒井龍一「第Ⅶ章第 3 節亀井遺跡の石器生産」『亀井・城山』 大阪文化財センター 1980 年。
- (11) 言(7)に同じ。
- (12) 言(7)、高田勉註(9)に同じ。
- (13) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』 桑名文星堂 1943 年。
小林行雄・佐原真『紫雲出』 詫間町文化財保護委員会 1964 年。

第5節 美園遺跡出土の弥生時代後期末から 古墳時代前期の土器

渡辺昌宏

1 はじめに

今回の調査においては、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器が多数検出された。これらの資料は包含層からだけではなく、多くは遺構に伴って出土している。C地区遺構出土の一括資料を中心に編年作業を試みた次第である（付図34参照）。

2 器種

(1)鉢

A類：外反する口縁を有し、頸部がくびれている。体部は丸味をもって底部へ向っていた。

B類：僅かに摘み出した口縁部をもつが、全体にはカップ状を呈する。

C類：口縁が大きく開く鉢であり、体部は半球形を呈した。底部は平底になるものが多い。

(2)台付鉢

一部高杯と呼べるものも含めており、上部の鉢には鉢A類と類似したもののが乗る例もあった。脚台部だけの破片が多く見つかっている。透かし孔を持つものも認められた。

(3)杯

鉢A類と類似する特徴をもつが、体部が浅めである。布留式に入ると明確になる器形であり、庄内式の後半から出現する。

(4)甌

器形としては鉢の一種に含まれるものであり、底部に焼成前の穿孔が1個認められる。甌として使用されたと思われるが、その用途に疑問を持つ意見もあり今後検討を必要とする。

(5)大形鉢

鉢の一種であり、鉢の分類に入れた方が良いかもしれないが、ここでは大形鉢として別個に扱う。生駒西麓産の胎土で製作されたものが多く、古い時期にはほとんどが片口であった。鉢A類と類似しているが、全体的に口縁部が短い。

(6)器台

A類：受部は皿状を呈し、端部がやや立ち上がる。脚台部は下方に広がり、受部と脚台部との間は貫通していない。

B類：A類と類似しているが、受部は丸味をもたず直線的に外反していた。

C類：浅い受部をもち、脚柱部が太めである。脚台部は大きく開くと思われる。

D類：山陰地方に多く見られる所謂鼓形器台である。庄内式のものは包含層から出土しており

（第202図C091）生駒西麓産であった。布留式の場合は、そのメルクマールになる小形精製土器三種の一つを形成している。⁽¹⁾

(7)高杯

A類：杯部の口縁が大きく外反しており、杯部下方外面に稜が観察される。庄内式の新しい段階になると脚柱部が短くなる傾向を示す。

B類：大形の高杯で、2段に外反する杯部をもつ。杯部の口縁が直線的に強く開き、杯部下半部は明確に分離された。大和地域でも同様のものが出土している。

C類：A類が変化した器形で、杯部下方に丸味をもつ、布留式に認められる高杯である。

D類：杯部が半球形のカップ状を呈する。脚柱部は極めて短く、脚台部は外側にかなり広がっていた。新しくなるに従って、杯部の口縁が立ってやや深めになる。

(8)手焙形土器

本遺跡からは手焙形土器が多数検出された。器形の変遷及び編年については、本書第Ⅶ章第7節で詳説している。

(9)製塩土器

脚台 I式⁽²⁾になると考えられる、製塩土器の脚台部が1点出土した。

(10)壺

A類：口縁部が外側に開く小形壺で、小形丸底壺の系譜をもつものである。

B₁類：口縁がやや外反する直口壺で、比較的大形のものを指す。

B₂類：器形的にはB₁類と類似している、小形の壺である。

C類：やや外反する短い口縁部をもつ、比較的小形の壺類を含めた。

D類：口径の大きな短い口縁部をもつ壺で、形態的には甕に類似するもの。

E類：頸部に突帶をもつ大形の壺である。二重口縁になるものが多い。

F₁類：二重口縁の大形壺形土器を本類として扱った。但しD200は、系譜的には中国地方の影響を受けていると考えられ、本来は別の器種分類に入れた方が良いかもしれない。

F₂類：二重口縁の小形壺を指す。

G類：直口壺の口縁端部がやや外反して、丸味をもつもの。

(11)甕

A₁類：本遺跡を含む、平野部の周辺遺跡で製作されたと思われる大形の甕である。外面には荒い叩き目が施されていた。

A₂類：A₁類の比較的小形のものを含めた。

B類：美園遺跡及び周辺の平野部に立地する遺跡で製作されたと思われる甕である。底部に笠削りを施しており、尖底状を呈する。

C類：A・B類同様在地及びその周辺部産の土器である。口径と体部最大径とが、ほぼ同じになる広口の大形甕であった。

D類：生駒西麓庄内式甕の器形的な影響を受けて成立した。在地産（周辺平野部遺跡を含む）の甕である。その系譜を受け継いで、布留式の甕が出現すると考えられる。

E類：摂津ないし播磨地域の土器と考えられ、胎土も河内平野部のものとは異なっていた。

搬入された土器であろう。体部が球形を呈し、器壁が薄く、細い叩き目が観察される。

F類：布留式甕の一種である。口縁部が強く外反して、体部は球形を呈する。本遺跡においては、布留式に入ると生駒西麓産の胎土をもつ甕がほとんど認められない。

G₁類：生駒西麓産の比較的大形の甕。（所謂庄内式甕によって代表される。）⁽³⁾

G₂類：生駒西麓産の比較的小形の甕。

以上35種類の器種に分類した。

3 時期

遺構に伴う一括資料を中心とした土器の型式学的な検討及び遺構の切り合い関係等から、以下で説明する7期に分類した。各時期の特徴を概略的に述べてみたい。

(1) I期

代表的な遺構としては、C S D 302 (C 152～C 154)、C S K 301 (C 184・C 187・C 188・C 190・C 191) がある。甕類について言えば、所謂生駒西麓産庄内式甕（甕G類）の共伴は認められず、在地（周辺平野部に立地する遺跡を含む）の胎土で製作された甕がほとんどであった。器形的には微妙な差異が認められたが、基本的には外面に荒い叩き目を施し、内面は刷毛目ないし窓ナデを加えている。C 154のように底部を削って尖底状にした甕が認められた。

畿内第Ⅳ様式末に相当すると考えられる。

(2) II期

代表的な遺構には、C S K 308 (C 280・C 283)、D S K 306 (D 193・D 195・D 197～D 200・D 203～D 208)、C S D 320下層 (C 284) があげられる。特に興味深い点としてはD S K 306出土資料中に中国地方の影響が見受けられた。具体的にはD 200とD 208である。この時期は、地域間交流がより盛んになるとと考えられる。⁽⁴⁾

II期は甕の特徴から2時期に細分することが可能であり、C S K 308出土資料が前半期、D S K 306及びC S D 320下層出土資料が後半期に相当する。前半期の在地産甕 (C 283) は、体部が球形化を示すと共に底径が小さくなる。外面の調整は体部下半部と上半部で叩き目の方向が異なり、体部上半には「連続ラセンタタキ技法」が観察された。また底部は端まで丁寧に叩きを施し、底面の中央を窓削りによる抉り込みを加えて、小さな凹みを作っている。内面はまだ窓削りが明確ではなく窓ナデないし板ナデ等を施していた。後半期の在地産甕 (D 199、C 280) は、全体の成形及び調整が粗雑になる。特に底部外面の調整が前半期と異なっていた。中央部の窓削りによる凹みが小さくなり、最後に底部底面へ叩きを加えている。この叩きのために底部縁辺の粘土がはみ出すような状態を呈し、前半期のような底部のシャープさが失われる。この段階になって初めて、本遺跡では所謂生駒西麓産庄内式甕（甕G類）が伴う。C 284に代表される甕であり、D S K 306からも検出されている。器形の特徴としては口縁に端面を持たない点と、体部最大径が肩部に近い体部上半部に認められることであった。また底部は、僅かに平底状を呈している。調

整の点では、外面に細い叩き目を施し、その上にかなり荒い縦方向の刷毛目を体部上半部から下半部にかけて加えている点が特徴である。体部内面は、全体に良く箝削りが施されており、器壁は、かなり薄かった。

(3) III期

代表的な遺構としてはC S D319 (C 287、C 289、C 291、C 298、C 299、C 301、C 303、C 305～C 310、C 312～C 314、C 316、C 318) と C S D320 上層 (C 277～C 279、C 282) がある。C S D319からこの時期に属する土器がまとまって出土しており、器種のバラエティが豊富であった。前時期と比べて中国地方の影響を受けた土器が減少し、今度は生駒西麓産のものが増加を示す。しかし、鉢A類、器台、高杯類では在地産の土器が多数を占めた。甕類は前時期からの系譜をもつA₁、A₂類が激減し、逆にG₁、G₂類が増大する。甕G₁、G₂類の特徴としては、口縁端部に面をもつものが現われ、体部最大径が上半部から中央部へと徐々に下がってきた。底部は尖底状を呈するものがほとんどである。外面の調整は、体部に細い叩き目を施し、その後体部下半部に細い縦方向の刷毛目を加えるようになる。またC 301のように、生駒西麓産庄内式甕の影響を受けて成立したと考えられる在地産の甕（甕D類）も現われる。この甕は溝から検出された資料であり、共伴性の点で若干問題を残すが、すでにこの時期から存在している可能性が大きい。

(4) IV期

B S K304 (B 1047、B 1048、B 1050、B 1052) と C S K303 (C 209～C 212、C 217) 及びC S D312 (C 192～C 195、C 199、C 202) からこの時期の一括資料が見つかった。特徴的な器形としては、布留式で顕著になる杯がこの時期から現われるようである。また高杯A類は脚柱部が短くなり、杯部下方外面の屈曲部分に沈線が施されるものがあった。二重口縁壺（壺F₁類）には、箸墓古墳出土の底部穿孔壺と口縁部の形態が類似しているものが認められる（C 192）。甕G₁、G₂類の場合は、まずプロポーションが変化を示す。口縁端部が上方に摘み出されており、端面を縁状に巡っていた。体部は中央部及びやや下方に最大径を有するものが増え、全体に球形化していく。体部外面の調整は細い叩き目を施した後、その上を全体的に細い刷毛目で調整を加えていた。体部の球形化と刷毛目調整の盛行が顕著である。

(5) V期

C S D313上層 (C 342～C 346) からまとめて検出されている。数量的に少ないため各器種の変遷が充分には捉えられなかったが、大形鉢、壺B₂類、壺F₂類、甕G₂類に顕著な特徴が観察された。IV期との差異は少なく、あるいは同一の時期として含められるものかもしれない。庄内式と布留式の接点に相当する時期であり、甕G₂類はIV期に比べてかなり布留式の甕に近似していた。

(6) VI期

C S D323 (C 353、C 354、C 357、C 358)、C S D324 (C 365、C 367、C 368)、C S X305 (C 347) が代表的な遺構である。時間的な幅をもつ溝から検出された遺物が多く、良好な一括

関係を把握することができなかった。ここでは従来の小若江北式に相当するものを、Ⅶ期として扱う。

最近布留式の成立については、庄内式甕（甕G類）の変化から判断して、若干遡る見解が提示されている。⁽⁷⁾ またそれとは別に、前方後円墳が成立してから以降の土器を布留式と認定する意見もある。⁽⁸⁾ 前者については、土器のセット関係及び地域的な差異の点で問題が残る。後者については、土器の型式学的な概念とは視点を別にしており、ストレートに受け入れることが難しいと思われる。この問題については、今後継続的な検討を必要とするものであろう。ここでは、小形丸底壺、小形器台、杯の小形精製土器三種の成立をもって布留式と規定したい。⁽⁹⁾

(7) Ⅷ期

C S D324 (C 359, C 361, C 363) と C S E302の資料を提示した。C S E302から検出された土器は、極めて共伴性の強い一括資料である。しかし C S D324の方は、Ⅷ期同様時間幅をもって営まれた溝の資料であり、細分が困難であった。ここでは船橋O-I式に相当する時期としてまとめた。この時期は古墳時代中期に属するが、布留式の変遷を語る関係から設定している。

4 まとめ

各時期と既存様式との関係は以下のようになると考えられる。

I期	北鳥池下層式 ⁽¹⁰⁾	畿内第V様式
Ⅱ期前半	上田町第I層式 ⁽¹¹⁾	
Ⅱ期後半		
Ⅲ期	上田町第II層式 ⁽¹²⁾	庄内式
Ⅳ期		
Ⅴ期		
Ⅵ期	小若江北式 ⁽¹³⁾	布留式
Ⅶ期	船橋O-I式 ⁽¹⁴⁾	

各遺跡ごとの一括資料を中心とした資料操作を積み重ねることによって、土器の時期ごとの変遷と各遺跡での様相が明らかになるであろう。それと同時に地域間交流の実体を解明することが重要である。本遺跡のC地区を中心とした分類と時期区分は、そのための第一歩であり今後とも継続的な研究を必要としている。土器から見た中河内の地域性を解明することが、我々に課せられた仕事でもある。本節の執筆にあたっては、小野久隆、岡本敏行、野藤和也の諸氏より御教示を受けた。記して感謝したい。

註(1) 小形丸底壺、小形器台、杯を指す。

(2) 広瀬和雄「小島東遺跡」「岬町遺跡群発掘調査概要」大阪府教育委員会 1978年。

(3) 田中 琢「布留式以前」「考古学研究第12巻第2号」考古学研究会 1965年。

(4) 美園遺跡周辺部の遺跡においても、この時期頃に中国地方や東海地方の影響を受けた土器が多く確

認されている。例えば八尾市中田遺跡（米田敏幸氏の御教示による。）や久宝寺遺跡（一ノ瀬和夫氏の御教示による。）である。また本遺跡の場合は、手焙形土器に近江地域の影響が強く現われていた（本書第V章第7節参照）。

- (5) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究第20巻第4号』考古学研究会 1974年。
- (6) 中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要第27号』 1976年。
- (7) 小山田宏一「布留式成立に関する覚書」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1982年。
- (8) 註(5)文献参照。
- (9) 小若江北式から布留式として認定したい。註(5)文献参照。
- (10) 久貝健他「北鳥池遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高校地歴部 1970年。
- (11) 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立岬上高等学校研究紀要復刊第三号』 1968年。
- (12) 註(11)文献参照。
- (13) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県高島遺跡調査委員会 1956年。
- (14) 原口正三・田辺昭三『河内船橋出土遺物の研究(2)』大阪府教育委員会 1962年。

第6節 美園遺跡出土のS字状浮文土器について

関西大学 萬 谷 幸 美

1 はじめに

美園遺跡では、口縁部にS字状の浮文を有する土器が計4点出土している。同様の浮文を有する土器例としては、岡崎遺跡採集資料⁽¹⁾、国府遺跡出土資料⁽²⁾、越水山遺跡採集資料⁽³⁾、邱東遺跡採集資料⁽⁴⁾、長越遺跡D17区黒褐色層⁽⁵⁾、東奈良遺跡小川水路採集資料⁽⁶⁾、安満遺跡9地区土壙3⁽⁷⁾、竹松遺跡採集資料などが挙げられる。各資料とも1遺跡につき1例のみであり、しかも長越遺跡、安満遺跡例を除いては、採集資料がほとんどである。美園遺跡では、4点の出土資料が各々遺構との関連を把握できるため、他遺跡に比べてS字状浮文土器の性格を考える上で有効な資料となる。

ここでは、4点の遺跡について順次記載した後、S字状の意匠について若干検討してみたい。

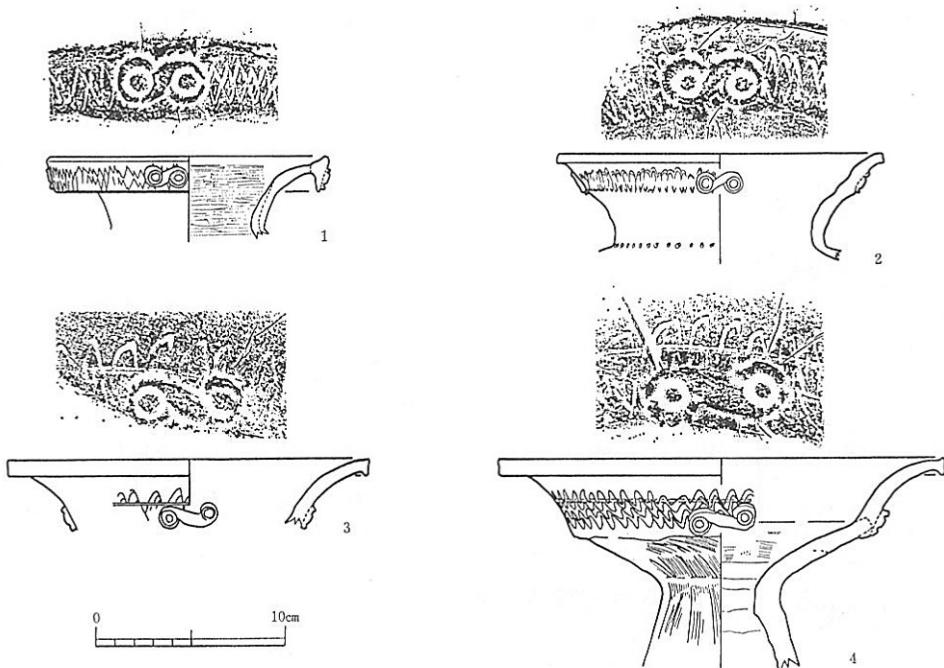
2 美園遺跡出土資料について

第437図1は、Dトレンチ東矢板土層観察アゼ庄内包含層下部より出土した。土層観察アゼ出土のため遺構は明らかにし得ないが、当該期の集落の南限を示すと思われる溝(DSD323)付近であるため、これに伴う可能性を有する。溝(DSD323)からは、甕形土器(以下「形土器」は略)、手焙りが出土している。資料は広口壺であり、口縁端部に粘土を貼りつけて垂下させ、端面に装飾を施している。範状施文具を用いて鋸歯文状の波状文を二条巡らせ、その上にS字状浮文を4箇所貼付する。その具体的方法としては、円形浮文を2つ3mm程度の間隔をもって貼付し、その間を粘土紐でつなぎナデつけてS字状にし、その上に2箇所竹管を押捺したことが伺える。ここで注意を要するのは、円形浮文と粘土紐の接合部のうち、狭角をなす点、すなわち「S」字の最初と最後の点は、施文具で刻むなどして明確にされていることである。これは他の3点についても看取でき、これらの浮文をS字状浮文たらしめていると言えよう。胎土は石英粒を多く含み淡橙色を呈するため、在地産のものとは若干異なるようである。なお、この胎土は他の3点にも共通するものであり、4点は同じ所で製作された可能性をもつ。

時期は、口縁部の形状、伴出遺物から、畿内第Ⅴ様式後半に位置付けられる。

2は、3DトレンチDSD316際の土器群から検出された資料である。伴出遺物としては、器台、口縁に鋸歯文と竹管円形浮文を有する二重口縁壺が挙げられる。資料は、口縁部が緩やかな稜をなしてたちあがる二重口縁壺で、口縁部には鋸歯文状の波状文を二条巡らし、S字状浮文を貼付する。残存部から、浮文は全周で6ヶ所貼付されていたと推定できる。頸部～肩部接合部には刺突文が施されている。

時期は、二重口縁の形状、伴出遺物、出土遺構から畿内第Ⅴ様式後半に比定される。



第437図 S字状浮文をもつ土器（※拓本は縮尺1/2）

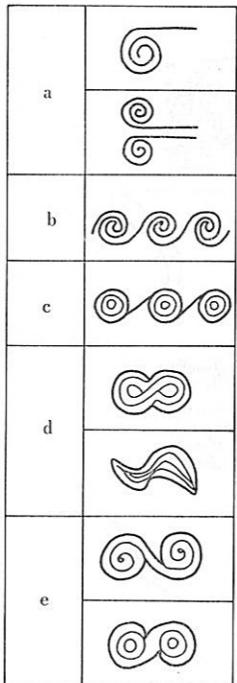
3は、3DトレンチDSK307付近出土である。先述したDS D316の北方1m付近において、鉢、器台とともに出土した。残存部の観察からは、器種が、器台か二重口縁壺かは判定し難い。この資料もまた、鋸歯文状の波状文が施され、その上に篦描きの直線文が1条巡っている。S字状浮文は1箇所残存しているが、残存部僅少のため全周で何箇所貼付されていたかは不明である。

伴出遺物から、畿内第V様式後半から庄内式期初頭にかけての時期に比定される。

4は、3DトレンチDS D316内の土器群から出土した。同遺構からは、甕、器台が出土している。脚部は中空であり、受部は脚部より連続成形されている。この様な、受部が二重口縁の形状を示す器台の類例としては、府中遺跡、馬場川遺跡例などが散見され、北鳥池下層式から庄内式併行期に多く流布したようである。1条の篦描き直線文の上に鋸歯文状の波状文を2条施しているが、施文具の当たりによって4条になる箇所も見受けられる。S字状波文は1箇所残存しており、全周では4箇所貼付されていたと推定できる。

時期は、伴出遺物より畿内第V様式終末と考えられる。

2、3、4は、3D内及びその付近から集中して出土している。また、DS D316以南では、土器の出土が稀薄になることから、DS D316が集落の境界をなした可能性があり、ここでは他に鋸歯文の上に竹管円形浮文を施した壺口縁部や手焙りも出土していることを勘案するならば、この付近は集落において特殊な機能を果たし得た場ではないかと考える。



第438図 S字状浮文模式図
S字といふ特殊な意匠は、その施文方法などによりS字状文や連続渦文など様々な文様に見られるが、概ね5類に大別できる。以下各類について説明を加えたい（第438図）。

a類 漏文の先端がまっすぐに伸びる藤手文である。全て型押文であり、単体で施文するものと複数で施文するものの2種類がある。池上遺跡例では流水文の上に押捺しているが、他の3遺跡例は重複して押捺しており面的な広がりをもつ。

b類 連続漏文と称される文様で、範描きのものと型押しのものの2種類がある。口縁部などの外周を巡り施文される。

c類 連続漏文に類似する文様で、竹管を押捺し範描き直線で連結したもの、同心円文を押捺し連結したもの、竹管円形浮文を連結したものなど様々な施文方法をとる。いずれも口縁部などの外周を巡り連続施文される。

d類 S字状漏文であり、類似する文様として鳥形文が挙げられる。文様は連結されず単体で施文され、全て型押文である。口縁部や肩部の外周を巡る。

e類 S字状浮文である。粘土紐をS字状漏文状に貼付するものと、美園遺跡例のように、竹管円形浮文を粘土紐で連結したものの2種類がある。いずれも単体の文様で口縁部外周に数個貼付されるが、波状文の上に施される例が多い。

a～e類には第30表に掲げた諸遺跡の例が該当する。⁽¹³⁾

弥生時代中期後半、各類の分布を概観すると（第439図）、a類は畿内及びその周辺に顕著であり、b類は播磨・吉備に、c類は吉備に集中する傾向を示す。唐古遺跡では、a類・c類ともに存在するが、c類の施文方法は吉備の各例に比して稚拙であり、次期の文様とは異なるため、c



第439図 各時期における分布

類の出自はやはり吉備に求められよう。⁽¹⁴⁾

弥生時代後期前半に入ると、各類とも畿内及びその周辺部に集中する。a類・c類・d類が存在するが、その中でc類が多くを占め、当時期のS字状文様はc類が主流であったと言えよう。

弥生時代後期後半、c類にかわりe類が畿内及びその周辺部において顕著となる。b類・d類は、美作・⁽¹⁵⁾伯耆・隱岐に認められる。

古墳時代前期前半に入ると、d類が越前・加賀に分布し、e類は播磨・畿内・加賀の各地に認められる。

以上のような分布と時期を勘案し、各類について概観するならば、次のことが言えよう。

a類は、弥生時代中期後半、畿内にその出自が求められるが、弥生時代後期前半以後は各地に認められず、比較的短期間に畿内及びその周辺部においてのみ用いられた文様であると言えよう。一方、b類・c類はその出自を、弥生時代中期後半の吉備及び播磨に求められる。b類は当地方においてのみ流布したと推察されるが、c類は弥生時代後期前半に入ると畿内において流行し後半まで用いられたことより、当該期吉備に出自を求められるものが畿内にもたらされ受容される具体的現象の一例と言えよう。d類は弥生時代後期前半、摂津に認められるが、後期後半から古墳時代前期前半にかけては、伯耆から越前・加賀といった日本海側に多く流布し、この時期の当地方間の交流が示唆される。e類は弥生時代後期後半、畿内において出現し流布した文様であり、古墳時代前期前半に入ると播磨や加賀にも散見される。当時期の畿内から各地へ向かう広範囲の流通を示す一例となろう。

S字の意匠において、その出現、消長からa類→b類→c類→d類→e類という系譜を想定することは、やや困難な感が存するが、少なくともこうした同類の意匠が弥生時代中期後半から古墳時代前期前半にかけて、吉備から畿内地方で主に用いられ、漸次東へ波及

していった事象は肯定できよう。

4 おわりに

美園遺跡出土のS字状浮文土器は、以上のような一連のS字装飾をもつ土器の中で、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の畿内における「祭紋」土器の典型的な例であることが明示できた。弥生土器や古式土師器に見られる所謂特殊土器のなかで、弥生時代中期後半から古墳時代前期前半にかけては、S字意匠をもつ土器は「ハレ」の土器としての役割の一部を担ったものと考えられる。

第30表 S字状意匠を有する土器一覧表

No.	遺跡名	所 在 地	出 土 遺 構	器 種	施文部位	施文方法	類
1	唐 古	奈良県磯城郡田原本町	不 明	不 明	型 押	a	
2	"	"	82号地点堅穴	壺 肩 部	"	"	
3	池 上	大阪府和泉市		"	"	"	
4	奈カリ与	兵庫県三田市	北 斜 面	甕 肩 部	"	"	
5	仲 田	兵庫県朝来郡山東町	採 集	不 明 不 明	"	"	
6	亀井・城山	大阪府八尾市	S D 3008	壺 体 部	"	"	
7	百 間 川	岡山県岡山市	右岸用水路調査区溝 20	" 口縁部	籠 描 き	b	
8	西 田 原	兵庫県神崎郡福崎町	採 集	" "	型 押	"	
9	下 市 類	岡山県真庭郡落合町	D調査区井戸Ⅱ	傘(?) 体 部	籠 描 き	"	
10	篠 原	兵庫県神戸市	採 集	椀(?) 口縁部	型 押	"	
11	雄 町	岡山県岡山市	第1調査区甕棺	器 台 "	"	c	
12	門 前 池	岡山県赤磐郡山陽町	11号住居址	壺 "	竹管凹形浮文 籠 描 き	"	
13	天 神 原	岡山県津山市	pit 4401	器 台 脚 部	"	"	
14	唐 古	奈良県磯城郡田原本町	北方砂層	不 明 不 明	竹管押捺 籠 描 き	"	
15	会 下 山	兵庫県芦屋市	E住居址	壺 口縁部	竹管凹形浮文 籠 描 き	"	
16	亀井・城山	大阪府八尾市	自然流路N R 3001	壺 口縁部	型 押	"	
17	上 ノ 山	奈良県橿原市	採 集	壺(器台?) "	"	"	
18	上 津 島	大阪府豊中市	不 明	壺 "	竹管凹形浮文 籠 描 き	"	
19	"	"	"	" 肩 部	竹管押捺 籠 描 き	"	
20	下 阪 濑	岡山県真庭郡落合町	"	不 明 不 明	型 押	"	
21	田 能	兵庫県尼崎市	"	手焰り 腹 部	竹管押捺 籠 描 き	"	
22	荒 神 山	兵庫県神戸市	第2地點	壺 口縁部	"	"	
23	篠 原	"	採 集	" "	型 押	d	
24	下 市 濑	岡山県真庭郡落合町	D調査区	不 明 不 明	"	"	
25	囲 山	富山県射水郡小林町	不 明	" "	"	"	

26	中 峯	鳥取県倉吉市	採 集	〃	〃	〃	〃
27	王 山	福井県鯖江市	不 明	〃	〃	〃	〃
28	河 和 田	福井県丹生郡朝日町	〃	〃	〃	〃	〃
29	中 釜 屋	石川県石川郡尾口村	〃	〃	〃	〃	〃
30	松 任	石川県松任市	〃	〃	〃	〃	〃
31	美 園	大阪府八尾市		壺 口縁部	貼 付	e	
32	"	"		〃	〃	〃	〃
33	"	"		壺(器台?)	〃	〃	〃
34	"	"		器 台	〃	〃	〃
35	越 水 山	兵庫県西宮市	採 集	壺	〃	〃	〃
36	国 府	大阪府藤井寺市	不 明	〃	〃	〃	〃
37	岡 崎	京都府京都市	採 集	〃	〃	〃	〃
38	安 滿	大阪府高槻市	9地区土壤3	〃	〃	〃	〃
39	瓜 破 北	大阪府大阪市	井戸 S E 02	〃	肩 部	篋 描 き (〃)	
40	林	京都府竹野郡網野町	黒色土下層	器 台	口縁部	〃	(〃)
41	東 奈 良	大阪府茨木市	採 集	壺	〃	貼 付	〃
42	竹 松	石川県松任市	〃	器 台	〃	〃	〃
43	郵 東	兵庫県姫路市	〃	壺	〃	〃	〃
44	長 越	"	D17区黒褐層	壺(器台?)	〃	〃	〃

- 註(1) 飛野博文「山城の弥生後期の土器」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1983
- (2) 直良信夫「二・三弥生式土器の紋様について」『考古学雑誌』第19卷第4号 1929
- (3) 村川行弘・森岡秀人「弥生時代」『新修芦屋市史 資料編第1巻』 1976
- (4) 松下勝他『兵庫県文化財調査報告書第12冊 播磨長越遺跡』兵庫県教育委員会 1978
- (5) 註(4)文献
- (6) 『東奈良遺跡発掘調査概報I』東奈良遺跡調査会 1979
- (7) 『高槻市文化財調査報告書第10冊 安満遺跡発掘調査報告書—9地区的調査—』高槻市教育委員会 1977
- (8) 四柳嘉章「竹松遺跡出土の土器」「土師式土器集成 本編1 前期」 1971
樋崎彰一編『世界陶磁全集2 日本古代』 1979
- (9) 佐原真・町田章「和歌山市有本銅鐸」「和歌山県文化財学術調査報告書』第三冊 和歌山県教育委員会 1968
- (10) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』第16卷第1号 1969
- (11) 寺沢 薫「大和の高地性集落」『青陵』No.36 権原考古学研究所 1978
『瓜破北遺跡』財団法人大阪市文化財協会 1980

- (12) 名越勉・甲斐忠彦「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』第58巻第4号 1973の文様の分類に基本的に準ずる。
- (13) 表作成には、先に掲げた文献の他以下の文献に依拠した。
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』 1943
- 井藤暁子他『池上遺跡』第2分冊 土器編 大阪文化財センター 1979
- 井守徳男他『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県教育委員会 1983
- 櫃本誠一『日本の古代遺跡一兵庫県北部-2』保育社 1982
- 『亀井・城山』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書 大阪文化財センター 1980
- 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52 百間川当麻遺跡2』岡山県教育委員会 1982
- 増田重信「連続渦文を施文せる弥生式土器片」『古代学研究』第12号 1955
- 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山県教育委員会 1974
- 小林行雄「摂津国神戸市篠原遺跡に就いて」『史前学雑誌』第1巻第4号 1929
- 正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告書』 1972
- 池畠耕一他「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9』 1975
- 橋本惣司他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 1975
- 『会下山遺跡』芦屋市教育委員会 1964
- 藤沢一夫「上津島遺跡出土の連渦文弥生式土器」『豊中市史 史料編1』 1960
- 『吉備考古』第85号 1952
- 『吉備考古』第91号 1956
- 武藤誠『田能遺跡概報』田能遺跡発掘調査委員会 1967
- 浅岡俊夫他『荒神山遺跡調査概報』神戸市教育委員会 1970
- 『小杉町畠山遺跡緊急発掘調査報告書』富山県教育委員会 1970
- 『中峯遺跡発掘調査概報』倉吉市教育委員会 1975
- 『福井県鯖江市王山・長泉寺山古墳群』福井県教育委員会 1966
- 上田三平「若狭及び越前に於ける古代遺跡」『福井県史蹟勝地調査報告第1冊』 1920
- 堤圭三郎他『網野町文化財調査報告第1集 林遺跡発掘調査報告書』網野町教育委員会 1977
- (14) 註(11)寺沢論文
- (15) 隠岐郡西郷町に鳥形文・波形文・渦巻形文が肩部に施される子持ち壺が存在することを知った
勝部 昭「西郷町発見のスタンプ施文土器」『八雲立つ風土記の丘』
- (16) 非日常的な性格を有する土器を意味する。

第7節 美園遺跡出土の手焙形土器について

花園大学 野 藤 和 也

1 はじめに

弥生時代後半から古墳時代前期にかけて、所謂「手焙形土器」と呼ばれている土器が存在する。その分布は現時点に於て、北は群馬県から西は福岡県まで、18府県83遺跡を数える。

この手焙形土器について、先学諸氏により、分布、形態、用途について研究され、性格の一端が明らかに成りつつある。

今回、美園遺跡から16点を数える出土があった。第31表の様に、弥生時代後期末から古墳時代前期前半にかけて、溝、土坑、井戸、或いは包含層（遺構面上を含む）からである。また個々の手焙形土器自体にも、成形技法、形態等に違いが認められる。

小稿では、今だ性格不明の手焙形土器について、成形技法と形態、伴出遺物、出土状態等から検討を加え、性格の一端を考えてみたい。

第31表 美園遺跡出土手焙形土器一覧表

団面番号	形態分類表	分類	出土地区	遺構	時期	備考	団面番号	形態分類表	分類	出土地区	遺構	時期	備考
B993	37	B ₄	B	SE301	前期前半		D134			D (STA102+0)	包含層	後期末～ 前期前半	
C188			C	SK301	後期末					D	SD206	後期末	SD206は上層より 下層は中期
C310	30	B ₃	C	SD319	前期前半		D186	8	A ₂	D、2D (STA101+30)	包含層 サブレンチ	前期後半	405はサブトレ ンチより
D548			D (STA102+30)	包含層	後期末～ 前期前半	開口部に穿孔	D104	25	B ₃	D (STA101+0)	ベース面	後期末	文様有り
D135			D (STA102+10～20)	包含層	前期前半		D134			D (STA102+30～40)	包含層	前期前半	文様有り
			D (STA102+10～20)	包含層	前期前半		D133	26	B ₃	D	庄内Ⅱ	後期末	文様有り
D146	24	B ₃	D (STA102+30)	庄内Ⅱ	後期末	開口部に穿孔	20	20	A ₄	3 D	包含層	前期前半	形態分類図参照
D136	7	A ₂	D (STA101+80)	包含層 (サブレンチ)	前期前半		D267	2	A ₁	6 D	DSD323	後期末	

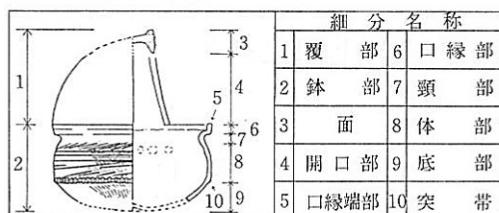
2 美園遺跡出土の手焙形土器について（第445・446図）

本遺跡出土の手焙形土器は先にも触れた様に16点を数えた。一部重複するが、分類の基礎的作業として、成形技法と形態について記述する。なお本文中に於ける部分名称は第440図による。

形態

手焙形土器は、鉢部と覆部との接合状態から、A・B類に分類が成される。A類は口縁部が覆部との接合に際しても、残存しているものである。B類は口縁部が覆部との接合により、一体と成るものである。さらに、技法と形態から1～5類に細分される。

1類は覆部との接合部に補強粘土を貼付け、幅、長さを持つ突帯状に施す。



第440図 手焙形土器名称図

4類は覆部と鉢部との接合部に貼付突帶を施すものである。

5類は本来、外反する口縁を呈し、平底及び突帶が見られるものである。

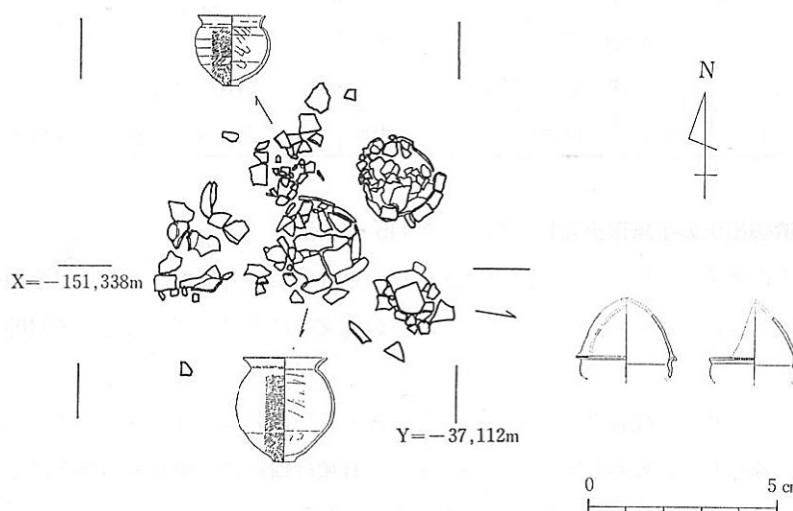
6類は体部の突帶は明瞭ではなく、底部も丸味を持つものである。

以上の特徴を持つ手焙形土器の成形技法について述べる。なお、ローマ数字は後述するが段階（I…弥生時代後期後半。II…弥生時代後期末～古墳時代初頭。III…古墳時代前期前半）を表す。

II A₁に属する2はD S D 323が堆積した段階で、甕（D268～D270）とともに出土している（第441図）。復原口径19.2cm、現存高13.0cmを測る。体部は短く丸味を持ち、覆部の高さのある手焙形土器である。覆部は幅約3cmの粘土紐を積み上げた痕跡が観察される。また、覆部と口縁部との接合部のみに丁寧な刻目が認められる。これは接合の強化と装飾性を加味したものと推察される。その他、内外面は撫で調整が施される。

III A₂に属する7・8は包含層からの出土である。この2点は形態、胎土、調整、法量等が似かよっているが、体部下半の突帶の形状、或いは覆部との接合による口縁部形態等が違っている。

7は開口部が遺存しており、口縁部との接合時に余分な粘土を端部に貼付けている。体部下半



第441図 6 D レンチ D S D 323手焙形土器出土状態図

には突帶が貼付けられているが、刻目は無い。また、調整は鉢部外面が撫で調整であり、覆部外面では縦の刷毛目が見られる。特に内面の接合部には、粗い刷毛目が見られる。この7・8はサブトレンチから取り上げられたが、これはDSE301を掘削している。この遺構より出土している二重口縁装飾壺と同形態、同胎土の壺（D109）が、サブトレンチより手焙形土器とともに取り上げられている等、これらはDSE301に伴う遺物と推察される。この他、DSE301からは、甕、鉢が出土している。

II A₄に属する20は生駒西麓の胎土を持つものであり、覆部との接合部に突帶を持つ。包含層からの出土である。

II B₃に属する3点のうち、2点の開口部には、形成された面を持ち、覆部、鉢体部に文様が施されているが、細分では技法、形態、施文が相違している。特に面の形成、施文と調整等について比較し、特徴を見る。

まず面の形成では、25が粘土紐を開口部端部両側に貼付けて面を作る。また面には最初の開口部端部を用いて、一条突帶としている。26では25と同様に粘土紐を貼付けるが、さらに下部は指圧で引き延ばして面を作る。面には二条の貼付け突帶を施す。また開口部頂部に幅広い面を持つ。

文様は面、覆部、鉢体部に施文されている。面では25が突帶両側に二条ずつの波状文。26では二条突帶の中央部下部に竹管浮文を施す。浮文の構成は2個1対と1個を1組として、対称的に施す。その結果、面上部には5個の浮文が、ほぼ等間隔に並ぶと考える。

覆部では25が波状文、格子文、直線文、斜線文、列点文、棒状浮文の各種文様が施されるのに對して、26では綾杉文、直線文が施されるのみである。25と26の施文構成について詳細する。

25の構成は①沈線の区画線を引く。② 右上りから左下りの格子文と斜線文を施す。③ 棒状浮文を貼付ける。横方向の棒状浮文は、中央に太い沈線を引き、二条の浮文とする。④ 列点文を棒状浮文、開口部側面下部、口縁受け部下部に施す。⑤ 波状文を施す。

26の構成は25より鋭いヘラ状工具によって、① 右廻りの直線文の区画線を引く。② 綾杉文が右廻りに下から上に動かす。また反対側からは左廻りに動かし、中央部よりで重複させる。

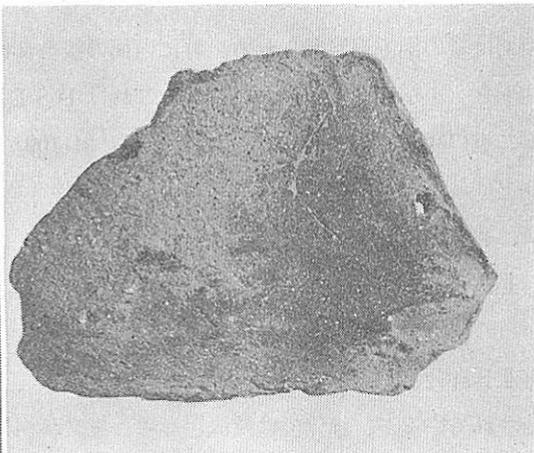
鉢部に於ては25が三条の直線文と頸部に斜線文。26では三条の直線文の両側に斜線文を施す。また体部下半には突帶が貼付けられているが、25は丸味を持ち、26では扁平な形態を呈している。さらに突帶には25が列点文、26には笠状工具による幅の有る規則的な刻目が施される。

次に調整では、25の覆部外面が粗い刷毛目、内面は笠撫で後に撫で調整が施される。鉢体部外面は右下りの粗い刷毛目、突帶部は接合を補強させる左下りの刷毛目、底部は左廻りの3条/cmの叩き目を施す。26は口縁部横撫で、体部斜方向の刷毛目。底部は粗い刷毛目で右下りに施す。

これらの胎土は、25が石英、長石粒が微量認められる精良な胎土である。淡褐色を呈する。これに対して、26は石英、長石粒が明瞭であり、灰白色を呈し、形態、施文構成、胎土から滋賀県南部地域の手焙形土器と考えられる。⁽⁶⁾ また3に於ては、地域を明確にはしがたいが、施文や形態



第442図 D地区包含層手焙形土器出土状態図



第443図 穿孔された手焙形土器 (D548)

等から26よりさほど遠くない地域と考える。

出土状況に於て、25はD S D313付近からの出土であるが、伴出遺物は明確ではない。26は遺構面上より（第442図）、鉢D140、手焙形土器Ⅱ B₃-24と伴出している。

Ⅱ B₃-24は美園遺跡出土の中で、覆部の成形技法が唯一理解される、手焙形土器である。覆部はドーム状に粘土紐が積み上げられている。粘土紐は6段、幅約3cmを測る。開口部は横撫でにより、端部上部を肥厚させている。内外面とも撫で調整を施す。また開口部に焼成前の径4mmの穿孔を施す。この他にも同様の穿孔が施された手焙形土器（D548、第443図）が出土している。胎土は長石、石英粒が多く混入しており、内外面とも撫で調整を施す。

Ⅲ B₆に属する37は、復原口径16.3cm、現存高15.2cmを測り、丸味を呈する底部に、平坦な底を呈する。内面には指圧痕が顕著である。外面には3条/cmの左下りの叩き目が施され、Ⅱ B₃-25と同様に底部成形に用いられている。また、体部中央部には接合痕が認められる。体部と底部の境いには、稜線程度の突帯が施される。胎土は軟質の灰白色を呈する。この手焙形土器はB S E301より、二重口縁装飾壺（B992）と伴出している。

Ⅲ B₅に属する30は、C S D319より、甕（C301）と伴出している。生駒西麓の胎土を持つ手焙形土器である。復原口径22.2cm、現存高11.0cmを測り、小形の分類に属する。外面には笠磨き、内面は笠撫で調整が施される。体部下半には刻目突帯が貼付けられる。

また、分類はできなかったD134は、開口部の破片で、粗い刷毛目により端部上部を肥厚させ、面を形成する。この面には列点文が施され、生駒西麓に近い胎土を持つ。

C188は体部から底部にかけての破片で、在地的な胎土を持ち、三角状突帯を貼付ける。

以上A・B類に分類される美園遺跡の手焙形土器について、成形技法を中心として記述をおこなった。

次にこれらが帰属する時期は、伴出遺物及び出土状況から、Ⅱ A₁-2と伴出した甕（D268）

が弥生時代後期末の特徴を持つ。Ⅲ A₂—7・8は装飾壺（D112）、甕（D114）、鉢（D111）から古墳時代前期前半に。Ⅱ B—24・25・26は鉢（D140）から24・26がⅡ A₁—2とはほぼ同一時期と考える。25に於ては、伴出遺物が無く、時期の帰属が明確ではないが、24・26と同一層中であることから、ほぼ同一時期と考える。Ⅱ A₄—20は包含層中からの為、時期の帰属は明確ではないが、遺構出土遺物から、弥生時代後期末をさかのばらないと考える。Ⅲ B₆—37は伴出した装飾壺（B992）から、古墳時代前期前半に。Ⅲ B₅—30は甕（C301）から古墳時代前期前半。また、C188は伴出遺物から美園遺跡出土の手焙形土器に於ては、古い時期に属する。

A・B類に分類が成された手焙形土器は、いかなる用途に使用されていたのかを考える為に、出土状態から推察してみよう。

出土状態

美園遺跡出土の手焙形土器は各地区から出土している。しかし、先に分類をおこなった段階ごとの分布を見るならば、地区ごとに集中する傾向にある。その変遷はC地区→D地区→B・D地区の流れが理解される。このことは美園遺跡の集落変遷（付図35）と同様の傾向を示す。さらに、B・D地区に於ては、D地区南半から北へ移行し、トレンチ北端のD S E 301で出土する段階で、B地区に於て出土する。

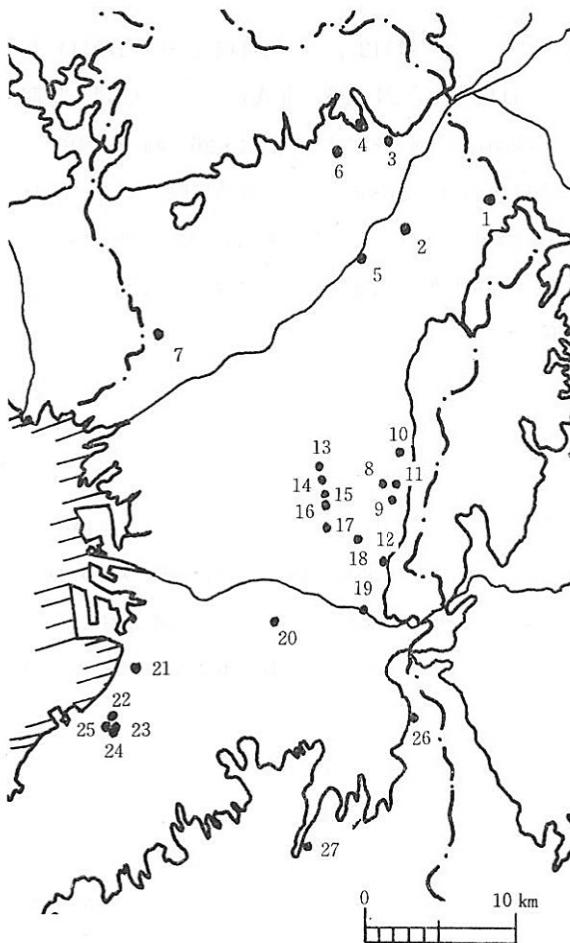
⁽⁷⁾ 出土遺構は集落の端に位置する溝、土坑、井戸からである。手焙形土器はこれら集落の端に位置する遺構から出土するが、単独で出土することはなく、C S K 301等に見られる様に、複数の土器とセットと成っている。また、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭ほど器種、点数が多く、古墳時代前期前半に移るほど減少していく傾向にある。さらにセット中の壺は常に装飾が施されたものばかりである。また、他の器種とのセット以外にも2個体の手焙形土器と他器種とを組み合せて出土している。この様な例は蔵持黒田遺跡に於て報告されている。⁽⁸⁾ その他、開口部に穿孔が施された例や、開口部に形成された面を持つもの、さらに内面に焼の付着等、手焙形土器にも多様な姿を持っている。特に弥生時代後期末にこの複雑化がみられるが、その多くは他地域産の胎土を持つものである。

美園遺跡に於ける手焙形土器を用いた祭祀行為は、閉鎖的な性格を持つものではなく、他地域からの刺激を受けながら、集落の端に於て水を対象とする祭祀がおこなわれていたと考える。しかしながら水を対象として、如何なる事を祈念したかは今後の課題とするものである。

美園遺跡の手焙形土器は集落内での祭祀行為に用いられたが、周辺遺跡では如何なる状態を示すかを段階ごとの変遷から述べてみよう。

3 周辺地域の変遷

周辺遺跡の手焙形土器の形態は美園遺跡出土のものと同じ形態分類が可能である。また、時期に於ては東山遺跡から上限が弥生時代後期後半に、美園、成法寺遺跡から古墳時代前期前半が下限である。



1 藤坂	10 上六万寺	19 船橋
2 霧塚山	11 鬼塚	20 上田町
3 安満	12 思智	21 四ツ池
4 紅葉山	13 瓜生堂	22 池上
5 柱本	14 若江北	23 古池北
6 郡家川西	15 美園	24 豊中・古池
7 庄内	16 久宝寺南	25 七ノ坪
8 北鳥池	17 亀井	26 東山
9 馬場川	18 成法寺	27 大師山

(番号は集成表番号と対応)

第444図 手焙形土器出土遺跡分布図

れた鉢は、この地域ではこの時期にみられない形態であり、その系譜は他地域に求めなければならぬ。⁽¹⁰⁾

以上、この段階の手焙形土器は、溝（東山・恩智）、土坑（東山・成法寺）、包含層からの出土であり、東山遺跡の溝に於ては集落を囲む、環濠的な用途を持つものである。また、土坑にみるセット関係は東山遺跡が壺、甕、高杯、器台である。これに対して成法寺遺跡では、高杯、甕のみである。さらに大師山遺跡は包含層中からの出土と、同じ高地に立地する東山遺跡とは、違ったあり方を示している。しかし、これらに共通しているのは、集落の周辺部に出土する傾向にあることである。

第Ⅰ段階（出現期）

この段階は弥生時代後期後半の時期にあたり、この段階に属るのはA₃・A₄・B₃類である。また、この中でA₃-9の東山遺跡は伴出遺物から第1段階でも古い様相を持つ。さらにA₃類は口縁部の形態からA₃（9・10・12・13・14）とA_{3'}（15・16）とに細分が可能である。また、15の覆部には少なくとも4穴以上の焼成前の穿孔がおこなわれている。この様な例は藤原宮⁽⁹⁾西辺地区で報告されており、注意を引くものである。

A₄-17の上六万寺遺跡例は体部の高さが短く、覆部の傾斜も手焙形土器中最も急である。なお、A₃-11の手焙形土器は体部上部に刻目突帯と粘土の貼付けをしているが、口縁部が欠損している為、帰属分類を明確にはできないが、亀井遺跡に於て、頸部に突帯を貼付けた受口状口縁を呈する手焙形土器（14）が出土している。形態的に似かよっており、11はA₃類に属すると考える。

第Ⅰ段階に於ける手焙形土器の鉢部形態は、大旨丸味のある扁平な体部を呈するのが大半を占めるなど、手焙形土器に使用さ

この段階に美園遺跡の手焙形土器が出現するとともに、形態もバラエティーにとむ。しかし、技法的には前段階の影響下にある。その他、A₃がB₃への移行が認められる。形態に於ては、A₂—6の恩智遺跡の球形化した体部を持つ鉢や、B₅—28の突り気味の底部等がある。さらに、B₅—28よりも尖り気味の底部を持つものが、亀井遺跡でも出土している。また、B₆の貼付突帯を施さない例もあり、これらの多くは伴出遺物から、古墳時代前期初頭に出現する傾向にある。

この様な中でB₃—25・26は異彩を放つものである。この手焙形土器の分布は近畿地域のみならず、ほぼ全国的に分布する傾向にあるとともに、その地域内での手焙形土器では、古い時期に属するものである等、その動向に注目される。

第Ⅱ段階に於ける出土状態は前段階が集落周辺部からの出土であったが、この段階に於ては、(20)紅革山遺跡にみられる墳墓祭祀としての性格が表われる様である。しかしながら、引き続いて集落内での使用もおこなわれる。さらに住居址内での出土例（鷹塚山、郡家川西、紅革山）が報告されている。これらは地域的には淀川水系に分布する傾向にある。

その他、同形態の手焙形土器が遺跡（美園遺跡と北鳥池、瓜生堂と亀井）を越えてみうけられる他、遺跡内に於ても美園遺跡のごとく他地域の手焙形土器が出土しており、この段階に手焙形土器が盛行している。

第Ⅲ段階（消滅期）

この段階は遺跡数の急激な減少がみられるが、他府県に於ては今だ盛行しており、この差が單に搬入等による時期的な差であるのか、或いは他の理由によるものかは、現時点では不明である。その他にA₄—21の瓜生堂遺跡例に施文がおこなわれており、この施文構成は美園遺跡や眼部遺跡にも同様の例がみられること、または美園遺跡のように装飾壺とのセット関係に重きを置いていることが推察される他、墳墓祭祀にも引き続いて用いられる。このことは、他地域でもみられ、遺跡では弘法山古墳、天王山4号墳、キトラ、三度舞大将塚古墳、朝日等である。しかしながら朝日遺跡のごとく、その最初の段階に供獻されている例もみられ、地域によって、あり方が違っている。

大阪に於けるこの段階の手焙形土器は、集落内と集落外とに用いられているが、装飾壺の多用とともに、手焙形土器の使用が減少して行く傾向にある。

結び

美園遺跡から出発して、さらに周辺遺跡の手焙形土器について、概観を述べて来た。その結果美園遺跡は手焙形土器の盛行期に出現し、消滅期まで存在し続けた。また、大阪府下では、東山遺跡例から弥生時代後期後半にその上限が求められ、美園遺跡は下限に位置付けられた。

その他、手焙形土器の鉢は突帯が施されたものであることから、その系譜は大阪以外の地域に求められるものであり、この系譜を明らかにするには、滋賀県地域の動向が注目されるが、詳細については、今後の課題とするものである。

今、大阪府下の手焙形土器について振り返るならば、集落内での祭祀から墳墓祭祀へと、手焙形土器の祭祀形態が変化していく傾向にある。また集落では水に関する祭祀行為がおこなわれていたものと推察する。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾ 煤付着や朱が塗られた例等は、その際の祭祀行為の痕跡を示していると考えられるが、小稿ではその復原までには至らなかった。

この復原に於て、出土状態から単に廃棄行為として性格付けるか、或いはたとえ破片であっても、祭祀行為が成された最終的な段階での廃棄行為を示しているかは、明確には決定しがたいが、土器片の移動や土層堆積状況、その他、より精密な調査を蓄積することにより、出土遺物の性格が判明して行くものと考える。さらに、美園遺跡の手焙形土器のように、他地域からの搬入品と考えられるものが比較的出土していることから、成形技法、形態分類、胎土分析等をおこなうことにより、地域間での手焙形土器の動きを追求して行かねばならない。

以上、手焙形土器について類推を重ねた概略的なものと成ってしまった、御寛容賜りたい。また、小稿が手焙形土器研究に役立てれば幸いであるとともに、今後は他地域での研究、或いは他の祭祀形態との関係を通じて、畿内社会の姿を明らかにしていくものである。

小稿を草するにあたり、下記の方々には貴重な御示唆を頂き、その御好意に厚く感謝するものであります。

渡辺昌宏、小野久隆、岡本敏行、兼廉保明、大橋信弥、樋口吉文、森村建一、齋藤隆、都築みどり、野口泰子、安達厚三、田中一広、喜多貞裕、南山大学人類学館の方々

(順位不同、敬称略)

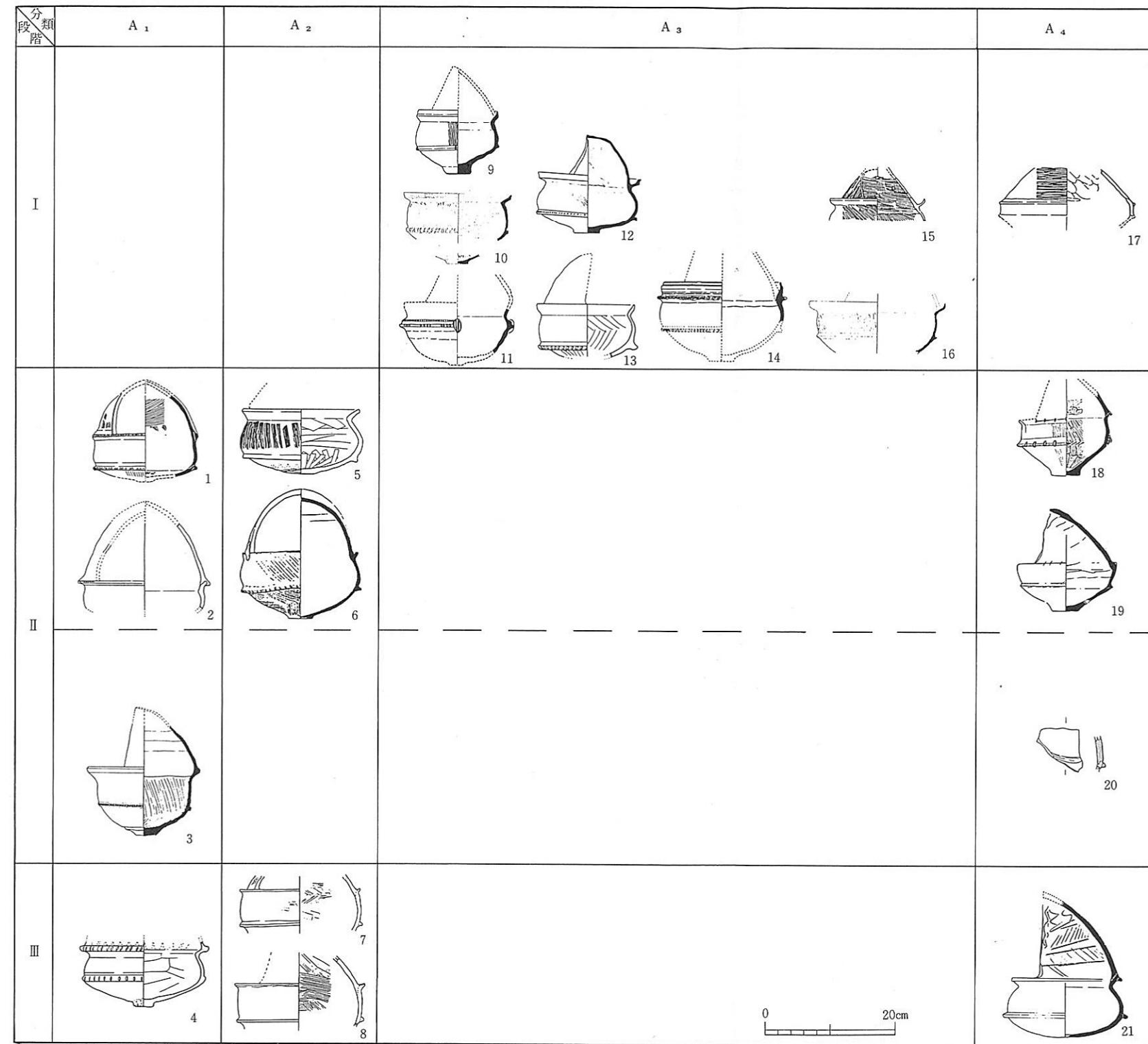
- 註(1) 後世の手焙りに似ていることから、その名称が付いたのであるが、用途、性格とも不明である。まれに煤付着や朱が塗布された例が報告されている。
- (2) 工業善通 1968 「北関東地方」1 『弥生式土器集成』本編2 日本考古学協会 朝倉町教育委員会 1968 『須川遺跡群』
- (3) 江谷寛氏によって、最初の論者がおこなわれた。以降は各遺跡内に於ける様相、或いは資料紹介等の考察である。
- (4) 江谷氏は分布面に於て、大和川水系沿に手焙形土器が出現し、各地域へと波及する。また、鷹塚山遺跡例等から、単独で用いられるのではなく、他の器種とセットとなって用いられたと述べている。近年蔵持黒田遺跡では形態変遷とともに、テラス状遺構出土例から、2個1組で用いられていたと報告されている。
- (5) 小稿の形態分類は蔵持黒田遺跡に拠る所が大きい。
- (6) 他地域産の手焙形土器中、Ⅱ B 3-26 は滋賀県南部地域の手焙形土器に、形態、胎土、調整、施文が似かよっていると、兼廉保明並びに大橋信弥両氏の教示を得た。
- (7) 集落の端は明確には決め難い、まして一時期に於ける集落の端はなお決め難い。この判断は各地区の遺構状態から推察したものである。しかし、美園遺跡の調査は南北の状態は比較的遺構状況が理解されやすいが、東西の状況は推察するのみである。
- (8) 集落の端で水を対象とした例には、長頸壺が認められる。藤田三郎 1982 「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズI。

- (9) 受口状口縁を呈する手焙形土器であり、覆部に七孔の穿孔（径4mm）が施されている。
- (10) 手焙形土器の系譜は、鉢に見られる特異な形態から、水口昌也氏（文56）は上箕田遺跡の鉢B（上箕田IV式）や、安満遺跡の鉢D（方形周溝墓A5-2）に見られる、「受口状口縁をもつ体部の張り出した鉢に求めることができ」と述べられている。また、寺沢薰氏（文67）は体部に突帯を持つ鉢F中の受口状口縁を持つものが、「近江・南山城・北摂の影響下に生まれた鉢」と考えられ、さらに手焙形土器の系譜関係に注目されている。
- 真田幸成他 1970 『上箕田弥生式遺跡第二次調査報告』鈴鹿市教育委員会。
- 森田克行・橋本久和 1977 『安満遺跡発掘調査報告書—第9地区—』高槻市教育委員会。
- (11) 第32表の様に畿外地域では古墳時代前期前半の時期に集中している。
- (12) 手焙形土器は9点出土しており、弥生時代後期後半では北環濠と方形周溝墓から出土している。次の時期には南環濠と集落内より出土している。
- (13) 環濠からの出土例から、集落の端での溝が日常空間と非日常空間との境界を意味し、その場所に於て、水或いはその他、対称とする祭祀行為がおこなわれていたことも考えられる。
- (14) 焼成時による変化との区別や、洗浄時の剥離或いは鉄分の付着と、肉眼による煤の確認は困難をきわめる。また本来煤が付かない短い時間での使用や、煤の付着しにくいものを使用したこととも考えられ、上六万寺遺跡や藤原宮遺跡出土の手焙形土器に注目される。

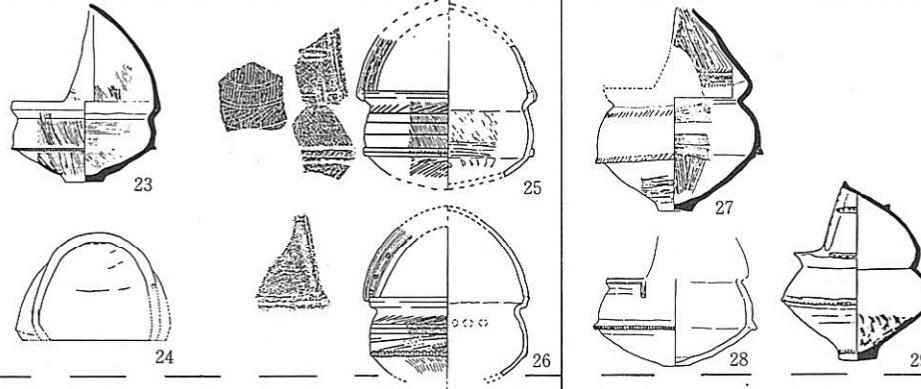
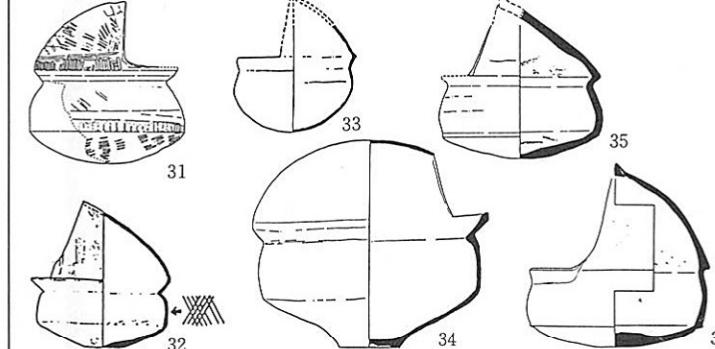
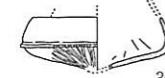
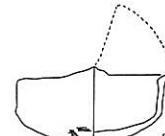
県	No.	遺跡名	所 在 地	出土遺構	時 期	備 考	県	No.	遺跡名	所 在 地	出土遺構	時 期	備 考
大 阪	1	藤坂	枚方市藤坂	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期末~ 後期 未 後期 未	住居址内 のピットから高杯と對 を含んで出土。 多数の住居址より出土。	愛 知	43	穴山	宝飯郡小坂井町	包含層	後 期	文様有。
	2	鷺塚山	枚方市高塚町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期前半	シグラジ	44	シグラジ	西尾市知多町	包含層	未	文様有。	
	3	安瀬	高槻市高瀬町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	閑島	45	閑島	西尾市岡島町	包含層	未	文様有。	
	4	紅井山	高槻市紅井町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	堀田	46	堀田	津島市堀田町	包含層	未	高杯、器台、甕と伴出。文様有。	
	5	柱本	高槻市柱本	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	保美貝塚	47	保美貝塚	長浜市十里町	溝	後 期	文様有。	
	6	郡家川西	高槻市庄内幸町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	高田	48	高田	長浜市高田町	旧河原跡	後 期	文様有。	
	7	庄内	東大阪市若草町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	五之里	49	五之里	野洲町	包含層	後 期	文様有。	
	8	北鳥池	東大阪市横福寺町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	下巣子	50	下巣子	守山市服部町	溝	後 期	文様有。	
	9	馬場川	東大阪市横小路	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	服部	52	服部	守山市横江・大門町	落込込み	後 期	文様有。	
	10	上六万寺	東大阪市上六万寺町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	大門	53	横江、大門	守山市横江・大門町	包含層	後 期	文様有。	
	11	鬼塚	八尾市恩智	溝、包含層 溝、包含層 溝、包含層	後期後半~ 後期	滋賀里	54	滋賀里	大津市見世	包含層	後 期	文様有。	
	12	恩智	東大阪市瓜生堂	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	納所	55	納所	津市納所町	包含層	前半	文様有。	
	13	瓜生堂	東大阪市若江西新町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	施所黒田	56	施所黒田	各張市施持町	包含層	後半~ 後期後半	文様有。	
	14	若江北	八尾市美園町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	三田宮之腰	57	三田宮之腰	上野市	包含層	後期後半	文様有。	
	15	美園	八尾市神武町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	東日野	58	東日野	四日市	包含層	後期後半	文様有。	
	16	久宝寺南	八尾市南尾井町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	ケ広	59	ケ広	京都市山科区	溝、庄居址	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	17	龟井	八尾市光南町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	中臣	60	中臣	京都市集女町	包含層	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	18	戎寺	柏原市古町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	中海道	61	中海道	八幡市	溝	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	19	船轟	柏原市上田町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	天神山	62	天神山	八幡市	包含層	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	20	上田町	堺市浜寺船尾町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	幣原	63	幣原	八幡市	包含層	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	21	四ツ池	和泉市池上町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	布留	64	布留	天理市布留町	包含層	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	22	池上	泉大津市豊中	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	奈	65	大畠	櫻井市大畠	溝	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	23	古池北	泉大津市豊中	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	唐古・鍊	66	唐古・鍊	櫻城郡田原本町	土坑	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	24	豈中・古池	泉大津市北豐中町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	六条山	67	六条山	奈良市六条町	溝	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	25	七ノ坪	泉大津市内都河南町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	櫻原	68	櫻原	櫻原市	包含層	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	26	東山	河内長野市三日市町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	向	69	向	宇陀郡原町	溝	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	27	大仙山	千葉市東山石神	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	キトラ	70	キトラ	櫻井市垂水区	土坑	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	28	巾	高崎市並木町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期後半~ 後期	禪原宮	71	禪原宮	天龍山4号墳	溝	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	29	弘法山	松本市出川	埴塚	後期前半	尼崎市能	72	田能	尼崎市能	墳丘上	後期後半~ 後期後半	文様有。	
	30	大境洞窟	水見市	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期前半	海草郡美里町	73	天王山4号墳	神戸市垂水区	ビット	後 期	文様有。	
	31	杉谷内床ノ山	小矢部市滑山町	塙墓	後期初頭	敷設	74	蛭ノ瀬	敷設	吉備郡高松町	後 期	文様有。	
	32	魚崎	射水郡大門町	住居址 包含層 房塀跡 包含層	後期初頭	津肆寺	75	新津肆	鳥取市秋里	土器群	前半	文様有。	
	33	串田新	豊東郡小山町	表採	後 期	鳥取市秋里	76	津肆寺	鳥取市秋里	埴丘上	前半	文様有。	
	34	須日・王子ヶ池	引佐郡細江町	表採	後 期	倉吉市	77	大浦	鳥取市大浦	住居址	前半	文様有。	
	35	院日	西春日井郡滑水町	表採	後 期	長瀬高浜	78	秋里	鳥取市大塚	土器群	前半	文様有。	
	36	矢崎	名古屋市瑞穂区	表採	後 期	東伯郡羽合町	79	度舞大塚	鳥取市秋里	埴丘上	前半	文様有。	
	37	須崎	名古屋市熱田区	表採	後 期	深安郡那神辺町	80	瀬高浜	鳥取市秋里	住居址	前半	文様有。	
	38	朝日	豊橋市瓜郷町	表採	後 期	須賀川	81	須賀川	朝倉町	溝	前半	文様有。	
	39	豊穂	豊橋市瓜郷町	表採	後 期	豊岡町	82	須賀川	豊岡町	住居址	前半	文様有。	
	40	高蔵	豊橋市瓜郷町	表採	後 期	西新町	83	西新町	福岡市早良区	住居址	前半	文様有。	
	41	見晴台	豊橋市瓜郷町	表採	後 期								
	42	瓜郷	豊橋市瓜郷町	表採	後 期								

第32表 手斧形土器集成表

土器出土遺跡名一覧表
 北鳥池（1）
 美園（2，7，8，20）
 船橋（3）
 成法寺（4，5，13）
 恩智（6，12）
 東山（9，11）
 大師山（10，16）
 亀井（14，18）
 上六万寺（15，17）
 瓜生堂（19，21）



第445図 手焙形土器形態分類図

	B ₃	B ₅	B ₆	
I	 22			土器出土遺跡名一覧表 東山 (22) 成法寺 (23) 美園 (24, 25, 26, 30, 37) 亀井 (27) 古池北 (28) 恩智 (29) 古池・豊中 (31) 上田町 (32) 庄内 (33) 鷹塚山 (34) 瓜生堂 (35, 36)
II	 23 24 25 26 27 28 29		 31 32 33 34 35 36	
III		 30	 37	

第446図 手焙形土器形態分類図

第33表 参考文献一覧

- ① 濑川芳則 1978 「弥生時代と農耕」『大阪府史』第1巻 大阪府
- ② 鷹塚山遺跡発掘調査団 1968 『鷹塚山弥生遺跡調査概要報告』
- ③ 森田克行、橋本久和 1977 『安満遺跡発掘調査報告書 第9地区一』高槻市教育委員会
- ④ 原口正三 1973 『紅葉山遺跡』『高槻市史』第6巻 高槻市役所
- ⑤ 桂本遺跡調査会 1972 『高槻市桂本遺跡調査概要』
- ⑥ 田代克己、堀江門也 1972 『鳴上郡御跡発掘調査概要・II』 大阪府教育委員会
- ⑦ 田中 琢 1965 『布留式以前』『考古学研究』12-2
- ⑧ 大阪府立花園高校地歴部 1970 『河内古代遺跡の研究』
- ⑨ 下村晴文、福永信雄 1977 『馬場川遺跡発掘調査報告』 東大阪市遺跡保護調査会
- ⑩ 東大阪市教育委員会 1978 『鬼塚遺跡発掘調査概要』
- ⑪ 勝田邦夫 1981 『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳発掘調査報告』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報22 東大阪市教育委員会
- ⑫ 佐原 真 1968 『畿内地方』『弥生式土器集成』本編2 日本考古学協会
- 瓜生堂遺跡調査会 1980 『恩智遺跡』
- ⑯ 中西靖人他 1980 『瓜生堂』 大阪文化財センター
- ⑰ 奥 和之他 1983 『若江北』 大阪文化財センター
- ⑯ 渡辺昌宏他 1985 『美園』 大阪文化財センター
- ⑯ 現地説明会時に実見
- ⑯ 大阪文化財センター 1980 『龟井・城山』 石神 怡 1971 『八尾市龟井遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- ⑯ 八尾市教育委員会 1983 『成法寺遺跡』
- ⑯ 田迎昭三他 1963 『船橋』 II 平安学園考古学クラブ
- ⑯ 原口正三 1968 『大阪府松原市上田町遺跡の調査』『大阪府立島上高校研究紀要』復刊第3号
- ⑯ 橋口吉文、森村建一両氏の教示
- ⑯ 第二阪和国道内遺跡調査会 1970 『池上・四ツ池遺跡』 10・11号
- ⑯ 石神 怡、鈴木陽一 1978 『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- ⑯ 豊中・古池遺跡調査会 1976 『豊中・古池遺跡発掘調査概要』そのIII
- ⑯ 京都市教育委員会 1982 『七ノ坪遺跡発掘調査概要』 京都市文化財調査概要7
- ⑯ 大阪府教育委員会 1980 『東山遺跡』 大阪文化財センター
- ⑯ 関西大学 1977 『河内長野大師山』
- ⑯ 沼沢豊、深沢克友他 1977 『東寺山石神遺跡』 千葉文化財センター
- ⑯ 工柴善通 1968 『北関東地方』 II 『弥生式土器集成』 本編2 日本考古学協会
- ⑯ 斎藤忠編 1978 『弘法山古墳』 松本市教育委員会
- ⑯ 甲斐忠彦 1968 『富山県永見市大洞洞窟出土の土師式土器』『考古学集刊』4-2
- ⑯ 小矢部市教育委員会 1982 『杉谷内床ノ山遺跡発掘調査現地説明会資料』
- ⑯ 参照
- ⑯ 橋本 正、神保孝造 1973 『串田新遺跡発掘調査概要』 富山県教育委員会
- ⑯ 大塚初重 1968 『東海地方』 II 『弥生式土器集成』 本編2 日本考古学協会
- ⑯ 静岡県教育委員会 1968 『静岡県文化財調査報告書』 第8集
- ⑯ 参照
- ⑯ 爱知県教育委員会編 1982 『朝日遺跡I』
- ⑯ 杉原莊介他 1968 『伊勢湾地方』『弥生式土器集成』 本編2 日本考古学協会
- ⑯ 参照
- ⑯ 名古屋市教育委員会 1968 『見晴台遺跡IV・V次発掘調査概要報告書』
- ⑯ 和島誠一他 1963 『瓜郷』 豊橋市教育委員会
- ⑯ 参照
- ⑯ 知立市 1976 『知立市』 上巻
- ⑯ 西尾市 1973 『西尾市史』 1
- ⑯ 津島市史編さん委員会 1968 『埋田遺跡発掘調査報告』
- ⑯ 紅村 弘 1959 『東海の先史遺跡一三河編』
- ⑯ 長浜市教育委員会 1977 『宮司遺跡・十里町遺跡調査報告書』
- ⑯ 林 博道 1981 『滋賀県における弥生式土器に施された絵画・記号の图形』『考古学雑誌』67-1 日本考古学会
- ⑯ 滋賀県教育委員会 1978 『滋賀県文化財調査年報』
- ⑯ 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会 1977 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書IV-1』
- ⑯ 大橋信彌氏教示
- ⑯ 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会 1978 『湖南中部流域下水道管理道路関連遺跡発掘調査報告書』 1
- ⑯ 田辺昭三他 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』 滋賀県教育委員会
- ⑯ 三重県教育委員会 1980 『納所遺跡』
- ⑯ 名張市教育委員会 1978 『藏持黒田遺跡』
- ⑯ 宇佐晋一、森川桜男 1961 『伊賀に於ける弥生式土器・土器集成』『伊賀郷土史研究』 5
- ⑯ 四日市埋蔵文化財委員会 1966 『四日市埋蔵文化財調査報告』 第1集
- ⑯ 三重県文化財連盟 1970 『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』
- ⑯ 京都市文化観光局文化財保護課 1974 『中臣遺跡』 京都市埋蔵文化財年次報告1974-1
- ⑯ (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977 『京都市埋蔵文化財研究所概報集』 1977-1
- ⑯ 高橋美久二 1979 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第3集 向日市教育委員会、長岡京跡発掘調査研究所
- ⑯ 江谷 寛 1971 『手焙形土器の再検討』『古代学研究』を参照
- ⑯ 参照
- ⑯ 参照
- ⑯ 奈良県立橿原考古学研究所編 1978 『大福遺跡』
- ⑯ 藤田三郎 1983 『唐古・雞』 田原本町教育委員会
- ⑯ 久野邦雄、寺沢薰 1980 『六条山遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
- ⑯ 奈良県教育委員会 1961 『橿原』
- ⑯ 橿原考古学研究所編 1976 『轡向』
- ⑯ 前園実知雄、伊藤勇輔 1974 『奈良県橿原町の古墳時代初頭の墳墓』『古代学研究』71
- ⑯ 奈良國立文化財研究所 1980 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』 II
- ⑯ 兵庫県社会文化協会 1967 『田能遺跡調査概要報告書』
- ⑯ 神戸市教育委員会 1980 『神戸市垂水区伊川谷町天王山古墳群第4号現地説明資料』
- ⑯ 県史編さん室 『和歌山県史』
- ⑯ 真壁忠彦 1958 『倉敷市酒津及び新屋敷遺跡出土の土器』『瀬戸内考古学』 第2号
- ⑯ 鎌木義昌 1963 『山陽地方』 II 『弥生式土器集成』 本編1 日本考古学協会
- ⑯ 鳥取市教育委員会 1978 『大桶遺跡・I』 鳥取市教育委員会 1983 『大桶遺跡・II』
- ⑯ 鳥取市教育委員会 1976 『鳥取・秋里遺跡』 鳥取市文化財調査報告書IV
- ⑯ 梅原末治 『因伯二国における古墳の調査』『鳥取県史蹟勝跡調査報告書』 第2集
- ⑯ 中部埋蔵文化財調査事務所 1981 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書III』 鳥取県教育文化財回報告書8 (財)鳥取県教育文化財団
- ⑯ 広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財センター 1981 『神辺御領遺跡』
- ⑯ 朝倉町教育委員会 1968 『須川遺跡群』
- ⑯ 折尾 学、常松幹雄他 1982 『西新町遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集

第8節 美園古墳と集落の関係

渡辺昌宏

1 美園古墳の時期

先述したように、美園古墳は以下に述べる三点の理由で古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられよう。

(1)調査区の土層断面観察結果から、調査区中央部の布留式集落と同一の遺構面に造られている古墳である。

(2)周濠から出土した土器及び埴輪類の時期は、布留式前半のやや新しい段階に属すると考えられる。

(3)古墳の立地が低地部の集落に隣接している。

2 周辺の同時期古墳（第447図）

周辺の主要な古墳を選んで、概略的に述べてみたい。

(1) 巨摩古墳

美園古墳の北東約1.9Kmに位置する。この古墳は本来5世紀後半に相当するが、周辺から検出された円筒棺に使用されている円筒埴輪が、時期的に遡るものであった。周辺にこの時期の古墳が存在する可能性が大きい。

(2) 萱振1号墳

美園古墳の北東約1.1Kmに存在する。一辺約26mの方墳で、美園古墳の埴輪とほぼ同時期になると思われる、精巧な輦形埴輪、家形埴輪、鰐付円筒埴輪等が出土した。美園遺跡同様に、隣接して同時期の集落が営まれていたようである。

(3) 西ノ山古墳

美園古墳の東方約4.7Kmに位置し、生駒山地西側斜面の丘陵上に立地する。全長約55.0mの前方後円墳で、主軸方向は北西から南東方向である。内部主体は竪穴式石室と思われ、豊富な副葬品を伴っていた。時期については、美園古墳より遡る可能性がある。

(4) 花岡山古墳

西ノ山古墳の南側約0.25Kmにある。西ノ山古墳同様に、生駒山地西斜面の丘陵上に立地していた。東西方向に主軸をもつ前方後円墳であったと思われるが、墳丘は残っていない。出土した埴輪は、美園古墳とほぼ同時期になると考えられる。

(5) 塚ノ本古墳

美園古墳の南西約4.3Kmに存在する。羽曳野丘陵の先端部に立地しており、墳形は円墳ないし前方後円墳のいずれかであろう。径約60mで円筒埴輪列をもち、家形埴輪等の形象埴輪が多数出土していた。美園古墳とほぼ同時期に造られた古墳と考えられ、墳形が明らかではないが東西



第447図 美園遺跡周辺の弥生時代後期～古墳時代前期遺跡分布図

方向に主軸をもつ前方後円墳の可能性がある。また周濠の外堤には、埴輪円筒棺が数基確認された。

特に美園古墳と萱振1号墳とは以下に述べる三つの共通性があった。

(1)平野部の集落に隣接して造営された古墳である。

(2)両者とも小形の方墳であった。

(3)墳丘の規模に比べて優秀な形象埴輪を伴っている。

3 集落との関係

美園古墳周辺部には、近畿自動車道関連の調査で明らかとなった、ほぼ同時期の集落が6つ存在する。北から順にあげれば、美園遺跡B地区集落、美園遺跡C地区集落、美園遺跡G地区集落⁽⁶⁾、佐堂遺跡A地区集落⁽⁷⁾、佐堂遺跡C・D地区集落⁽⁸⁾、久宝寺遺跡北地区Cトレンチ部分の集落⁽⁹⁾である。これより南については、当時の長瀬川(旧大和川)⁽¹⁰⁾の流路が確認されており、地形的に隔絶されると言えよう。また美園遺跡の北側に隣接する友井東遺跡にも、同時期の集落が営まれている可能性がある。

布留式の集落に隣接して水田、畠等の耕作地跡も見つかった。北から言えば、美園遺跡B地区集落の北側、美園遺跡B地区集落とC地区集落の中間部分。美園遺跡G地区集落と佐堂遺跡A地区集落との間。佐堂遺跡C・D地区集落と久宝寺北地区Cトレンチ部分集落との間に、それぞれ広がっている。

墓域は友井東遺跡の南端から美園遺跡A地区にかけてと、美園遺跡C地区南端部、佐堂遺跡C・D地区集落の南側でそれぞれ検出された。

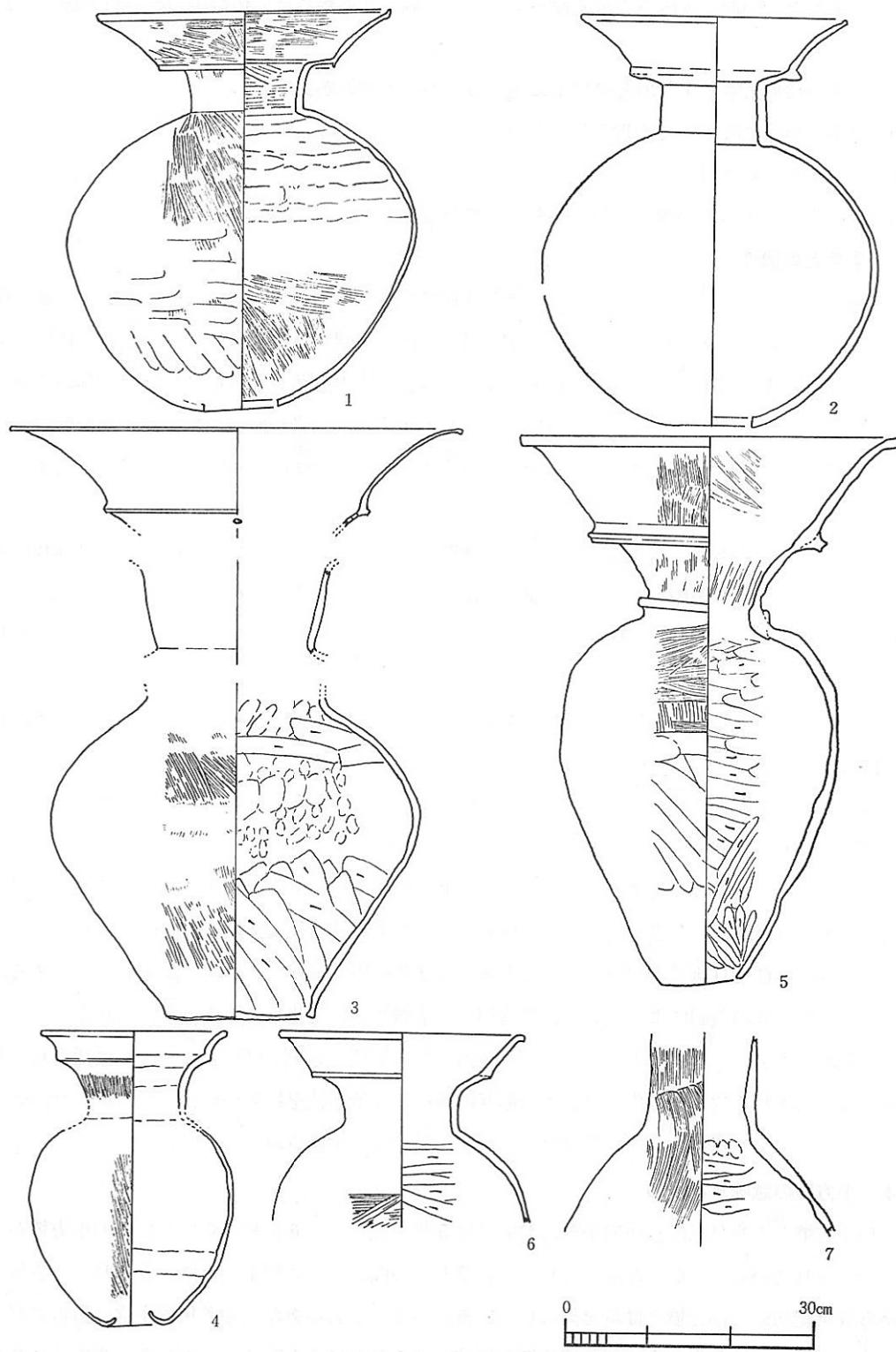
このように各集落は一定の距離を置いて存在しており、その間には水田、畠等の耕作地と墓域が設けられている。

各集落に伴う墓制にも差異が見られた。友井東遺跡南端から美園遺跡A地区にかけて広がる墓域では、方形周溝墓と土器棺墓が確認されている。美園遺跡C地区南端には美園古墳がある。さらに佐堂遺跡C・D地区集落の南側には土壙墓が2基検出された。各集落に隣接して存在する。それぞれの墓域の墓制による差異は、集落相互の階層性を具現化していると考えられる。

大胆な仮説を述べれば、大河川によって区画される領域(水利関係等によって包括される地域)内に営まれる数ヶ所の集落は、集落相互に緩やかな階層性を持ちつつ、1つの単位を形成していたのではなかろうか。その単位を代表する首長の墓が美園古墳であろう。

4 小方墳の意味するもの

長原古墳群の発見以降、河内平野においては5世紀後半から6世紀中葉にかけての小方墳が多數確認されている。⁽¹²⁾しかしながらこれらの古墳と、美園古墳、萱振1号墳に代表される4世紀末から5世紀初頭の小方墳とは趣を異にしている。つまり前者があたかも各集落単位に造営されて⁽¹³⁾いるのに対して、後者の方はより広範囲な領域内で1基だけ造られるような状態が想定されるからである。このことは、河内平野部において5世紀後半以降の在地首長の領域がかなり縮小され



第448図 各古墳出土の壺形埴輪

ることを意味すると同時に、古墳を媒介とした「大和政権」の在地支配強化が考えられるのではなかろうか。それを物語るかのように、美園遺跡では5世紀中葉以降意識的に集落が移動させられており、その背景には政治的な動向が密接に働いていると想像される。

5 壺形埴輪の意味するもの

近畿地方では、美園古墳を含めて数ヶ所の古墳から壺形埴輪が出土している。ここでは代表的な資料を抽出して比較すると同時に、美園古墳に壺形埴輪が伴う意味を探ってみたい。

壺形埴輪を伴う主な古墳としては、箸墓古墳（第448図1）、桜井茶臼山古墳（第448図2）、小石塚古墳（第448図3）、壺井御旅山古墳（第448図4）、美園古墳（第448図5～7）があげられる。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾ 形態的な特徴では小石塚古墳、壺井御旅山古墳、美園古墳の資料が類似していた。これら3つの古墳は時期的にも近接しており、壺形埴輪の4世紀末以降の姿を代表している。しかし美園古墳を除いては、円筒埴輪を伴っていた。美園古墳は壺形埴輪だけによって周囲を巡らしていたと思われ、その点が極めて特異である。古墳を構成する要素の中で、埴輪の占めるウェイトはかなり大きかったと考えられる。あたかも集団の独自性が、壺形埴輪によって代表されているかのようである。飽くまで想像の域を出るものではないが、初めて埴輪の使用を許された在地首長の要請によって製作された埴輪には、前時期からの伝統的墓制であった方形周溝墓の供献土器のイメージが、その要望の中に入っていたのかもしれない。

塚ノ本古墳等によって代表される首長権の下に構成される首長の1人として、美園古墳の被葬者は「大和政権」から埴輪の分与を許されたのではなかろうか。だからこそ一辺約7mの極めて小規模な方墳にも拘らず、精巧な家形埴輪を持ち得たのであろう。観念的な説明になってしまったが、それを実証していく作業が今後に残されている。

本節の作成にあたっては、広瀬和雄、天野末喜、高島徹、野藤和也の各氏より御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

註(1) 玉井功他『巨摩瓜生堂』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1981年。

(2) 広瀬雅信『萱振遺跡現地説明会資料I』大阪府教育委員会 1984年。

(3) 『大阪府文化財分布図』大阪府教育委員会 1977年。

(4) 註(3)文献、川西宏幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第2号 1978年。

(5) 中西靖人他『長原』(財)大阪文化財センター 1978年。

永島輝臣慎氏他『長原遺跡発掘調査報告』長原遺跡調査会 1978年。

(6) 三宅正浩編『佐堂(その1)』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1984年。

(7) 阪田育功他『佐堂(その2)－I』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1984年。

(8) 『久宝寺遺跡現地説明会資料(I)』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1982年。

(9) 註(8)文献参照。

(10) 亀島重則編『友井東(その1)』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1984年。

(11) 萱振1号墳周辺及び巨摩古墳周辺にも、数ヶ所の集落によって構成される領域が存在すると考えら

れる。

- (12) 註(5)文献参照。
- (13) 巨摩廃寺遺跡（5世紀後半）、山賀遺跡（6世紀中葉）、友井東遺跡（5世紀後半）、亀井遺跡（5世紀後半）、城山遺跡（5世紀後半）。
- (14) 長原古墳群を除く。長原古墳群のあり方は、群集墳につながる政治的背景を持つと考えられる。
- (15) 底部穿孔壺形土器との明確な区別は難しい。ここでは、焼成前に穿孔された大形のものを広義の壺形埴輪と呼ぶことにする。
- (16) 中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要第27号』 1976年。
- (17) 末永雅雄・小島俊次編『桜井茶臼山古墳』奈良県教育委員会 1961年。
- (18) 柳本照男編『史跡大石塚・小石塚古墳保存事業に伴う調査報告』豊中市教育委員会 1980年。
- (19) 藤沢一夫他『羽曳野市壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報』大阪府教育委員会 1968年。
- (20) 細部についてはかなり異っているが、体部が長くなる点で共通しており、本来の壺の形から変化してきている。
- (21) 墓輪そのものが与えられるというよりも、工人の派遣等を指す。塚ノ本古墳の被葬者を媒介とした埴輪の分与も考えられる。

第9節 美園遺跡の埋没条里

——その施行起源について——

岡本敏行

1

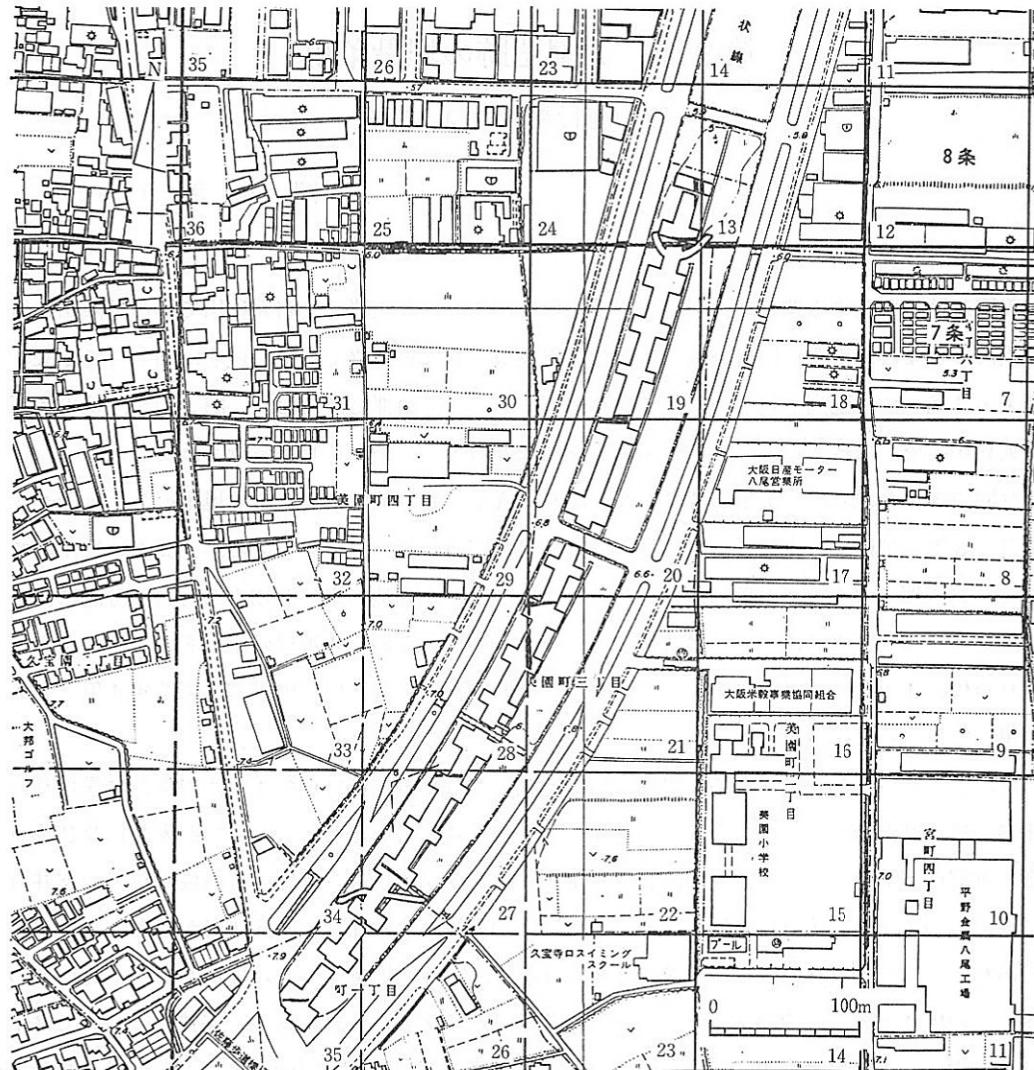
美園遺跡の所在する地域は、旧河内国若江郡に属する。若江郡は、旧大和川である長瀬川と玉串川にはさまれた南北に細長い地域である。現条里地割は正方位で、南から北に向かって1条・⁽¹⁾2条・3条……と配列されていることが知られている。若江郡だけでなく、旧大和川流域の各郡は大和川の流れに沿って上流から下流の方向に数えるように条里地割が施行されている。

今回調査した地点は、7条と8条にまたがり、A地区とB地区の境である現里道が、そのまま7条と8条の境になっている。里については一般に固有名詞が付されているが、調査地域だけではなく、若江郡内のすべての里名が現存していない今日、調査地の里名を知ることは不可能にちかい。したがって、里名については不明であるが、玉串川から西へ4番目の里にあたることから、これを仮に4里とすることにする。すなわち、今回調査した地点は河内国若江郡7条4里と8条4里ということになる。

次に、これら7条4里と8条4里内の坪の配列であるが若江郡は東接する河内郡とは異なり、坪名の遺存度が極めて少ない。しかし、比較的坪名の残っているところとして旧友井村及び佐堂村、東郷村がある。その内、今回調査した7条4里と8条4里は、偶然にも旧佐堂村と旧友井村にあたるのである。佐堂村の坪名を調べてみると四の坪～九の坪までの6坪名が遺存していることがわかる。その遺存の仕方から7条4里の坪配列は、南東隅より一の坪が始まり、北へ二の坪、三の坪と進み、南西隅が三十六の坪で終る千鳥式であったと思われる。友井村については十三～十六という4坪名が残るが、その位置がばらばらで坪の配列を明確にすることはできなかつた。そこで、以下の説明のために、便宜的に7条4里と同じように南東隅より一の坪が始まり、南西隅で終る千鳥式の配列であったと仮定しておきたい。

2

さて、今回の美園遺跡の調査は、南西約600mにもおよぶことから、部分的ではあるが一時に広範囲の条里調査がなされるということで注目された。まず、A地区、もしくはB地区で7条と8条の境、A地区で8条4里13坪と24坪の境、B地区で7条4里19坪と20坪の境、C地区で7条4里20坪、21坪、28坪、29坪の交点、及び21坪と28坪の境、D地区で7条4里27坪と28坪の境が検出されることが期待された。しかし、D地区中央部から南の長瀬川にかけては、航空写真や戦前の地形図によると、長瀬川の影響のためか条里の方向がかなり乱れていることがわかる。そのため、図面上ではE・F地区で7条4里26坪、27坪、34坪、35坪の交点が検出される可能性もある。



第449図 美園遺跡条里推定復原図

ったが、それについては、当初からあまり期待されなかった。事実調査の結果、条里方向とは異なる、畦畔や溝が、ばらばらの方向で検出されていることから、現条里がこの付近、すなわち長瀬川に沿った部分では施行されていなかった可能性が強いと思われる。以下、美園遺跡の現条里地割がどこまでさかのぼりえるかを検討してみよう。

ところで、一般に条里地割は大化改新後順次施行されたと考えられるが、条里制施行起源については諸説がある。例えば、秋山日出雄は、条里開発を1国あるいは1郡毎に統一されたのではなく、長い期間に一定の区域ごとに条里開発が行なわれたとし、古道や古墳との関係を検討することによって、条里開発が大化改新前、弥生時代後期から古墳時代までさかのぼるとした。⁽²⁾また、渡辺久雄は、猪川流域の条里を考察することによって、方向の異なる条里を地磁気年代学によつて3世紀から7世紀にわたって施行されていることを主張した。これらのように歴史地理学

⁽³⁾

のほうからのアプローチは、概して古くみる傾向があり大化改新前後、もしくはそれ以前と考えられている場合が多い。しかし、現在までの考古学的調査では、埋没条里の上限が平安時代までとされている。⁽⁴⁾ 特に条里の中心と考えられている奈良盆地では、現条里は平安時代末から鎌倉時代までとされ、大化改新前後まで、さかのぼるものは認められていないといわれている。⁽⁵⁾

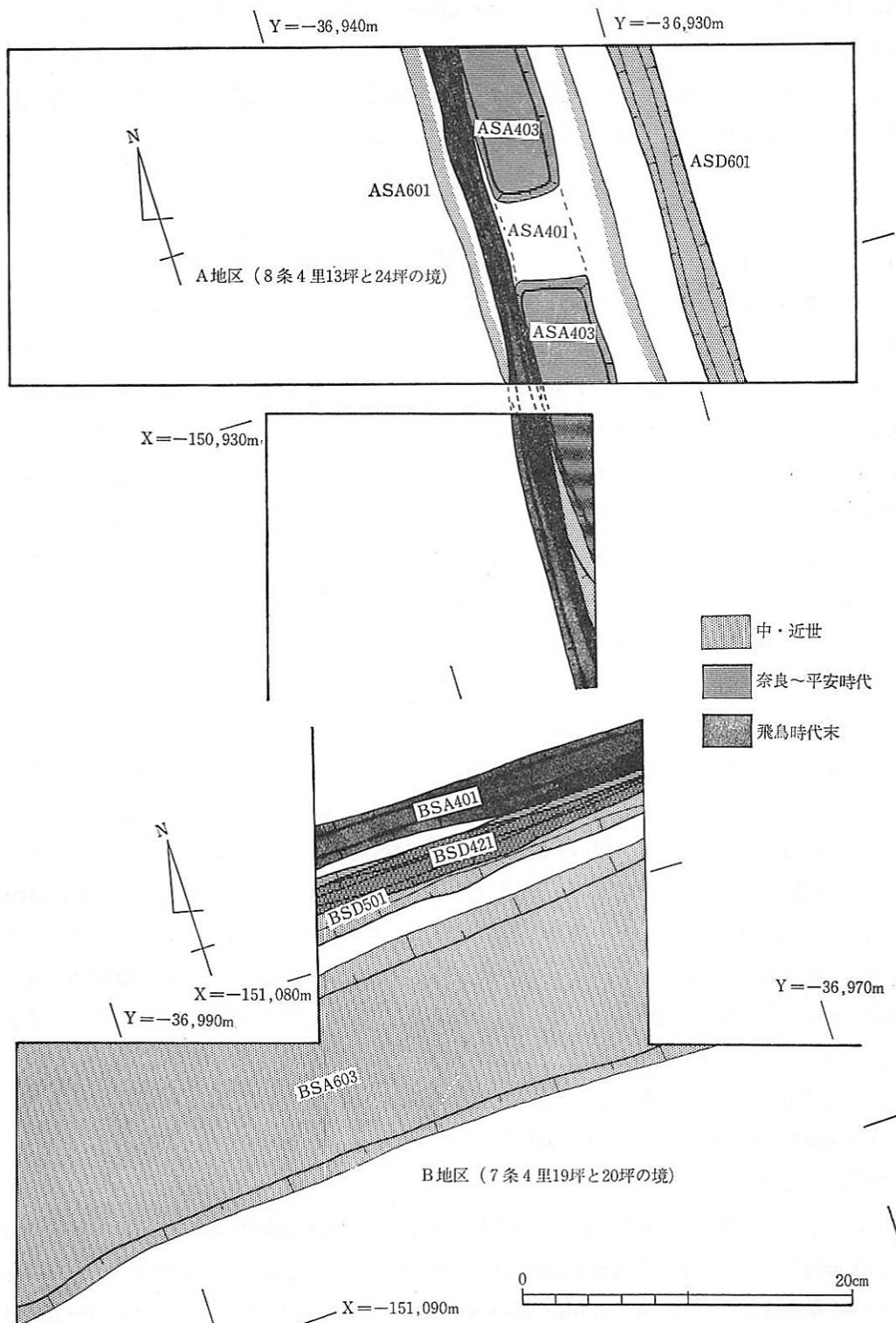
以上、前置きが長くなつたが、各地区の坪境について概観することにしよう。

3

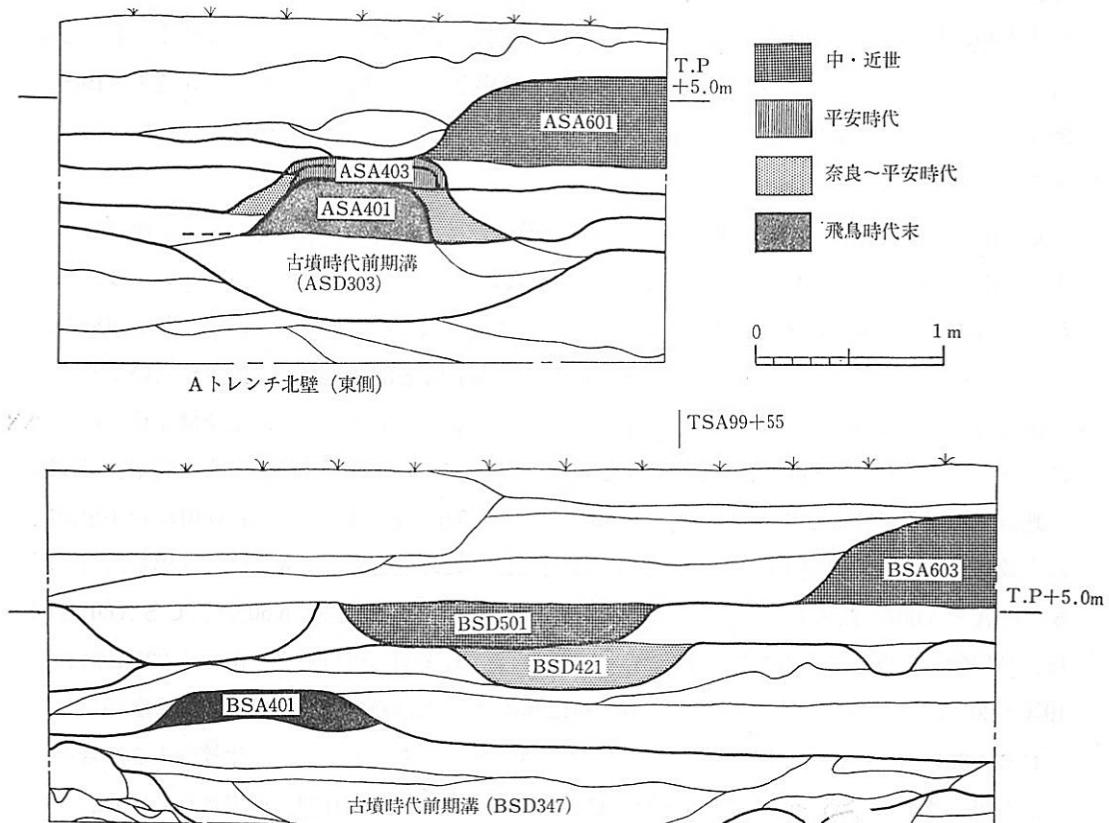
まず、7条と8条の境を検討してみよう。A地区とB地区の境に東西方向の現里道が走る。条里復元した場合、この里道が現条里地割の7条と8条の境となる。すなわち、北側（A地区側）が8条、南側（B～G地区側）が7条というわけである。この里道部分の調査については、近畿自動車道建設にさきだつコンクリート水路付替に伴う事前調査で実施した。しかし、トレンチ幅が狭く、しかも、現里道内約1m下層には、径40cmの水道管が埋設されていることから、かなりの攪乱をうけており、調査した段階では、現里道にさきだつのような遺構については確認することはできなかった。また、現コンクリート水路部の調査については2Aトレンチで実施することができたが、この部分についても、表土より約2m下層まで攪乱されており、明確にはわからなかった。ただ一部で旧水路の護岸杭と思われる杭列の一部を検出することができた。この水路が、いつまでさかのぼるかについては知ることができなかつたが、現水路が旧水路の上に造られていることは確実のようである。

次にA地区での8条4里13坪と24坪の境についてみてみよう。図面上ではA地区、特に1Aトレンチで検出されることになっているが、調査区内での現地表面では坪境の痕跡は認められなかつた。しかし、その延長上、美園小学校東側で水路が残されている。近世遺構面ではこの水路の延長と条里復元した場合の坪境にはほぼ合致した、ASA601とASD601を検出した。ASA601は幅が約4.5m強もあることから当時の里道と思われ、そのまま坪境をなし、その東側に沿って坪境溝ASD601が流れていたものと想定される。なお、水路切替トレンチでASA601の一部を検出している。中世の時期については、すでに第Ⅱ章、第2節、第5・6項で説明しているように、元来は坪境の畦畔もしくは溝があったと考えられるが、近世遺構面と重複していることから、すでに削平されていたものと思われる。中世遺構面下層の、奈良～平安時代遺構でも、上層のASA601とほぼ同一場所でASA403が検出されている。幅2m強あることから、おそらく里道を兼ねた坪境である。

さらに下層の飛鳥時代（7世紀後半）遺構面でも、上層のASA601・403とほぼ同一場所に幅は約1m弱とせまくなるが、ASA401が検出されている。なお、偶然かもしれないが、古墳時代前～中期遺構面で上層のASA401・403・601とほぼ同一地点でこれらとまったく同一方向のASD303を検出したことを付け加えておく。8条4里13坪と24坪の境は、この地点では少なくとも7世紀後半までさかのぼることが確実のようである。これら各時期の坪境・畦畔・溝の重複



第450図 A・B地区条里坪境溝・畦畔重複関係図



第451図 A・B地区条里坪境溝・畦畔重複関係断面図

位置は第450・451図に示したとおりであり、ほぼ同一場所で重層していることがわかる。

B地区7条4里19坪と20坪の境は、現調査地点では削平・盛土のためその痕跡は認められなかつたが、その延長上と考えられる31坪と32坪の境に現里道の一部が走ることが判明している。この地点もA地区の8条4里13坪と24坪の境同様、現条里制に合致した7世紀後半から近世までの坪境と考えられる畦畔や溝をほぼ同一地点で重層的に検出することができた（第450・451図下段参照）。BSA603は近世のもので、7条と8条の境の現里道より南へ約115m離れている。幅が6mもあることから、おそらく31坪と32坪の境をなす里道の延長と思われる。中世の時期は、里道及び畦畔は検出されなかった（里道もしくは畦畔があった可能性があるが、BSA603が中世遺構面と重複しているため削平されている可能性がある）が、BSD501の下層、ほぼ同一地点でBSD421を検出している。上層坪境溝BSD501は下層坪境溝BSD421を意識して掘削されていることは明らかであろう。なお、20坪内ほぼ中央部（B地区南側）で条里の方向に合致した東西方向の比較的大きな畦畔（BSA403）が検出されているので20坪内でさらに細分されていた可能性がある。

下層飛鳥時代（7世紀後半）遺構面では、上層BSD421直下、ほぼ同一地点で東西方向の畦

畔B S A401を検出した。その位置からいって坪境畦畔と断定してまちがいないであろう。このB S A401を境に北側と南側では高低差が異なり、北側が高く畑となり、南側は低く、水田となっている。水田内には東西方向の畦畔B S A402も検出されている。したがって8条4里19坪と20坪の境についても7世紀後半（第Ⅲ4半期）までさかのぼることが明らかになったといえるであろう。

C地区7条4里20坪、21坪、28坪、29坪の交点及び坪境がどのようにになっているか検討してみよう。調査区内の現状では、その痕跡は全く認められなかつたが、南北の坪境については、その延長と考えられる東側の8坪と9坪の境と推定されているところで東西方向の現水路が認められる。また東西の坪境についても、やはりその延長上北側19坪と30坪の境と推定されているところに南北方向の現水路が流れている。これら現両水路の延長上の交点が、図面上では4Cトレンチにあたる。すなわち、20坪、21坪、28坪、29坪の交点である。この図面上での交点直下、ほぼ同一地点で、近世の畦畔C S A601とC S A602の交点が検出されている。C S A601は現条里方向に合致した南北方向の畦畔で、20坪と29坪、21坪と28坪の坪境をなし、A地区で検出した南北坪境畦畔A S A601の推定延長上より西へ約110mの地点に位置する。C S A602は、C S A601と同様、条里制に合致した東西方向の畦畔で、7条と8条の境である現里道より南へ約235m離れ、19坪と20坪の境であったB S A603より南へ約120m離れたところに位置している。距離からしてもC S A601とC S A602は坪境畦畔であることが明らかである。なお両者は比較的大きかったことから里道であった可能性がある。また、C S A601に沿ってC S D601も検出されている。

C S A601とC S A602は明確には検出することができなかつたが、何度かの修復、拡張がなされているようで、その上限は14世紀までさかのぼる可能性がある。⁽⁶⁾ C S A601の下層は同一地点で幅9mの溝C S D501を検出した。この溝は長瀬川から枝分れした自然流路を、用水路に改良したものと考えられ、D地区のD S D404とD S D501と同一の溝と考えられ、その延長は南接する佐堂遺跡でも検出されている。⁽⁷⁾ 方向もそれぞれの地区で、南北方向、東西方向と異なるが、ほぼ現条里方向に一致しているところに注目されよう。C地区でのC S D501は12世紀もしくは11世紀までさかのぼる可能性があり、13世紀までは確実に流れているようである。14世紀に何らかの理由で埋められ、かわりに坪境の畦畔（C S A601）がつくられている。したがってこのC S D501は用水路であり、かつ坪境の役目をはたし、上層のC S A601は溝と畦畔の差はあるが、そのまま坪境を世襲することになる。東西C S A602の下層についてはC S D501幅が広いということから確認することはできなかつた。また、さらに下層10世紀以前についても、C S D501が比較的深かったということから、同下層及び周辺では坪境らしきものは検出することができなかつたが、後述するD地区と考え合せて9世紀まではさかのぼる可能性があるが、それ以前については、もともとなかった可能性が強い。

最後に美園遺跡の今回の調査で最も南で検出した、D地区の7条4里27坪と28坪の境についてみてみよう。同地区も、他の地区同様、盛土等によって、現地表面ではその痕跡は認められなか

った。ただ、図面上でその延長上と考えられる地点、9坪と10坪の境のところに里道の一部が残っている。近世遺構面では、現条里推定線直下（9坪と10坪境の里道西側延長上）で東西方向の大畦畔のD S A601を検出した。この畦畔はC地区のC S A602より南へ約110mの6町の距離にはほぼ等しいことから、27坪と28坪の坪境畦畔であることはまちがいない。この下層、室町～鎌倉時代にかけても、D S A601と重複するようにD S D501が検出されている。この溝が坪境の溝であることは明らかである。また、ほぼ同一地点の下層で平安時代の（9世紀までさかのぼる可能性がある⁽⁸⁾）畦畔D S A401が検出され、さらにこの北側に接してD S A401平行に走るD S D401を検出した。これらが坪境の畦畔と溝であることは否定できないであろう。これより下層は飛鳥時代の河川（おそらくこの当時の長瀬川であろう）のため条里に関する遺構は検出することはできなかった。

以上、美園遺跡における現条里地割はA地区（8条4里13坪と24坪の境）とB地区（7条4里19坪と20坪の境）では7世紀後半までさかのぼることが確実となり、もしかすると古墳時代前期までさかのぼる可能性があるかもしれない。それに反して、C地区（7地4里20坪、21坪、28坪、29坪の交点）では11世紀、D地区（7条里27坪と28坪の境）では9世紀までしかさかのぼらなかった。同じ6町四方内で時期差があるのは不思議であるが、これは、D～G地区にかけて飛鳥時代（6～7世紀代）の旧長瀬川が流れついたためであり、D地区では当然条里地割は施行することはできなかつたであろうし、C地区では、現長瀬川周辺と同じように当時の長瀬川の氾濫原であったと考えるならば、その疑問も自然に解けるであろう。

4

以上のように、美園遺跡では7世紀後半以後の埋没条里がほぼ同一地点で重複していることがわかり、現条里地割はそれを世襲していることが確認された。したがって、美園遺跡における条里施行は7世紀後半までさかのぼることは前述の通りである。ただ、A地区（8条4里13坪と24坪の境）とB地区（7条4里19坪と20坪の境）では、7世紀後半の坪境畦畔よりさらに下層で同一方向の古墳時代前期の溝及び杭列が検出されていることから、何らかの方画地割的なものがあった可能性があり、もし秋山がいうようにこの時期に方画地割があったならば、その後の条里も、これを参考にしたとも考えられる。しかし、今回の調査は面積が狭かったことから断定できないが、偶然であった可能性のほうが強いようである。今後の資料の増加をまちたい。⁽⁹⁾

美園遺跡に北接する友井東遺跡では、8世紀までさかのぼる坪境溝が検出されている。また、南接する佐堂遺跡や久宝寺遺跡では、9世紀までさかのぼる条里方向に合致した畦畔が検出されているが、それより古いものは確認されていない。これは、当時の長瀬川の位置にも関係するのであろう。⁽¹⁰⁾

ところで、河内地方、特に美園地域は大和川を通じて大和と関係をもっていたことから、古代国家成立の中核部であり、先進地域であったことと思われる。また、統一国家を実現した大和朝

廷の経済的基盤は畿内地方の豊かな農業生産力にあったと考えられることから、美園地域の条里開発とは無縁ではなかっただろう。この地域が、早くから条里開発された理由としては、大和川やその支流が幾条にも流れていることから灌漑が容易であったためと考えられる。

美園遺跡で埋没条里の遺構が各時代ごとに重層的に検出されたことは、この地域が偶然にも沖積平野であったことから、再開発のおりにも、削平されずにすんだためであろう。さらに中世以降の莊園制に至っても、旧地割が重視されたのではなかろうか。

なお、直接条里とは関係ないが、中世以降でよく検出される、いわゆる素掘り溝は現水田の方向にほぼ一致し、また河内特有の搔上田についても13世紀までは確實にさかのぼるようである。

以上、今後埋没条里の資料が増加することを期待するとともに、大化改新が実際にあったかどうかは別として、再検討してみる必要があるのではなかろうか。

- 註(1) 若江郡の復原条里については、荻田昭次「河内郡・若江郡条里の復原」(『池島町の条里遺構一調査概報一』東大阪市遺跡保護調査会 1973年)を参考にしている。
- (2) 秋山日出雄「条里制地割の施行起源」『日本古文化論攷』櫻原考古学研究所編 1969年。
- (3) 渡辺久雄「条里制起源に関する一考察」『地理学評論』 1961年。(同氏『条里制の研究』 1967年所収)
- (4) 木原克司「長原遺跡の水田址をめぐる諸問題」『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ(財)大阪市文化財協会 1982年。
- (5) 奈良国立文化財研究所編『条里制の諸問題』 I p.57・58の中での石野博信氏の意見による。 1982年。
- (6) 当地区調査担当者の渡辺昌宏氏の御教示による。以下C地区については同氏の教示に負うところが大きい。
- (7) 三宅正浩「中世の佐堂遺跡について」『佐堂』(その1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (8) 当地区調査担当者の小野久隆氏の御教示による。以下D～G地区については同氏の教示に負うところが大きい。
- (9) 訳(2)と同じ。
- (10) 亀島重則編『友井東』(その1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (11) 訳(6)と同じ。

第10節 美園遺跡 F S K501出土瓦器椀について

小野久隆

1 FSK501

F地区北端部Y = -37,145m、X = -151,400m地点に於けるFSK501は、一部が調査区外の為に全容は不明であるが推定径3~4m、深さ0.3mを測り、円形を呈するものと思われる。土坑は下層の砂層上面に掘り窪まれている。この砂層は、E~G地区にかけて存在し、下層に飛鳥時代の自然河川（古大和川、幅約50m）が流れ、特にF地区は砂層が隆起している。周辺には同時期の遺構として、DS D506、FS D505、FS K501、DS E501、ES E503、DA A501があり、これらの北側に離れてDS D507、DS E502が在り、南側ではGS D501、GS K503、GS E504等と、他に多くの小溝（素掘り溝）が在る。

土坑内の埋土は、大きく上層、中間層、下層の3層に区分され、上層は黄灰色土層（褐色の鉄分が沈着）ないし、暗黄灰色土層（灰を含み、赤褐色の鉄分が沈着）で、中間層は暗灰色粘土層または、黒灰色粘土層である。下層は、暗灰色粘土層（細砂含む）となっている。

上・中間層からの出土遺物は、瓦器片口、瓦器鉢、瓦器椀、瓦器小皿、瓦質土器、土師器羽釜、土師器中皿、小皿の完形品が多く、細片も多く出土し、また須恵器も出土している。須恵器は上層が堆積した後に更に上層の遺物が落ち込んで入り込んだものと推測できる。この土坑の性格、用途を考えるうえで参考となる遺物に、炭、荀（スサ）、焼けた竹や木片、焼けた粘土塊、獸骨の歯が入っていた。

次に、遺物について、特に瓦器椀の形態について検討を加えたいと思う。遺物説明の項と若干重複するかもしれないが、了承願いたい。

2 瓦器椀

出土瓦器椀の大半は、内面口縁部に沈線は施されず、体部外面には指圧痕が多く明瞭に残されている「和泉型」に属するものである。⁽¹⁾ いずれも高台は低く簡単なもので形骸化している。器高が低いものは（F460）3.6cm、高いものは（F465）5.1cmを測る。また口径の小さいものは（F472）⁽²⁾ 14.3cm、大きいものは（F462）⁽³⁾ 17.7cmを測り、器高指数は23.2~33.6で高台径指数は24.5~35.7である。

しかしながら詳細に観察すれば更に分類は可能で、大きな目やすとして、暗文と高台に特徴があり、それぞれ2つずつのタイプに分類出来るようである。

先ず暗文の特徴より2つのタイプに分類出来、Aタイプ細い暗文と、Bタイプ太い暗文の2型式である。Aタイプの瓦器椀は、F452・456・457・458・462・468・469・482・547で、内面部に横方向の暗文と、見込み部分に平行線状の暗文を施している。とくにF470、内面体部の暗文は密に施しているが、見込み部分の暗文はやや簡素に仕上げている。Bタイプの瓦器椀はF453・

459・464・465・466・467・471・472・474で、Aタイプと同様に、内面体部に横方向の暗文と見込み部に平行線状の暗文を施している。F 472とF 474は、内面体部の暗文が太く、見込み部分の暗文がやや細く、とくに見込み部分の暗文の間隔が粗いもので、暗文の数も少ない。Aタイプの器高指数の平均値は、28.4で、高台径指数の平均値は、29.6である（1点不明）。

Bタイプの器高指数の平均値は29.9で、高台径指数は28.8である（2点不明）。

次に、高台の特徴より、aタイプ断面形が逆三角形状のものと、bタイプ断面形が、台形ないし方形状のものに分類できる。

前者のaタイプには、F 452・455・457・460・461・464・465・467・468・470・471・472・474・476・482・547があり、特に、F 467は高台は他の瓦器碗に比して高くしっかりと貼り付けている。F 461の高台は一番低いものであるが、端部が尖っているものである。後者のbタイプには、F 454・456・458・459・475がある。F 454はしっかりと高台を貼りついている。F 460は他のものに比して高台が一番低く、器高自身も低い。

これら他の特徴以外からも分類が可能のようである。①口縁部が外反するものと、②やや内傾するものと、③そのまま真っすぐに伸びていくもの。①にはF 454・458・459・460・463・469・475・476・482があげられ、②にはF 452・461・462・465・466・470・474があげられる。③はF 456、B 457・464・467・471があげられる。また器高によっても分類できる。

器高指数30以上のもの、F 452、F 454・455・465・467・468・472・475・476、

30以下のもの、F 456・457・458・459・460・461・464・470・471・474・482・

547

高台指数30以上のもの F 452・458・457・460・464・474・476・482・547、

30以下のもの F 454・455・456・457・461・465・467・468・470・471・472・475

3 瓦器碗の年代

F S K 501出土の瓦器碗はいつ頃のものであろうか。それを決定付ける紀年銘の書かれた資料は本遺構より出土していないが、多くの方たちが編年されているので、これらの編年資料にあてはめてみようと思う。F S K 501から出土した瓦器碗はほぼ同時期のものと思われ、白石氏の編年によれば第Ⅲ段階の7型式から8型式に位置付けられる。⁽⁴⁾ 本遺構で新しい時期のものとしては、F 456・458・460・461でF 458、F 460は器高指数が25以下である。それに近いものとして、F 456・461がある。これらの遺物は白石氏の編年で第Ⅲ段階8型式に比定でき、また橋本氏の編年では⁽⁵⁾ Ⅲ期に属し、尾上氏の編年ではⅣ期、長原遺跡の編年ではⅢ-2、Ⅲ-3に位置付けられる。⁽⁶⁾ 若江遺跡ではⅠ型式に比定できる。また、先の遺物よりもやや古い時期のものとしては、F 465・472・475・454・476・468があげられる。これらの遺物を先の編年に当てはめると、白石氏の編年では⁽¹⁰⁾ Ⅲ型式7段階に、橋本氏の編年では⁽¹¹⁾ Ⅲ期に、尾上氏の編年では⁽¹²⁾ Ⅳ期に、長原遺跡では⁽¹³⁾ Ⅲ-1ないしⅢ-2に、若江遺跡ではⅠ型式に相当するものと思われる。⁽¹⁴⁾

F S K 501出土の瓦器碗の実年代は、若江遺跡の編年を除いて、ほぼ13世紀初頭から13世紀後

半の時期に位置付けられる。若江遺跡の編年では i 型式を12世紀末から13世紀初頭におかれている。

4 まとめ

F S K501 出土の瓦器椀の時期は、ほぼ13世紀初頭から13世紀後半に位置付けられよう。土坑の性格としては、土坑の壁に焼けた痕跡を確認できなかったものの、瓦器椀の生焼け、焼けた粘土塊、焼けた竹片・木片等が出土していることから、窯跡に近い施設か、もしくは、廃棄留等の施設が考えられる。

この時期の周辺の遺跡としては、すぐ南側に佐堂遺跡が所在し、掘立柱建物跡と井戸が検出されており、井戸内より瓦器椀が検出されている。⁽¹⁵⁾ F S K501 は恐らく佐堂遺跡に伴うものであろう。美園遺跡より北西へ1.3Km離れて弥刀遺跡があり、瓦器椀が曲げ物井戸より出土している。⁽¹⁶⁾ また、本遺跡より東へ約1Km離れて萱振遺跡があり、本遺跡と同様に土坑が検出されている。土坑内では炭の層がレンズ状に堆積し、焼土塊や木片が検出されている。遺物として瓦器椀、土師小皿等が出土しており、近くに建物跡が検出されている。⁽¹⁷⁾

他の遺跡としては、東大阪市若江遺跡、八尾市宮町遺跡、八尾市釈迦寺山遺跡、八尾市金性寺遺跡、⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾ 八尾市竜華寺遺跡があげられる。⁽²⁰⁾⁽²¹⁾⁽²²⁾

今回は、瓦器椀のみについて報告したが、充分に語りつくせなかった。他に本遺跡とともに一括資料として、瓦器片口鉢、瓦器小皿、土師中・小皿、羽釜の遺物が出土しており、瓦器椀についても他の遺構より出土しているものがある。今後、これらの遺物も検討していきたいと思っている。

中河内地域は最近、発掘調査が多くなり、中世遺構も多く検出されている。資料もまた、さらに蓄積されつつあり、希薄であった中河内地域の特色も今後明らかになることであろう。

本文を作成するにあたって、渡辺昌宏、三宅正浩氏の両氏（大阪府教育委員会）には常に御教示を頂き、また、広瀬雅信氏（大阪府教育委員会）からは萱振遺跡について、また米田敏幸氏（八尾市教育委員会）からは宮町遺跡について、弥刀遺跡については、下村晴文氏（東大阪市教育委員会）より御教示を受けた。堺市教育委員会の森村健一氏には中世土器関係の多くの文献資料や遺物を見せて頂きお世話になった。末筆ながら深く感謝致します。

註(1) 橋本久和「瓦器椀の地域色と分布」『摂河泉文化資料』摂河泉文庫、19・20号、1980年。

(2) 器高÷口径×100

(3) 高台径÷口径×100

(4) 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』古代学研究会、54.1969年。

(5) 前掲註(4)

(6) 前掲註(1)

(7) 尾上実『狭山遺跡・輕里遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会、1978.3.

- (8) 鉢木秀典他『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』財団法人大阪市文化財協会、1982。
- (9) 勝田邦夫・阿部嗣治『若江遺跡発掘調査報告書I(遺物編)』財団法人東大阪市文化財協会、1983。
- (10) 前掲註(4)
- (11) 前掲註(1)
- (12) 前掲註(7)
- (13) 前掲註(8)
- (14) 前掲註(9)
- (15) 三宅正浩氏より教示。
- (16) 下村晴文「弥刀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集(1980年度)』1981、東大阪市遺跡保護調査会。
- (17) 広瀬雅信氏より教示。
- (18) 前掲註(9)
- (19) 米田敏幸他『宮町遺跡発掘調査概要Ⅰ』八尾市教育委員会、1982。
- (20) 『八尾市文化財調査報告7昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会、1981。
- (21) //
- (22) //